
IS いとこが如く

鎧竜機

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS いとこが如く

【Nコード】

N7589V

【作者名】

鎧竜機

【あらすじ】

関西の龍を義親に持ち、そして一夏とはいとこの関係を持つ女才リ主こと郷田真夏がインフィニット・ストラトスで送る義理？と人情？の物語……

真夏「主人公であるウチをよろしゅーお願いしまっせ」

プロローグ「行き成り自己紹介や！」（前書き）

勢いで書いてしまった二作品目です。プロローグだけですが見ていただけると嬉しいです。感想待ってます。

プロローグ「行き成り自己紹介や！」

行き成りやけど、初めまして〜ウチの名前は郷田真夏五才こしたまなかや！

自分とおとんでアパートで暮らす二人家族で将来の夢はおとんとたこ焼き屋をやる事なんや。ウチの事についてはあと後お話するやと思いますからまっててな〜。

まずは幼稚園のお話からお送りするで〜、ほな本編スタートや！

ここは幼稚園……そこは元気な子供達を通う活気ある場所、そこに

……

「いつちゃん！行くで！」

「おう！」

二人の子供がボールで遊んでいた。

「見ててや、これが真島はんの奥義！」

「ま、まってまなちゃん！そ、それは無理だよ！」

「え？駄目なん？」

「う、受け止められないよ……」

「でも打ち込む！それがウチの極道や！」

「怖いよ!？」

五歳児にしては恐ろしい単語を放つ女の子は足を思いっきり振り上げ……

「必殺！神室キック「パシッ」あいた!？」

突然、後ろから叩かれ、声を上げる女の子はその場で蹲る。後ろには中学校の制服を着た女性が立っていた。

「何、一夏を虐めているのだ？真夏は……」

「千冬姉ちゃん！」

「ち、ちー姉ちゃん……」

ポコッ

「はうつ!？」

「姉と呼ぶのを許した覚えはないが？」

「あつあつ……」

「ち、千冬姉ちゃん、それ位いいんじゃない……」

「はあ……一夏、迎えに来たぞ」

そう言って男の子一夏に近ずいて手を取る姉の千冬、

「うっ……」

「ほれ、行くぞ」

千冬は真夏の手を取って歩き出す、再起動した真夏は千冬に言う。

「あれ？千冬はんがウチを連れて帰るちゅう事は……おとんはまたこ焼き屋やるか？」

「ああ、またおやっさんにしごかれてるらしいぞ？」

「そうなんか？ウチもはよう腕磨かんと！」

「そうだな」

クスツと千冬は笑い、両手に弟と妹分を連れて家に帰る。

「おとんに認めてもらったら真っ先に千冬はんといっちゃんに食べさせて上げるで！」

「そうか、楽しみにしていよう」

「俺も楽しみにしてるぞ！」

「うん！任せてな！」

そう言いウキウキしながら家路に着く三人の姿は家族その物であった。

千冬はまず一夏を先に家に送った。真夏と一夏はまたねと言って別れその後に真夏の家であるアパートへと送った千冬はその時偶然、

「あ！おとんや！」

「ん？おお、真夏かいな」

「どうも、龍司さん」

そこにいたのは厳つい風貌の男がいた。真夏の父親だ。その姿はたこ焼き屋の格好である。

「何時もすまんのぉ、千冬の嬢ちゃん」

「いえ、弟の一夏も真夏には遊んで貰っていますから」

「さよか…そや店で作っただこ焼きがあんねんこれを一夏にでも食わせたってや」

「何時もすいません」

「ええんや、ウチの娘も一夏とツレしてくれとるんや、助かるで」

「はい…」

「？、（なんやち姉ちゃんのおとんの見る目が妙に色っぽい様な……気のせいかな？）」

そんな事を考えていると真夏の父親が近ずいて来て

「よっ」

「ふあ!？」

真夏を肩に抱き上げる。真夏は少し驚いたが嬉しそうにして父親の頭にしがみつく、

「世話になったな。ほなまた」

「はい、また真夏の送り迎えの時は呼んでください」

「助かるで」

そう言つて千冬は帰り、あとに残った二人はアパートの自分たちの部屋へと帰る。

「今日は楽しかったか？」

「うん! いっちゃんが何時もウチと遊んでくれるから楽しいで!」

「さよか、そりゃよかった」

楽しそうに喋りながら真夏は父親の頭に抱きつく、

「こら、前がみえへんやろ」

「えへへ、堪忍やでっ」

「ふんっ……」

真夏の父親は少し憂鬱しそうにもどこか嬉しそうだった。

「今日ご飯は何や？おとん」

「たこ焼きや」

「今度の具は？」

「からしや」

「なんやそれ！？バツゲームやないか！」

「冗談や。今日はわたみんな家の牛煮込みや」

「ホンマか！？」

「そうや」

「楽しみや！はよ帰らな！」

「そやな」

そう言つて父親は真夏の頭をわしやわしや撫でて微笑む、

「さてまずは……」

「おとんとお風呂や！」

「言ってる側から先に風呂かいな……」

「駄目なん？」

「ええで、先に風呂にしょか」

父親がそう言うと言夏は嬉しそうにしてまた抱きつく、

「よっしゃ！はよいこか！」

「急に元気なりおった……」

少し驚く真夏の父親は歩く速度を上げる。

紹介が遅れたが、真夏の義親であるこの男は名は郷田龍司、元近江連合直参郷龍会二代目会長。「関西の龍」の異名を持ち、神室町と呼ばれる町で伝説と成った極道の一人である。今は『たこ三味』の定員で、世話になっているおやつさんと龍司と娘の真夏の二人だけだ。

「おとん！はよはよ〜！」

「へいへい……」

疲れてそうな顔をしている龍司、だがその顔は幸せそうだった……

…

ブローグ「行き成り自己紹介や!」(後書き)

真夏「二作品目か……頑張らな!」

千夏「あたしはどうなるんだ……」

真夏「かめへんかめへんって、作者は頭悪うけど体力あるで?」

千夏「だいいいんだがな……」

「話や!」「神室町でカラオケや!」(前書き)

プロローグだから二話じゃない!?一話上げました!感想待ってます。

「話や！」「神室町でカラオケや！」

ここは、知る人と知る神室町………そこで一組の若い男女が神室町を歩いていた。

「どや？いつちゃん！神室町ってええ町やろ？」

「そうだな。良い町だ」

「せやろせやろ」

真夏と一夏だ。二人は家から電車で五分のところにある町、神室町に来ていた。

五才で電車に乗って御出かけとか最近の子供進んでいる様である。

「それじゃさっそく神室町へ繰り出しまひよ？」

「おう」

そう言つて真夏は一夏の手を握る。

「え！？ま、まなちゃん？」

「ん？どないしたんや？」

「い、いや、なんでもない（ま、まなちゃんが俺の手を！？）」

「そか、ほな行くで」

そう言つて真夏は一夏の手を引いて神室町を歩く、その二人の姿はとても仲良しであった。

視点・「郷田真夏」

ウチはいつちゃんを連れて神室町を歩いてんねん。

いつちゃんはウチが手え握ると顔を赤くして驚いた表情したんや、なんでやる？

「いつちゃん何処へまずは何処へいこか？」

「そつだな……どこかお勧めはあるか？」

「そやなあキャバク……やなくてカラオケとかオススメやで？」

あ、危なかったで……ウチが一度キャバクラに間違えて入つてしも
うた事を気づかれるとこやった……

「？キャバ……なんだつて？」

「な、なんでもないねんいつちゃん！忘れて！」

「?、おう」

「ふう……さて、気を取りないしてカラオケに行くで〜!」

ウチはいつちゃんを連れてカラオケへ向かう。「GET TO T
HE TOP!」を熱唱するでえ!

視点・「織斑一夏」

俺はこのちゃんに連れられてカラオケ店の個室に入る。カラオケ店の店員は目を丸くして俺達を見ていた。そりゃそうだ。俺達見たいな幼いお客、しかも二人だけ来てるんだ。驚くのも無理はない。普通五才でカラオケなんて行かないしな。

「きょ〜「いえい!」おか〜「いえい!」ら、Try again
〜」

てか上手いな…このちゃん、ノリノリだし、自分も人の事を言えな
いが…

「別れを告げよう！いゝいゝいゝ！」「つもゝいゝいゝ！」のトラウ
マへゝゝ」

もしかしてこのちゃんって前にもカラオケいったのかな？

「ラメ色した 輝くShinningGate！」

お、そろそろ終わりかな？

「ラゝラ、ラゝララゝララゝ……」

おおう、良い声だ。

「ラゝラ、ラゝララゝララゝ……」

終わったか……

「ふう……美声や……」

自分で言うな。

「お疲れ、次は……」

「いつちゃんの番や！」

「ええー…やっぱ歌わなきゃだめか？」

俺は嫌そうにするとこのちゃんは少し顔を曇らせる。

「なんやん、ウチだけ歌わせといて自分は歌はへんの？」

「いや、だって恥ずかしいし……」

「何が恥ずかしいんや？」

「……………」

「いつちゃん？」

「…………下手だったら…恥ずかしいから……」

俺は少し小さい声で言う。うう…………これを言うのも恥ずかしいのに…………

「…………へッ」

笑われた！？鼻で笑われた！！

「わ、笑ったな！千冬姉にも笑われた事無いのに！」

「いや、それは何時もの事やん」

そうだけどね！じゃなくて！

「笑うなよ！」

「あははは、堪忍やゝ、でもいつちゃん」

「……………なんだよ?」

「あん、いっちゃんそないな拗ねんといてえなあ。ウチが悪かったさかいに」

「……………ああ、で?」

「うん……………いっちゃん、歌う事は恥ずかしい事やないで」

「え?」

「それにいっちゃんが言う様に恥ずかしがったら「羞恥心」歌ってる人達に失礼や」

いや、それは違う気がする……………

「……………話を戻すで?」

自分から言っただんろ……………

「歌は自分をさらけ出す事や、貯めたもんを出す為でもあり、自分を表現する為でもあり、そして、自分の想いを他者に伝える為にもあるんや。まあ、ラブソングが良い例やな」

「他者に想いを伝える為……………」

「そや、普通に言うだけでは伝えにくい事でも、歌で伝えれば自然と伝えたい人に自分の想いを伝えられるんや。それが歌なんや。歌は時として人救う事が出来るんや。銀河を救ったように……………」

おいこら、アニメを急に持ってくるな。せつかくの良い話がアニメに染まって来たぞ。良い歌だけど、

「そう言う訳で、いっちゃんは恥ずかしがらずウチにいっちゃんの聞かせてほしいねん……」

「俺の……歌を？」

「そや、ウチいっちゃんの歌、聞きたいねん！」

「……………」

俺の歌……か……

「……………わかった」

「ほんま？」

「ああ」

「後で、アレ無しってのは無しやで!？」

「嘘はつかないよ」

「よっしゃあ!さっそくいっちゃんの為にチヨイスするで!」

まなちゃんが急に真剣な顔から溢れんばかりの笑顔を俺にふりまき、カラオケの端末を手にとって曲を入力する。

「まったく…良い笑顔して…」

俺の声が自然と漏れていたのか、まなちゃんは俺の方を向いて、

「ん？いつちゃん何かいうたか？」

「い、いや、なんでもないぞ？」

「？、そか」

まなちゃんはそう言って再び端末とにらめっこをするそんなに真剣に選ぶ事か？

「おっしや、これで行くで！」

どうやら決まったらしい。俺は歌う為に立ちあがる。

「いつちゃん、準備は？」

「何時でも」

「行くでえ！Machine Gun Kiss！スタートや！」

曲が流れる。俺は体を自然体にして楽にする。そして、歌は流れる。だが俺はこの時ちゃんとイントロを確認すべきだった。だってあんな恥ずかしい歌だったなんて思いもしなかったんだぞ！

「いや〜どエライ楽しかったなーいっちゃん！」

「……………そうだな」

「な、なんや、まだ怒ってるん？」

「全然……………」

カラオケで歌を歌い終えて俺達はカラオケ店から出る。
俺は少し顔を赤らめている。それもそのはず俺事織斑一夏五才は、
あの歌は早すぎたと言っ事だ。

「い、いっちゃんウチが悪かってん…だから仲よろして欲しい…」

「怒ってないって……………」

「おこつとるやん……………」

「怒ってない」

「怒ってる」

「怒ってない」

「怒ってる」

「怒って……て、なんと言わせる気だ!？」

俺ははループから脱出し、声を荒げる。その声にビクッと真夏の体が強張る。

「やっぱり…怒ってるやん…嘘つき」

「いや、だから……はあ、悪かったよ…」

「いつちゃん？」

俺はため息をついて諦めた言っ様な顔をして真夏を見る。
そんな怯えんなよ……

「真夏、俺はもう怒ってない。本当だ」

「ホンマに？」

「本当だ」

「嘘やない？」

「嘘じゃない」

「そ、そか…よかった……」

真夏は胸を撫で下ろす様にしてふう〜と息を吐く、

「そろそろ帰ろう。真夏、母さんに心配させちゃう」

「つ……………そ、そやったな。はよ帰らんと……」

ん？どうしたんだ？真夏のや…つ…あ、

「わ、わりい……」

「いいねん、気にしとらんし」

「でも……」

俺は言うてはいけない事を言ってしまった。

真夏の前では龍司さん意外の家族の話は禁句だったのに、

「ええねん。ホンマに気にしとらんし…大丈夫や」

「……………ほんとにゴメン……」

「だからええって……ホンマに気にしとらんから……」

バカだ俺は……………なんて真夏の事を考えずに口に出しちまったんだよ……………

俺は前に真夏の家にお邪魔した時はかなり泣きそうになった。考えても見ろ？

行き成りデカイ男が出迎えたら誰だって驚くぞ。

最初は強盗かと思ったけどそのデカイ男の肩にちょこんと座った真夏を見て、え？知り合いつて思ってたやっと思つて警戒が解けたんだ。この事を真夏やその父親である龍司さんの話すと、

真夏は爆笑、龍司さんは少し肩を落としていた。悪い事しちゃったか……？

でも一番驚いたのが……

（俺と真夏がまさかいとこ…とはな）

そう、そうなのだ。俺と真夏の母親が姉妹で、俺の母さんが姉で真夏のお母さんが妹だったのだ。この時、俺も真夏も驚いた。何故分かったかと言うと真夏の前の名前が俺と同じ織斑だったからだ、まだある。真夏と俺は生まれた病院と誕生日が同じだったのだ。気づけよ俺の両親……そんなこんなで真夏の過去を真夏自身から聞いて竜司さんが真夏を擁護施設にたこ焼きを寄付した時に会って意気投合、結果として竜司さんと養子縁組をして晴れて名字を変えて親子になったのだ。意気投合って……漫才じゃないんだからさ……でも……

（なんで……真夏の両親は、真夏を捨てんだろう……）

そうなのだ。何故真夏が養護施設にいたのは、両親に捨てられたからって聞いた。

その時に真夏は一瞬悲しい表情をしたような気がして、俺はしまったと思つた。

（はあ……千冬姉ちゃんに何時も言われているけど、俺ってそんなにデリカシーが無いのか？）

うーん、治そうとは思っているのだが、どう直せば……

「いつちゃん」

「ん？なん「ムニツ」だ？」

俺は真夏に行き成りほつぺたに指を押し付けられた。

「な、なんだ行き成り……」

「名前」

「え？」

「名前、まなちゃんゆってってゆうたろ？」

「へ？、あ……」

そうだった。つい昔の呼び方で呼んでいた。だが……

「なあ、そろそろ……」

「約束破る男は嫌いや」

「うぐっ」

そこまで言うか……しかたない……

「……まなちゃん」

「はい、よくできました」

そう言つてまなちゃんは俺の頭を撫でる。こら、子供が子供を子供扱いするな。

「はあ……帰るぞ?」

「うん!」

そう言つてまなちゃんは俺と手を握つて駅に向かう。何と言つか…

…今日は疲れた。

俺はそう思いながらも楽しそうにしてまなちゃんと手を握りながら家路に着いた……

「話や!」「神室町でカラオケや!」(後書き)

真夏「いつちゃん楽しかった?」

一夏「ああ、楽しめたぜ!」

真夏「よかよか」

作者「二人目の鈍感ヒロイン……千夏さんと被らない様にしないと
…」

「二話や!」「ストリートファイトや!」(前書き)

真夏「二話でたで〜見とつてや!」

龍也「なんで俺が……」

沙紀「まあまあ」

「二話や！」「ストリートファイトや！」

ウチはまた神室町に出向く為、電車に乗って駅に着き神室町を歩いてるところや、

「タツちゃん、きょうは何処行こか？」

「だからタツちゃん言うなって言っただろうが……」

今ウチはタツちゃんと一緒に神室町を歩いてるんや、

「ええやん小さい事気にしとつたら器の小さい男に見えんで？」

「やかましいい……」

タツちゃんはめんどくさそうに頭をボリボリかいているう。

ちなむにタツちゃん言うんわ右京龍也つちゅう名前や、出会いはウチが……あゝなんや、チンピラに絡まれている時に颯爽と現れてチンピラをボコつてウチを助けてくれてんねん。

あんときはかつこよかったでえゝ…………

それからやるか、神室町に行つてはタツちゃんが暇な時に一緒に遊んでんねん。

それにおとんと同じ龍の名前があつて気にいっとるんや！

「はあ……何処行きたい？」

「お菓子」

「行き場所聞いてんだよ！なんでお菓子をねだるの選択に代わって

「んだあ!？」

「ええやんお腹すいたし、ジェラテリアにでも食いにいかへん？」

「だから行き場所を聞いてるつつつてんだろぅがあああ!!!」

「タツちゃんは何故か顔を青くして小走りでウチを引っ張る。

「言ってくればウチが……きや？」

「なんやタツちゃんたまつとるんか？ウチで発散するう？」

「五才のガキに欲情するかああああ!!!」

「タツちゃんはまた叫ぶ、ホンマタツちゃんからかうとおもいでも、少し経ってからしかめっ面のタツちゃんをお手て繋いで神室町を歩く……そしてタツちゃんと手を繋いで歩いていると何故か周りから声がして来てんロリコ……やら警さ……やら聞こえてたけど……なんだったやろ？」

「なんや野外からウチらを見ながら声が聞こえんで？」

「あ、ああ……俺には聞こえなかったが……」

「うっん、聞き間違いやるか……」

「そんなことよりさっさと行くぞ」

「タツちゃんは何故か顔を青くして小走りでウチを引っ張る。ちょータツちゃん！」

「た、タツちゃん、そない強く引つ張らんでも…」

「んあ？ああ、すまん」

そう言つてウチの歩幅に合わせて歩いてくれるタツちゃん、やっぱり
タツちゃんは顔に似合わず優しいわあゝ

「えへへ」

「なんだよ急に」

「なんでもないでゝ」

「そうかい……」

少し呆れる様な顔をしてはニヤリと笑つてウチを神室町に連れてく。
今日も神室町を歩くでゝ！とその時、

「あら？まなちゃんじゃない」

「ん？」

「あ！さつちゃんや！」

ウチは名前を呼ばれて向くとさつちゃんがいたんや、
タツちゃんとも知り合いでただならぬ関係やとウチは睨んでいるん
や。

名前は工藤沙紀、ウチはさつちゃんと呼んでんねん。

「さつちゃんもお出かけ？」

「いいえ買物よ。龍也君の後輩がまた試合で無茶をしちゃってね」

「なんやまたタツちゃんの真似しようとして怪我したん？」

「当たり前」

「たく、よええのに俺の真似するからだ」

「タツちゃんそう言ったらアカンって、タツちゃんに憧れてドラゴンヒートに入ったんやで？それにタツちゃんの後輩や。自分に憧れて入った子なんやほんとは嬉しいやろ？ん？」

ウチがそう言つとタツちゃんはほんのり顔を赤くさせてそらしてポリポリ頬をかいていた。ウチとさっちゃんはそれを……

「さっちゃん」

「まなちゃん」

ウチらは互いの名前を言つて、

「「照れてますね？」」

「照れてねええー！！」

「「きゃー」」

ウチらはタツちゃんが叫ぶと互いの手を取り逃げた。
それを見て追ってくるタツちゃん、

「待てやコラアー!!」

「いややゝ照れたタツちゃん可愛かったでゝ」

「うんうん、龍也君も良い顔するねゝ」

「てめえらああああー!!!!」

小走りで走るウチらを追いかけるタツちゃん、ホンマタツちゃんからかうとおもろいでゝ……
でもウチはその時追ってくるタツちゃんを見ていて前を見んかったんや。そのせいで……

ドンッ!

「きゃっ!?!」

「まなちゃん!?!」

ウチは誰かとぶつかっけしもうたらしくて尻もちをついてしもうたんや。

「あいたた……す、すんまへん」

「まなちゃん大丈夫?」

「だ、大丈夫平気や」

ウチはさっちゃんに手を差しのべられて経とうとするけど、

「おい」

パシッ！

「いつ!？」

「な!？」

「あたつといて詫びを一つせえへんのか？このガキ……」

ウチと当たつてしもうた男の人は……ガタイの良い大男やった。いかにも格闘家つて感じや、

「聞こえんかったか？ガキ、詫びの一つも……」

「捕まえたぞ真夏う！」

「ちょ!く、首根っこは持たんといて!服が伸びてまう!」

「ちよつと龍也君!乱暴だよ!」

「うるせえ!このガキがいけねえんだろ!」

「子供の言つた事じゃん!」

「せや!大人げないで、タツちゃん!」

「たっちゃん言うんじゃねえええええ!!」

急にタツちゃんが叫んでウチの首根っこを掴み持ちあげる。
言葉を遮られた大男はこめかみをピクピクさせてみていた。

「おい……」

「た、タツちゃん…ホンマに伸びてまうってこれおとんに買っても
らった大事な服なんや…だから…」

「っ……わかったわかったからそんな悲しい顔すんじゃね
えって」

タツちゃんはそう言うのと静かにウチを下ろして、服を直してくれた
んや。

ホンマに優しいで…タツちゃんは……

「おい……!」

「ん?」

「あ、まだいたんだ……」

ウチは話をしている近くにいた大男の存在にやっと気付いた。
てかさっちゃんそれ酷いで……

「なんだ?このおっさん……」

「ウチが走ってた時にぶつかってしもうた人や」

「そつだ！さっきまなちゃんの手をはたいたでしょ！？なにするのよ！」

「うるせえ！詫びを入れろっていつてんだよ！そのガキが俺に当たって……」

「おい……」

男が喋っているとタツちゃんが低い声で男に言う。

その声はさっちゃんに連れて行って貰ったドラゴンビートで見たタツちゃんの姿やった……

「なんだガキ……ヤル気か？」

「ガキ相手にイキがつてんじゃねえよおっさん……」

二人が睨みあう、今にも喧嘩が始まりそうや、て！

「あ、あのウチが悪かったです……だから喧嘩は……」

「うるせえ！ガキはスツこんでろ！」

ゴッ！

「きゃっ！！」

「まなちゃん！？」

「！！っ」

ウチは男の人に殴られ、吹っ飛ぶその時ウチはガードレールに当たってしもつておでこから血が出る。

「うつう……」

「まなちゃん！大変！血が出てる！」

「真夏っ！」

「ふん、てめえのガキだったか」

「てめえ……！」

タツちゃんはウチが血を出してしゃがんでいる姿を見て男を睨む、

「俺のガキじゃねえが……」

タツちゃんはウチを一瞬見た後に再度男を睨んだんや。

「俺のダチに手え出した事をテメエ自身に詫びさせてやる！！」

そう言つてタツちゃんは構える。男はそれを見て鼻で笑った後、自身も構え臨戦態勢を取る。

「行くぞオラア！」

「！っ」

男は先に仕掛けたて来た。あの構え……

「ぼ、ボクサーや……」

「龍也君！」

「任せろお！」

タツちゃんは力強くさっちゃんの声に答え、自分も仕掛けた。

「オラア！」

ブンッ！

「おせえ！」

タツちゃんは右のストレートを避け、左手のフックを炸裂させる。

バキッ！

「ぐふあ！」

「まだまだ行くぞお！」

次にタツちゃんが繰り出したのは右のボディーブローから左のストレート、

ボゴツ！バキィ！

「グツ！ガツ！？」

「弱えぞテメエ、そんなんで俺のダチに手えだしたのか！？」

ババキツ！

「がはあ！」

「タツちゃん……凄い……」

「あれが神室町の狂龍……右京龍也の……本当のファイトよ」

タツちゃんの姿をポッと見ているさっちゃん、なんや恋する乙女やんか……

ウチが見ているのをハッ！と気づいて顔を赤くするさっちゃん、んゝつぶやなあ……「ふら……」……あれ？

「ま、まなちゃん！？」

「あ、あはは……すごし血い流し過ぎたわあ………」

あ、アカン……ボーとするで……どないしよう……

「終わりだあ！！！」

「ひ、ひいいい！！」

男は殴られまくり、ところどころから血を出しながら怯える。
そしてタツちゃんのヒートが溜まり……

「ヒートアクション発動や！」

「ちょ！急に元気に！？」

ここで言わなきゃ何時言うねん！

「絶技・バンカーナツクル！」

「死ねやボケエ！！！！」

タツちゃんの腕から放たれた強烈なエルボーが……

グシャッ！！

「がはああああ！！！！」

男の喉に食らいつき、吹っ飛ばした。

ドサッ！

タツちゃんは相手が起き上がらない事を確認するとすぐにウチの側までよって来てウチを抱き上げた。

「龍也君？」

「病院に行くぞ！怪我は大した事ねえが出血がひどえ！」

タツちゃんは焦りながらウチを運んで行こうとすると……

「まだ終わってねえぞ！！！」

「「！？」」

血だらけに成りながらも立ち上がり、片手にナイフを持って突っ込んでる男にタツちゃんは動けない。

「クソッ！」

「龍也君！？」

タツちゃんはウチを守る様にして構える。アカン！それじゃあタツちゃんが刺されてまう！

「う、ウチを捨ててはよう！」

「黙ってる！」

ウチの言葉をかき消す様に叫び男を見るタツちゃん、もう駄目や！ウチはそう思って目をつぶると……

「ありやりや…子供相手に刃物は不味いつしょ？」

「ああ！？「バキィッ！」ぐほぁ！？」

男は横から来た強烈なパンチを食らい。今度こそ気絶した。
タツちゃんは横やりを入れた相手を見て……

「あ、あんたは……」

「いやゝまさかまなちゃんが血を流しながら王子様に抱かれているのを見てね。それにピンチだったし」

「ハッ余計なお世話だ……」

「そりゃ失敬、伊達さんを呼んどいたから、もう平気だよ」

そう言つとパトカーのサイレン音が聞こえてくる。

「うっう…し、駿…ちゃん？」

「大丈夫かい？まなちゃん」

そう言つてウチの近くによる駿ちゃんはウチがの血い出してる所を見て顔を歪めた後、すぐに気持ちを切り替えて、

「スカイファイナンスに行こう。すぐそこだから医療キットもあるし」

「ああ、わかった」

「お願いします」

「お世話かけます……」

「ははっ
いいっ
て」

そいつでタツちゃんはウチを抱えたまま駿ちゃんの後を着いて行く
タツちゃんが駿ちゃんの言う事を聞いたのはウチの容態を見ての事
やもしれへんな。

(おとんになんて言おう...) (うううう)

ウチはそれが心配やった。ウチのおとんは心配性やからなあ……
そのせいでタツちゃんにおとんを紹介した時睨みあいが一時間は続
いたで……ホンマにあれば堪忍や……

こうしてウチらは騒動を終えスカイファインンスで治療して貰ったんや。ちなみにウチの怪我は血いは多くでとったけど幸い傷も残らず完治するって花ちゃんが言ってたんやそれを聞いたタツちゃんとさっちゃんとはホツと胸を撫で下ろしたん。ホンマお世話かけますう……駿ちゃんや花ちゃんにも迷惑かてしもってウチは罪悪感でいっぱいになつてもうた……

治療を終えて駿ちゃん達にお礼を言った後、さっちゃんの買い物に付き合ったりたっちゃんやさっちゃんのラヴな展開を鑑賞したりと痛い出費はあったんやけど今日は満足した一日やった……

ちなみに、この後タツちゃんはマツポの伊達はんに少しこの小僧を借りるぞ？ていつてタツちゃんを連れて行つたんや。その時タツちゃんは、俺はロリコンじゃねえええええ！！！！と言つて叫んで
はったけど……

ロリコンってなんや？

視点・「織斑千冬」

私は今学校の帰りの道を外れ、ある店に行く為向かっている。

「……………」

私の前を歩く歩行者達は引きつった顔で道を開けていく。

多分、私の目は刃物の様に尖らせている事だろう。一夏にも怖がられて少し傷ついたので治そうと頑張っているのだが……

（どうしても……龍司さん意外に笑顔を見せられない……！」

龍司さん限定と言うのは幸いしたが、何故私は笑えない！？

真夏は怖がらず普通に話してくれるが、未だ一夏は怖がってあまり話してくれない。

クッ！このままでは私と一夏の間には亀裂がっ！

「うつむ…どうすれば…」

「——ん？なんや千冬の嬢ちゃんやないか、またたこ焼き買いに来てくれたんか？」

「へ！？」

しまった……私は考えていて目的地の店に着いていた事を気づかなかった。

その上あんな素っ頓狂な声を龍司さんの前で上げてしまった……うう、恥ずかしいところを見られてしまった……

「どうしたんや？」

「な、なんでも！なんでもないです！」

「さ、さよか…そや、ワシが作ったたこ焼きがあんねん。食うてくか？」

「は、はい！喜んで」

なんとタイミングがよかったのだろう。まさか龍司さんが作ったたこ焼きを食べれるとは……！

私は龍司さんの店のまでまで行って龍司さんのたこ焼きを器に乗せ終わるのを待つ、

「出来たで」

「あ、ありがとうございます」

私は龍司さんに手渡しで渡されたたこ焼きを受け取る。

「熱いから冷ましてから食うんや」

「は、はい…」

私は少し冷ましてからたこ焼きを食す……

こ、この味は！私はたこ焼きの味に顔を驚かせる。

「やっぱり気づいたんか…嬢ちゃん」

「このたこ焼きに使われているのは宗名産谷のタコですね？しかもミズタコ……」

「さすがやな千冬嬢ちゃん、そや…北海道の宗名で取れたミズタコや！」

さすが龍司さん！タコの事は誰よりも理解している。

「心地よい歯ごたえが持ち前のミズタコを生地の中にいれた具が閉じ込められる事によってミズタコの甘みが閉じ込められ倍増し、応えられない美味しさになる…… このたこ焼きにかけられているソースがまた美味しさを倍増し、たこの淡泊な甘味を一層引きたててます！」

私は龍司さんの作ったたこ焼きの味を解説した。

「そっかい。ほな作ったかいがあつたわ」

龍司さんに言われ、ハツとする。な、何をしているんだ私は！これじゃまるで料理番組の女子アナではないか！！

「す、すいません…美味しすぎて我を忘れてました……」

ま、また恥ずかしい所を見られてしまった……

私の顔は今トマトの様に赤くなっているだろう。

は、恥ずかしすぎる……！

「ん？なんや千冬嬢ちゃん顔赤いで？熱でもあるんか？」

そう言つて龍司さんは私のおでこに手を乗せて熱を測ろうとする。

「へ？あ、えつと！そのお……」

今の状況が上手く飲み込めず、私は口下手になってしまっていた。
い、行き成りは反側です！

「な、なんや、また顔がタコ見たいに赤くなつとるで？」

「あうあう……」

クツ！何故だ！？何故こつも龍司さんに触れられているだけで動揺する！？

「病院行つた方がよさそうやな…連れてこか？」

「だ、大丈夫です！ぜ、ぜんぜん平気ですから！」

私は声を張り上げて言ってしまった。

ま、また恥ずかしい所を……

「さ、さよか……でも無理はいかへんで？」

「ほ、本当に大丈夫です……心配かけてすいません……」

ぜ、絶対龍司さんに変な女性とわかれてしまった……
ど、どうすれば……

「まあ、本人が大丈夫って言うんなら良いんやけど、無理はせえへんようにな？」

「はい、ご忠告ありがとうございます……」

はあ……なんで私は龍司さんを前にしてこんな醜態を……

「ホンマに大事はないんか？なんや一人でブツクサ言っとるが……」

「え？あ……えつと……」

またやってしまった！？クツ、どうしたと言うのだ織斑千冬！
何時も通りの冷静さはどうした！？

「え、えつとですね……その……」

「ふむ……今日は早く帰った方がよさそうな」

「あ……」

「それにそろそろ一坊が家に帰るところ？はよ帰ってやらんと」

「はい……………」

もう少し龍司さんと会話をしたかったが、一夏を一人家に待たせる訳には行かない。帰るか……

「お、お邪魔しました……………」

「おう、また買ってってな」

龍司さんに別れを告げて家路に着く、うう……………何故私は龍司さんの顔をちゃんと見れないんだ……………

織斑千冬14歳、恋多き年頃であった……………若干ジジコンに成りかけてはいるが……………

「二話や！」「ストリートファイトや！」「（後書き）」

龍司「こんガキヤア！ワシの娘に何怪我させとんじゃあああああつ
！！！！」

龍也「ケジメつけたんだからいいだろうがあああああつ！！！！」

真夏「二人とも喧嘩はやめてえなあ！！」

沙紀「龍の名を持つ人って、血の氣が多いわねえ……」

三話や！「ホールインワン……やと！？」（前書き）

真夏「そう言えばおとん」

龍司「なんや？」

真夏「前に来てたあのスーツの男の人ってだれなんや？」

龍司「ああ、ワシが前にいた組の弟分や」

真夏「おとんの弟分？何しにきたんやろ？」

龍司「それは後でな。本編初めんで」

真夏「そやったわ！始まりや！」

三話や！「ホールインワン……やと！？」

ここは森や草花、そして砂浜や池がある広い平原……
そこに二人の男と二人の幼い男女がいた。

「……………」

その幼い男女の少女は真剣に自分の真下にある小さなボールを見つめる。

手には棒状の先にヘラのように広がった物が付いている。

「……………」

「……し、真剣だな。まなちゃん」

「どんな事でも真剣に取り組む、それが真夏ちゃんのええ所や」

「ですね。にしても凄い集中力だ……」

少女である真夏を見て感想を言う少年と棒を肩に担ぐ眼帯の男、そしてスーツ姿の男は少女を見守る。そして……

「……………！！」カッ！

少女はカッ！と目を見開いて棒状物を思いっきり振り上げ、

「貰ったあああああっ！！！！」

行きよいよく振り下げ真下にあるボールを打つ、

ガッ！

棒はボールに当たり、ボールは呼んで行く……そうこれは……

「ホールインワンや！！！」

「子供の腕力じゃ無理だよ！？」

「いや、見てみい！あれはもしかしたらいけるでえ！！！」

「これは行くか！？」

ボールはじょじょにゴールである旗が刺した穴に飛んで行き……

コンッ！

玉は旗に当たり、そして！

コロコロ……

入らなかった……

「なんでや！？良い感じやったのに！！！」

真夏はその場で地面をゴルフクラブで撲殺する。その度にクラブが悲鳴を上げていたが……

「ま、まなちゃん！落ち着いて！」

「せやで、そう簡単に入ったらタイガーウッズが泣くでえ？」

「むー！」

「まあまあ落ち着いて、まなちゃん」

少年である一夏と秋山と真島と言う。この眼帯の男は東城会若頭補佐、直系真島組組長の、真島吾郎である。そしてスーツの男は前に怪我をして血を流していた真夏を自社に招き怪我の治療をした恩人である。神室町で消費者金融「スカイファイナンス」を営み、キャバクラ「エリーゼ」のオーナーも務める男、それが秋山駿その人である。

「悔しいわあ、なんで入ってくれへんのや？」

「俺達じゃまだ無理だよ」

「む……」

「まあそお落ちこまんでもええで？ウチらかて無理やし」

「そつだよまなちゃん、俺らでも普通は無理だよ」

「せやけどなあ……」

真夏はどこか納得できない様子で飛んでいったボールを見つめる。

「じゃあ次は俺の番だな」

そう言って自分のピンを地面に刺して構える。

「お！次は一坊か、頑張りや」

「頑張れよ。一夏君」

「はい！」

「いつちゃん頑張って〜！」

「任せろ！」

そう意気込み、一夏はゴルフボールに集中する。
そしてクラブを握りしめて思いつきり振り上げる。

「せいっ！」

一夏のスイングでボールに当たり、ゴールのある芝生へと飛んでいく。

「行きますね」

「せやなあ…もしかしてホールインワンやったりして」

「まさかあ」

「せや、駿ちゃんの言つとおりや。入ったら頑張ったウチが泣くで」
そつ三人が言っているとボールは段々ゴールへ近ずき、そして、

「ロンッ！コロコロ……」

「へ？」

「なん……やと……？」

「こ、これつてもしかして……」

「ホールイン……ワン！？」

一夏のボールは見事に穴に入りホールインワンを成し遂げた。
それを見て驚きながらも一夏を祝福する真島と秋山、

「すごいやないか！一坊！ホールインワンやでホールインワン！」

「いやゝまさか一夏君がホールインワンをだすとは……やるじゃないか！」

「あ、いや……えつと……えへへ」

一夏は二人に惜しめない拍手をされ照れていた。だが真夏は……

「……………」

「……………、？、まなちゃん？」

「ん？どしたんや真夏ちゃん？」

「どこか具合でも悪いのかい？」

三人が心配そうにして俯いた真夏を見ると真夏はその声に反応したのか、顔を上げる。

「……………」

「ま、まなちゃん！？」

「ど、どしたんや！？目えに涙たまつとるでえ！？」

「だ、大丈夫かい！？まなちゃん！！」

三人は目に涙をためて耐える真夏を慌てる。

「……………ちゃんのこと……」

「え？」

「いつちゃんのこと……」

「い、一坊がどないしたんや？」

「いつちゃんのお……」

「ま、まなちゃん？一夏君がどうして……」

秋山が言おうとしたその時、真夏は大声で、

「いっちゃんのアホー！ー！、ウチが初めて取るおお思っとなのにー！ー！うわあああんっ！ー！」

そう言っただけで真夏は泣きながら走り去っていく。それをポカーンと見てた後に再起動した三人は、

「ま、まなちゃん待つて！これは偶然で……てっ俺が狙って出来る訳ないだろ！？」

「そやで真夏ちゃん！一坊が出来たんは偶然や！せやから落ちつきい！」

「言う前に追いかけてませんか！？もう見えなくなりそうですよ！」

二人はハツとして真夏を追跡する。誤解を解く為に張りながら真夏を説得するが、

「付いてこんといてー！」

「まなちゃん違うんだ！本当に偶然なんだ！」

「真夏ちゃん一旦止まってくれや！ワイもう疲れたでえ……」

「はあ、はあ、……自分も……もう限界です……というか五歳児で五時間全力で追いかけたのに二人に追いつけないなんて……」

歳とつちやつたな」と落ち込む二人をしり目に一夏は真夏を追い続ける。

「いっちゃんなんて嫌いや〜!」

「だから落ち着けええええっ!」

二人の闘争劇は十五分にわたって続いたと秋山と真島は後から語る。子供の体力には適わないと言ってた二人だが、一夏と真夏が異常なのだと後に知る二人であった。

「うわああああああん!!」

「俺は無実だあああああっ!!」

まったくもって元気な少年少女である。

四人はゴルフ場を後にし、一夏は真夏の誤解を解いて神室町へ戻る。そこで四人はスマイルバーガーで食事を取っていた。

「むー…ウチがホールインワン出そう思ったのに…あんまりや…」

そう言いながら角煮バーガーを食べる真夏、

「いや、だからワザとじゃ……」

スマイルチーズバーガーを頼んで、まだ拗ねる真夏のご機嫌を取り戻すべく説得する一夏

「真夏ちゃんええ加減機嫌直したってや」

マグロバーガーを頼んだ真島が一夏を援護し、

「そうだよまなちゃん、一夏君のアレは偶然だったんだから」

そう言ってキングスマイルバーガーをほおぼる秋山達に入れ、真夏は……

「……………せやなあ。何時までウジウジしてたら皆に迷惑やなあ……」

皆に言われて機嫌を直す事にした真夏は角煮バーガーをほおぼる。

「ふう、よかった」

「せやなあ、まあ真夏ちゃんも何時かは出来るで？」

「そうそうまなちゃんも何時か出来るって」

「そやなあ…ウチも何時かは一発で入れたるで！」

その意気や！と真島に言われて元気を出す真夏、四人は明日の出来事や今日の話で盛り上がる。すると真島がある事に気づく、

「そついや真夏ちゃん」

「はい？」

「その額の包帯はなんや？」

「え？いまさら気づいたんか？」

「遅いですよ…真島さん」

「そうですよ。なんで気づかなかったんですか？」

「や、やかましい！わ、わしは真夏ちゃんが気にしとるう思つてあえて気づかないふりをしとったんじゃ！」

（（嘘だ！））

一夏と秋山は考えがシンクロした。

「そつやつたんかーごーちゃんおおきにー」

そう言つて真島に微笑む真夏、その笑顔は神室町の極道共の癒しである。

「お、おう…か、かまへんって」

少し恥ずかしそうにしてそつばを向いた。

「なんやごーちゃん照れとるん？」

「て、照れてへん！な、何言つとんじゃ真夏ちゃん！？」

「顔赤いで」

「お、おっちゃんをからかうもんやない！」

「フッフ、堪忍や」

（あの真島さんが照れてる……）

（なんでだろう…なんか心に引っかかる様な感じが……）

秋山は真島の姿を内心驚き、一夏は真島と真夏が仲良く話している所を見て何故か心を揺さぶられた。

そんなこんなで会話が進み、真島は真夏に怪我をさせたチンピラがいると分かると、

何処からともなくショットガンを取り出し、いてこましたる！と叫んで三人が必死こいて止めたと言う。

「何処のチンピラじゃああ！風穴あけちやる！」

「お、落ち着いてください！」

「ごーちゃん、もう過ぎた事や！せやからその散弾銃しまっという

「！」

「ま、真島さん！それは不味いつすよ！？」

「おんどりゃあああああっ！！！」

今にも撃ちだしそうな真島をなんとか止める事に成功し、四人はスマイルバーガーを後にした。

「帰り道に気を付けるんやでー」

「一夏君、真夏ちゃんをちゃんとエスコートしてね？」

「はい、任せてください」

「駿ちゃん、ごーちゃんほなまた遊んでや〜！」

一夏と真夏は秋山と真島に別れを告げて家に帰る為に電車に乗り込み、

「いっちゃん今日はおもろかった？」

「うん、初めてゴルフしたけど、楽しめたよ」

「うんうん、いっちゃんが楽しめてよかったわ〜」

そう真夏は言う。一夏も真夏や大人たちと遊べて楽しむ事が出来た様である。

「ホンマ……楽し……かった……で」

「まなちゃん？」

「うん…」

「テッ」

「え！？」

一夏は驚く隣に座っていた真夏は瞳を閉じて一夏の肩に寄り添う。

「ま、真夏？」

一夏は慌てた事で真夏を昔の呼び名で呼んでしまつが当の本人は……

「すう……すう……」

「ね、寝てる？」

一夏は真夏が疲れて眠った事が分かり、がっくりした様なホットした様な複雑な気分だった。

「ま、いいか…まだ家までは遠いいし」

一夏は真夏をそのまま寄り添うままで寝かせる。

「お休み…真夏」

「うん…すう…すう…」

二人は電車に揺られながら家路に着いた。一方昨日真夏と行動を共にしていた龍也と沙紀は……

「龍也！三人分追加や！」

「お、おう」

「声が小さい！返事もへいや！」

「へ、へい！」

真夏のおとん事、郷田龍司が世話になってる師匠であるおやつさんの店で働かされていた。

「いや、真夏がいるとよく売れるが沙紀がいるともっと売れるのう」

「いえ、それほどでも！」

「クソ、なんで俺がこんな目に……」

何故かと言うと龍也がいたのに真夏が怪我をしたと言う何と言うか理不尽なケジメを付けられたのである。店を開いているおやつさんは定員がぎょうさんおるのはええ事やと言って龍也と沙紀に働いて貰っているのである。

「しゃべつとらんと、はよたこ焼きを袋に詰めんかい！」

「言われずとも！」

そう言つて龍也は素早くタコを箱に入れて袋に入れる。

「出来ました！」

「千三百円になります」

「ありがとうございますー！」

龍也はそう言つてお客にたこ焼きを渡すバイト戦士、

「なんや龍司が連れて来た若いもん筋ええやないか」

こりや後継ぎが増えるわと言つて嬉しそつである。

「コイツはまだまだですわおやつさん、もうちつと使えるようにせんと」

「俺は十分出来てるだろ！？」

「やかましい！おんどれの腕はひよこ以下や！」

「なんだところあ!？」

「やる気かああ!？」

「ち、ちよつと龍也君!龍司さん落ち着いて!」

「かかか!まるで親子や!」

龍也と龍司は互いに睨みあい。一触即発に成りかけたがおやっさんのどなり声で収束する。

今の光景は祖父に怒られる息子と孫である。沙紀はその光景を見ていいなあとどこか羨ましそうであった……

「二階堂、覚悟は出来たかな？」

「覚悟はとつの昔に出来とるわ……」

ある二人の男が部屋で話していた。

片方はスーツの男、もう一人は白いスーツで顔は少し外人ぽかった。

「君の兄貴分の説得は無理だった様だね？」

「ああ、仕方あらへん兄貴に目え覚まさせる為に兄貴の大事なモン取ってこなあ……」

「ふふふ、外道だねえ……」

「なんとも言え、DD……」

DDと名前を言った二階堂は神室町を一望できるビルの窓から神室町を見る。

「ここが……おんどれの墓場や…桐生一馬……」

そう言つて二階堂は行動を開始した。そして神室町で起こる惨劇が幕を開け始めた……

三話や！「ホールインワン……やと！？」（後書き）

龍也「クソ！なんで俺が怒られる！？」

沙紀「喧嘩したからでしょ？もう……」

おやつさん「龍也は今はまだまだやがちょっとすりや光るかもしれへんのう」

龍司「あのガキがですか？」

龍也「がきじゃねえ！」

龍司「ふん、噛みついてる時点でガキやワシ見たいにクールに返すんや」

龍也「お前がクールって言葉使っとクールが汚れる！」

龍司「なんやとお！？」

龍也「やんのかあ！？」

沙紀「また始まった……」

四話や！「みなはんの朝食つくらな……」（前書き）

谷村「なあ俺の出番まだか？」

真夏「まーくんの出番は次や、我慢しい」

谷村「はあ、麻雀しながら待つか……」

真夏「また伊達はんには怒られるで？ウチもやるけど」

谷村「お、真夏ちゃんもやるか？今度は負けないぜ？」

真夏「フフ、お手柔らかに」

四話や！「みなはんの朝食つくらな……」

「スウ……スウ……」

ウチは今、家で朝を迎えてんねん、まだ寝てはりますけど……

「スウ……んう……スウ……」

今日は気持ちのいい朝でウチはまだ起きる気配はないねん。けどウチの家には生きてる時計がおんねん、それは……

「コケツコツコー！」

「んむう？」

「コケーコツコツココケー！」

ウチの朝を告げる時計事ピーちゃんが起こしてくれるんや、このピーちゃんやけど前におとんと海へ行った時に会ったんよ。確かくれた人は……とったどー！言うた後にウチにピーちゃん持たせてそのまま海へドボンっていったんや。まあそれからやな……ピーちゃんにはいろいろ役立ってくれて卵は産んでくれるし朝は起こしてくれておおだすかりや。さてピーちゃんも起こしてくれはったしウチも起きるえ、

「グガアー……グゴォー……」

「相変わらず大きい音やなあおとんのいびきは……」

前まではこの朝に鳴り始めるおとんのいびきで起き取ったけど、ピーちゃんの方が若干早いんよ。

「さて、おとんの朝食作らな……」

ウチは蹴飛ばされたおとんの掛け布団をおとんにかけて直して台所に向かう。今日は何にしよう？

「うーん昨日はスクランやつたから今日は目玉焼きと大豆のパンを作って……パンにかけるんは納豆でええな……後おとんの大好物のキウウリの塩ずけでオツケーやな……」

ほな、そうときまればさっさと作ったるで、

視点・「郷田龍司」

「んんう……？」

なんや朝起きたらええ匂いがするで、それに……

「なんや頭がところどころ痛い様な……」

ワシは痛む頭を抑える。その時ワシの目の前に、

「コケーコツコツコ……」

「……………ピーかいな」

「コケツコー！」

なるほどな…またお前がワシの頭突いたんかい。

「なーんでワシだけ頭突かれるんや？」

「コー…コケ！」

「いや、言ってる事分からんわ」

「コオー……」

いやそない落ち込まれても……そやった！

「おいピー、真夏はどうしたんや？」

ワシと一緒に布団に寝てはったはずやけど……どこや？

「コケコケコツケー！」

「お、おい何処へ行くんや？」

ピーは走って台所の方へと走って行きよった。なんや真夏は台所におるんか？

「……ほな行ってみるか……」

ワシは体を起して台所へ向かう。そこに小さな料理人がいたんや。その料理人は手際よく目玉焼きを焼いてその後オーブントースターが焼けたのを確認した後に、ワシがよう使つとるお椀に納豆とネギにからしに後醤油を垂らして料理を作つてた。

「あ、おとん起きたん？」

「あ、ああピーに突かれて起きたわ」

「またピーちゃん？もうピーちゃんには鳴いて起こしてって言つたはずなのに……まったく悪い子やね」

「コケエ……」

頭をガクンとさせて謝るニワトリ……なんで人語が分かるんや？

「まあええわ、鳴いて起きんおとんも悪い子なんやしな」

そりゃあ……まあ、そうなんやけど、

「おとん、料理出来たんやから座つてな。ウチは後ピーちゃんのご飯作らな」

「おう、わかつたで」

何時ごろやるか…ワシの為に真夏が料理作ってはるんわ……

「真夏何時もすまんの」

「かまへんて！ウチが好きでつくつとるさかい。おとんには感謝してるんや…ウチが施設で一人ぼっちの時に養子にするう言ってくれた事、嬉しかったんや…」

「真夏……」

泣けてくるで…ホンマ、ワシはええ娘をもろうたでえ…せやけど…

「あ、おとんウチい直ぐにトラちゃんとこに行かなアカンねん。せやから今日はピーちゃんと二人で食べてな」

そう言つて身支度をして玄関のドアを開けて出て言つてもうた。
…なんでや…なんでなんや…ワシの娘の料理は…

「ワシだけのもんやーーーー！！」

そついうても真夏にはきこへんかった。ワシは一匹と一緒に寂しい朝食を迎えた。あ、この大豆のパン美味いで……

真夏は家から出て神室町近くのアパートに向かっていた。

「トラちゃんも最近食事が偏ってきたし、ウチがちゃんと管理せんとまた体重増えてまうしなあ」

真夏はトラちゃんと言う人物の朝食のメニューを考えながら歩くと、

「お、もう目的地に着いたで」

正確には龍司におねだりで勝ち取った自転車に乗って家から十分の所に目的の家がある。

「ええと…鍵鍵つと…あつた」

真夏はアパートの二階へ駆け上がり、そのアパートのドアを開ける。

「トラちゃん！今日も来たでーて、うわ！酒くさ!?!」

「あゝ頭がいたいわあ…うん？なんや真夏ちゃんかいな」

「真夏ちゃんかいな…じゃないで！なんやまた酒飲んだんか!?!」

「そやでえ…兄弟が飲み行こう言つとったから……気持ち悪…」

「ちょ！ウチの前で吐かんといて！今水用意しますから!」

そう言つて真夏は部屋に入りコップを洗つて水を注いでその人物に水を差し出す。

「ほらトラちゃんこれ飲んで」

「おおきに……」

そう言つた後にゴクゴクと飲み干す男はプハアと言つた。

「よかつた少し顔がよくなつたで」

「生き返つたで…ほんとに世話かけるで真夏ちゃん…」

「ええつて、とりあえずウチは料理作つたるから台所借りるで？」

「ええでゝ美味しいもん作ってくれや」

「フフ…任せてな！」

そう言つてトラちゃんと言う人物の部屋に置いてあるエプロンを着て台所へと向かう真夏、

説明が遅れたが、このトラちゃんと言うのは冴島大河であり東城会直系冴島組で真島と同じ組長である。

『真夏ちゃんの姿を見てると…靖子を思い出すな…』

冴島は亡き妹の姿を真夏に浮かべていた。

『ホンマによう似とるでえ……アカン、涙でてきそうやわ…』

慌てて目をこする冴島、その時台所から真夏の声が聞こえる。

「トラちゃん！手え届かんから手伝ってえな〜！」

「おう、今行くで」

そう言つてフラフラと立ちあがり台所へ向かう冴島、そして真夏の近くによるとその体を抱き上げて物を取らせる。

「取れたか？」

「取れたでー」

そう聞いて冴島は真夏を下ろして自分も調理に参加する。

「あ、ウチがやるで」

「ええつて真夏ちゃんだけにやらせたら悪いし」

「でも……」

「二人で作った方が早く出来るやん」

「ん〜そやね！」

「ほな作るか」

「了解や！」

二人は並んで料理を作るその姿は、26年前に失った光景を思い起

こさせた……

視点・「郷田真夏」

「頂きます」

「召し上げれ」

そう言つてウチはトラちゃんに味噌汁とご飯を器に入れてトラちゃんに差し出す、

「おおきに」

受け取つたトラちゃんは先にご飯を食べてその後味噌汁で流し込む、

「もう…トラちゃん、ご飯は逃げへんからゆっくり食べるんやで？」

「ん？おおすまん」

そう言って食べるペースを落とすトラちゃん、

「お？このシヤケ美味いで……」

「自信作や、どんどん食べてなあ」

「おう」

そう言ってシヤケにパクツクトラちゃん、なんやこうしてると……

「まるで料理を作って旦那さんに食べてもらうてる主婦やなウチつて」

「んぐう！？」

ウチがそう言っと急にトラちゃんが声を出す。なんや？

「と、トラちゃんどうしたん？」

「！…！？」

「と、トラちゃんまさか喉お積まらせたん！？」

あ、アカン！はよ飲み込ませんと！

「と、トラちゃん！はいお茶！」

「！……んぐっ…ふう…死ぬかと思ったで…」

「だからゆつくり食べれって言うたんや…」

「いや、今のは真夏ちゃんが……」

「なんや？言い訳か？仁義貫くトラちゃんか？」

「い、いや…そうじゃなくて」

「もう…トラちゃんはいけない人やなあ…」

「……………すんまへん」

まあええで、とりあえず助かったんやし、

「次からゆつくりで…ええな？」

「わかったで」

うむ、いい子や、ほなウチも……

「ほなまたな」

「て帰るんか!？」

「せや、ウチいのご飯は他で食べんねん」

「いや、ここで食べばええと思うんやけど……」

「うゝん他の人も食事が偏ってるんや見にいな」

「あ、いやちょっと待ちなはれ！」

そう言つてトラちゃんはウチの腕を掴んだはいいけど昨日の飲みすぎで足元がフラフラのせいで…

「あー！」

「きゃあー!？」

ドンッ！

トラちゃんは倒れ、ウチを押し倒す形で倒れてもった。

「……トラちゃん？」

「な、なんや?」

トラちゃんは少し顔引きつかせる。

「トラちゃん……」

「お、おう」

「朝ヤルうんは早いぞ?」

「へ?」

「もっタツちゃんに引き続きトラちゃんまで…アカンてっ?」

「ぶっ!??ち、違う!そうじゃ……………」

「なんや?リクエスト?上から?それとも…………下?」

「だからちゃうって!」

「えっじゃあどっからや?」

「せ、せやから「なにやっとなねん…………」へ?」

「ん?あ、ごーちゃん」

玄関のドアには真島のごーちゃんがおった。

「兄弟…ウチらの約束…忘れたんか…?」

「い、いや待て兄弟!約束って……………」

「真夏ちゃんは……………」

「…………ウチは?」

「東城会の共有癒し財産や……………!」

ジャキツと何処からともなくショットガンを取りだすごーちゃん、
いや、ウチが共有って…………

まあそれはともかく…多分ウチとトラちゃんは顔を青くしておるや

るな……

「ま、待て兄弟！落ち着け！俺は何もやつとらん！」

「そ、そやでござーちゃん！ウチはただ冗談を言っただけで……」

「何が冗談や！どうみたらその体勢が冗談に見えるんやああああ！
！??？」

駄目や…完全にキレとる……。

「兄弟い！」

「だから落ち着けえええええっ！！！」

「ほ、ほなウチはおいとましますう……」

ウチはトラちゃんとござーちゃんの仁義なき戦いを見ることなくその場去った。

え〜と後は……だいちゃんやな、だいちゃん六代目になってから胃に穴が開くう言うつたから胃に優しい朝食にせんと……

「トラちゃんござーちゃん、ほなまたな〜」

ウチは小さい声でそう言っでトラちゃんの家を後にする。

「きょうだああああいいいいいいっ！！！！！」

「おおおちいいいいいいっつっつっつっつうけえええええっ！！！！！」

無駄に派手なバトルやな...これって...

四話や！「みなはんの朝食つくらな……」（後書き）

二階堂「ワシはこの小説でも小物かい……」

真夏「いや作者が言うには少し変更らしいで？」

DD「どんなだい？」

真夏「それは……わからへん」

二階堂「まあ気長に待つわ」

五話や！」「伊達マヨラーや！」「（前書き）

真夏「ちー姉ちゃんのおとんの見る目がなんやごつつう色っぽいんやけど……いっちゃんなんかしらへん？」

一夏「そ、それは……（言えない！行ったら千冬姉ちゃんにシバかれるー！）」

五話や！「伊達マヨラーや！」

ここは真夏と一夏が通う幼稚園、そこでは運動会が行われていた。

「え〜と次は……龍司さんと千冬姉ちゃんが出場する綱引きだ！」

「おとん！気張ってな〜！」

そう、次は父親や母親が出場する競技、綱引きである。そこに……

「ほな頑張るか？千冬嬢ちゃん」

「はい！（龍司さんと一緒に綱引き……勝たねば！）」

そう意気込み、普段着の千冬は燃える。普段着である龍司も娘が見ていると言う事もあってかつこ悪いところは見せられないと思い、本気を出す。

「なんやちー姉ちゃん燃えとるなあ」

「あ、ああ…あんなに燃えてる千冬姉ちゃん初めてだ」

二人は龍司と千冬が何故ああまで燃えているかが分からない。だがヤル気があるないいいかなあという事で二人はスルーした。

「もうすぐ親御さん達の綱引きが始まりまーす！競技に出る人は綱のどこまできてくださーい！」

「出番や…行くでえ！」

「はい！」

親御さん達が行く中、ただならぬオーラを纏う男女に後ずさりしたと言っ。

視点・「織斑一夏」

俺が通っている幼稚園で真夏のお父さんと千冬姉ちゃんが親参加の綱引きに出場する為グラウンドの真ん中に行く。というか、

「この幼稚園の運動会って本格的だな……」

「せやねえ。ホンマやしかも場所を移動しての運動会やし」

そうなのである。普通は幼稚園のグラウンドでやる物なのだが、ここは違う。

なぜなら東城会が経営する幼稚園であり、真夏が通う事もあつてか設備やら資金面が豊富であるのだ。

俺の両親は少し引きつっていたが……

「お？始めるでえ！おとん！ちー姉ちゃん！頑張つてー！」

「龍司さん！千冬姉ちゃん！がんばれー！」

そう俺達が応援すると、二人はこちらを向いて手を振る。聞こえた様でよかった。

「それでは皆さん、綱をもって用意してくださいー！」

幼稚園の組長……じゃなくて園長が準備を進める。

その声に従つて父親達と千冬姉ちゃんが綱を持つ、そして……

「よーい………」

「そつこつで片あを付けたる……！」

「手加減はしない……！」

ここはスルーしよう、うん。

「ドン！」

「「うおおおりゃあああああっ！！！！！」」

俺達の応援がいけなかったのか、千冬姉ちゃんと龍司さんがあり得ない力で……

「「「「「ア」……………ッ!!!!!!???」」」」

相手側の父親達は鳥になった……人間ってあんなに飛ぶんだなあ……
と現実逃避しているとドサドサッと大きな音を上げて父親達が地面
に沈んだ。

「アンタ……………!!」

「あなた……………!!」

「おと……………さん!!」

「パパ……………!!」

相手側の母親や子供が駆け寄ってきた。もうこれ戦争だよ……

「あ……………真夏ちゃんのお父さんに一夏君のお姉さん？」

「は、はい……………」

「お、おう……………」

冷静な声で千冬姉ちゃんと龍司さんと呼ぶ組長……じゃなくて園長が
二人に歩み寄り……

「やりすぎですー!」

「すみません……………」

「すんまへん……」

園長に怒られて謝る二人に俺達は……

「おとんは好きやけど、加減は覚えて貰わんと……」

「……そうだな」

はあ、とまた溜息を吐く俺達、ほんと……千冬姉ちゃんは影では優しいんだけどな……

そんなこんなで幼稚園最後の運動会が終わり、皆は帰って行った。

視点・「郷田龍司」

ワシの娘の真夏が幼稚園で運動会が行われると聞いたんで弁当を作
って来たんはええんやけど……

「なんで東条会の身内がおんねん……」

しかもこの幼稚園を東条会が経営しとるって……東条会は何がしたいんや？

「？、おとん…だいちゃん達となんかあったん？」

事情を知らない真夏が不思議そうにしてワシを見とった。

「なんでもないんや。気にせんでええで」

「そか、ならええんやけど……」

少し顔を伏せる真夏、なんや？ワシ間違った事言ったかいな。

「どしたんや？真夏」

「……おとん」

「あ？」

「おとんの腕奪ったんは……東条会の人やったよな……」

その事かいな……腕の事だけは話してもうたからなあ。

「ワシはその事はもう気にしてへん。せやから真夏が思い悩む事は無いんやで？」

「でも、ウチい……」

「真夏」

ワシは真夏の名前を呼んで抱き上げる。

「おとん？」

「腕え無くなつた事で気づいた事や得たもんがあるんや、せやからワシはこれでええと思つてんねん」

「おとん……」

「ワシは極道抜けてカタギに成つた事で真夏に会えたんやしおやつさんにも会えた……せやから、ワシはこの生活手に入れたん思うと腕の一本も安いもんやと言えるんや」

「おとん……！」

真夏はさっきまで沈んだ表情をしていたが、ワシが真夏にあえてよかった言つと花が咲くような笑顔になった。

「せやから真夏が気にすることはないんや」

「おとん、わかつたで……ウチはもう気にせえへん様にするわ！」

「ええ子や……」

そう言つて真夏の頭を撫でる。ホンマにええ娘をもつたで……ワシは……

「ほな千冬嬢ちゃん達と帰るか？」

「うん！あ……でもその前に組のお手伝いせえへんと」

「……………ほどほどにせえよ…それと終わったらすぐに帰るんやで?」

「うん、わかったで」

そう言つてワシらは千冬嬢ちゃん達と手繋いで帰る。なんや急に子供が増えた様で楽しいもんや。

せやけどなんでか一坊が千冬嬢ちゃんと手繋いで欲しい言つ取つたけど……まあ、別にええでっていったら千冬嬢ちゃんがタコ見とおに顔赤くさせとつたんや……なんでや?

一夏と真夏の幼稚園最後の運動会が昨日終わり、
またまたまたここは神室町に三人の男性と幼い男女がいた。

「谷村! まあた真夏ちゃんと一夏を麻雀に連れていきやがつて!」

「いいじゃないですか伊達さん、大人の楽しみを知る権利は子供だ

つてありますよ?」

「五歳児に麻雀教える刑事が何処にいるんだ!？」

「ま、まあまあ伊達さん落ち着いて……」

「てめえもだ!城戸!どうしてお前まで子供二人と麻雀やってんだ!？」

「……………すみません」

「あははは……い、いけない事だったんだ……」

「ま、まあまあ伊達はん……まー君もたけちゃんも反省してますし……」

「へーい反省してまーす」

「ほんとすみません……」

「役一名は全然反省してないだろ!？」

「楽しかったんやからええんとちゃう?」

「いやその歳で楽しんじゃいけないだろ!？」

伊達さんの突っ込みがさえる日だった。

真夏、一夏、谷村、城戸の四人は一夏に麻雀の遊び方を教えるついでに賭けをしたが結果……城戸の大損であった。

「と言うか初心者に負けるって……」

「す、すいません」

「ああ、いいんだ。弱かった俺が悪いし……」

「あ、そうや後でみなはんで牛井食いにいかへん？」

「そうだな行くか……」

「俺もお供するっす」

「あ、俺も」

「待て！まだ話は……」

伊達が話そうとするが谷村はスタスタと松屋のある方へと歩いていった。

逃がすものかと伊達もその後を追う。

「あゝんまー君待ってえな！」

「置いてかないください！」

「ちょ！二人とも待ってくれ！」

置いてかれた三人も早歩きで谷村の後を追った。
少したってから松谷に着き、各自席へと着く一行、

「俺は牛井並で」

「俺も」

「俺もそれで」

「ウチも！」

「俺もだ。あとマヨネーズ」

「」「マヨネーズ!？」」「」

真夏と城戸と一夏の声が上がる。伊達は牛丼の他にマヨネーズを頼んだのだからそりゃ驚く、

「ん?なんだ？」

「え、え」と……」

「ま、マヨネーズを……」

「何に使うん？」

「何って、そりゃ……」

「お待たせしましたー!牛丼並五人前です!」

そう言っつて定員が各自の席へ牛丼を置いていく。

「お、来た来た!冷めねえ内に早く食おうぜ」

「え……あ、はい」

「そ、それじゃ……」

「いただきます…」

三人は気になったがお腹空いているので検索は後にした。
そしてその直後、あり得ない光景が伊達のところで起きていた。

「マヨネーズ」

「ブフツ!？」

「ゴホツ!？」

「うひゃあ!？きじゃない!!」

一夏と城戸は口の中に入れた牛丼を吹き、伊達の隣にいた真夏が巻き添えを食らった。

「だ、伊達さん!？」

「何故牛丼に!？」

「うええ〜ん…服にかかってもうたあ〜…」

二人は驚き伊達を見る。一人は今にも泣きそうだったが、

「ん？これが俺のスタイルだ。美味いぞ？食うか？」

「遠慮します」

「お、俺もいいです……」

「二人とも酷いでえ……」

ゴメンゴメンと真夏に謝る二人、だがここで谷村が動いた！

「すげえ伊達さん、美味しい牛丼が犬の餌に昇格だあ」

「んだとコラアツ!？」

(（うわゝまた喧嘩になる……）)

「フキフキ……」顔を吹いている

伊達は立ちあがり谷村を睨む、だが谷村はそんな事お構いなしに牛丼を口に運ぶ、

それに怒ったのか谷村に掴みかかろうとしたが……

「お、落ち着いてください！伊達さん！」

「そうですよ！他のお客さんに迷惑が!？」

「離せ！コイツいっぺん痛い目にあわせねえと！」

「まあまあ伊達の旦那落ち着いて……」

「おめえが喧嘩フツかけてきたんだろうがぁ!!!」

うがー！と伊達が怒り、それを必死に止める一夏と城戸は心底疲れ

た表情で店を出たと言う。

「ん」牛丼美味しいでえ」

その光景をとりあえず他人のふりをしながら顔を拭き終わり、食事に専念する真夏、

こうして一騒動は何とか収めた一向は谷村は伊達に怒られながらもイヤホンで競馬の状況を聞きながら警察署に連れて行かれ、城戸は新井のところに戻ると言って真夏と一夏が残された。

「……ほな皆を見送ったし、ウチらも変えるか？」

「そうだな…まなちゃん俺の家で遊んで行かないか？」

「ええで、いこ！」

そう言つて真夏は一夏と手を繋いで駅へ行く。

だがその後ろから野球帽の男が真夏達を見ていた事に二人は気づかなかった。

その人物はスウと身を隠し、姿を消した……そして、ついに神室町に惨劇が始まるうとしていた……

ここは神室町から離れている路地、

千冬は今日曜の休みを利用してここ龍司とおやつさんがいるタコ三味にいた。だが客としてではなく、

「嬢ちゃん！三人前追加や！頼むで！」

「はい！」

何故かタコ三味のアルバイトをしていた。

龍司も何故千冬がたこ焼きに興味をしてめしたのか今一分からなかったが、

自分と同じくたこ焼きを好きになってくれたと言う事で良しとしていた。

毎回言うが、真夏や沙紀や千冬がアルバイトや手伝いとして来た事で店の売上がウナギ登りなのは言うまでも無い。

「龍司さん出来ました！」

「早いやないか、千冬嬢ちゃんええ腕しとるで」

「あ…ありがとうございます！」

千冬は龍司に褒めれた事を嬉しそうに微笑む、それは真夏もある千冬の親友すら見たことない笑顔だった。

「その調子で頼むで」

「はい！」

そう言つてタコを回して焼く千冬、そして今日の売上も上々の内に店じまいとなつた。

ある日のウサギ……………

「なんで！？なんで束さんの出番が無いのかな！？」

それはO F T H E E N Dの最後で活躍します。

「長いよ！？」

我慢してください。

「酷いよー！！」

こつして神室町で起こる悲劇が近づいて行った……

五話や！」「伊達マヨラーや！」「（後書き）

束「ちーちゃん…束さんの出番が無いよ」……」

千冬「もう少し待ってる…」

束「ぶ」…ちーちゃんは束さんよりもあの厳ついおじさんが大事なの？」

千冬「そうだ」

束「即答！？酷いよ」……」

千冬（ハア…我が親友ながらメンドくさい……）」

作者「苦勞が絶えないのは、どこのssでも同じですね千冬さん…」

六話や！「始まりは突然にや……」（前書き）

真夏「うゝん……」

一夏「どうしたんだ？まなちゃん」

真夏「うゝん……」

一夏「まなちゃん？」

真夏「……ウチの名前に龍を入れるの忘れてもうつたらしい…作者が」

一夏「入れたかったんだ……」

六話や！「始まりは突然にや……」

ここは夜の神室町……夜になると普段昼は閉めている店が開店する時刻、そこに幼い少女と男がいた。

「さあ夜の神室町に出発や」

「大丈夫なの？まなちゃん……」

真夏と秋山が夜の神室町に繰り出していた。

普通はこんな夜中に男が少女とお手て繋いで歩いていたら補導されかねない筈だが、

ここは神室町…犯罪ウェルカムである。

「大丈夫やおとんには友達と一緒に行くゆうつたし、おとんも今日は夜まで営業するっていっとったしな」

「そうなんだ…じゃあ良いかな？」

秋山も神室町の雰囲気と常識に毒され判断意識がマヒしている様である。

伊達に極道達が銃刀法、傷害、チンピラは窃盗に後ドンパチにエトセトラエトセトラ……

「せや！行くでえ」

そう言つて真夏は秋山と手を繋いで犯罪臭をプンプンさせながら歩く、ここは神室町……常識にとられない町である。と少し歩くと目の前にフラフラのオッサンが姿が見える。

「うつゝ……うつゝ……うつゝ……うええええええええっ！！！！」

「おっと！？」

「うひゃあぁっ！？」

真夏と秋山の前で……お察し下さい……秋山は真夏を庇うようにその男の横を通り過ぎる。

オッサンはその場で膝をついて高い酒を地面に出していた。心配になって真夏が駆け寄ろうとしたが秋山に止められ、神室町では珍しい光景だから平気さと言って真夏をその場から連れて行く。

これが日常茶飯事なら今頃神室町はゲ○の町に成っている事だろう。

「平和だねえ……」

「び、びつくりしたで……」

「かかって無い？大丈夫？」

「へ、平気や。なんとか……」

そう言つて二人は気を取り直して町を歩く光輝くネオンが町を照らし真昼の様な明るさを保つ、店の前では売り子や接客員が客を店へと誘う光景が見られる。

ここは神室町…普通は良い子は寝る時間である。と後ろから大声が聞こえた。

「秋山さん！」

「ん？」

「ほえ？」

秋山は名前を呼ばれ後ろを振り向き、真夏も何事かと思い後ろを向くと……

「サイの突進や」

「違うわよ！」

「な……花ちゃん」

二人は声をかけた人物を確認すると真夏はどうしたんやろ？言い、秋山は心あたりがあるようでバツが悪そうだった。この女性は秋山の会社、スカイファイナンスの社員こと、花である。真夏と花は一年前に知りあったと言う。だが真夏が言うには昔の花と今の花とはかけ離れていると語っている。

「はあ……はあ……何やってるんですかもう！約束、忘れちゃったんですか！？」

「え、え……と……」

「約束う……？」

「集金ですよ！集金！今日こそちゃんとやるって社長言いましたよね！？」

「い、言ったかなあ……？」

「もう！私、こんな体調なのに町中探しまわって……熱もほら、三十七度ですよ！？」

そう言つてカバンから温度計を取り出し計った熱を見せる。

それを秋山の背中にへばり付いている真夏が食い入るように見る。

「ほとんど平熱じゃない」

「ホンマや……」

「微熱ですよ！いいんですか？私倒れちゃっても社長だけでウチの会社やってけます！？」

「やってけ……」

「ウチがおるで？」

「まなちゃんは黙つてなさい！！」

「ほい」

真夏はそそくさと秋山の背中に隠れる。

「……無いよね。うん」

「だったら自分のケータイくらい持ち歩いててください！」

そうスカイファイナンスの社員である花は言つて秋山にケータイを渡す、

花は少しカンカンであつた。苦勞が絶えない花である。

「以後、氣をつけます……」

「夜遊びはお預けかいな……」

「ゴメンね？まなちゃん」

「もう社長はどうしてこうまなちゃんに甘いんだか……」

ブツブツと口うるさく言う花に秋山はヤレヤレと言って集金へと向かった。

真夏も夜遊びから集金の手伝いに変更して秋山達に付いて行く。その姿、ギリギリ親子である。

「まあええか……それじゃ張り切つて集金へゴッ！」

「ゴッ」

「はあ二人してふざけて……もう」

花は疲れた様にして二人の後に続いた。その時、

「ん？」

「どうしたの？まなちゃん」

真夏は目の前を横切る野球帽を被る黒ずくめの男を見ていたが秋山と花は気づかなかつた。

「ん…気のせいや、何でもないで」

「そっか…じゃあ行こうか」

「うん」

「社長、早く行きますよ？」

「ああ、直ぐ行く」

そう言つて真夏の手を取つて歩き始める。その後神室町最初の事件が始まつた……

場所を代わり、ビルのエレベーター前で野球帽を被つた男がエレベーターを待っていると、後ろから声を掛けられる。

「失礼ですが…どちらさんで？」

「……………」

男は答えない。そしてこのチンピラ風の男に悲劇が起こる。

ここは神室町の一角の事務所、そこに靴を磨く極道がいた。

「おお、親父の靴まだまだあるからな」

「「「ウツス！」」」

その組長のものである靴を磨いていた。

組長は雑誌を読みながらエレベーターを監視しているモニターを見ていると、

組の一人が野球帽を被った男の肩を掴んで振り向かせると……

「!？」

突如モニター内で野球帽の男が組の男に掴みかかった。

そして組長が慌てて組の者に言う。

「おい！カチコミだ！」

そう組長が言い、組の者たちは慌てたたく立ちあがり、

「おい、明りを消せ！守りを固めろ！」

そう言っ守りを固め、部屋の明かりを消した。

「「「「……………」」」」

チーンッ♪

エレベータのドアが開き、その乗っている男の姿を確認すると、見えるのは組の一人の男だった。
しかし…………

ドサッ！

組の男は血を流しながら倒れ伏し、その後ろからカチコミをしに来たと思われる男が立っていた。

そして数秒後、我に返った極道達が一斉に…………

「…………うおおおおおっ！！！！」

パンッ！パンッ！パンッ！パンッ！

持っていた拳銃で男に発砲した。男は撃たれながらも直立不動して立ちつづけ、そして頭部へと銃弾が命中する。男はこれには溜まらず体勢を崩しかけたが、まだ立ったまま顔をだらんとさせていた。そして野球帽の男はゆっくりと顔を上げ、目を開く。

「……………」

その目は不気味に赤く光っていた。その後組の者たちの惨劇が始ま

った。

視点・「郷田真夏」

「んで？誰から集金するんや？」

「え〜と、確か……ん？」

秋山が立ち止まる。それを見て真夏と花も止まる。

「どしたん？」

「いや、なんか人だから……」

「おい、アレ……鉄砲の音じゃねえか？」

「ヤダ……警察に届けた方がいいんじゃない？」

秋山達は野次馬の声を聞きその銃声の音がする方へ目を向けると……

「……………この銃声……密造銃の銃声音が複数……それに正規品の銃の音も混じってはるな……」

「なんでそんな事を分かるの？まなちゃん……」

「前にごーちゃんに撃たせてもらうたんや」

「あの人は五歳児に何を教えているんだ……」

呆れる秋山に真夏は不思議そうにして見つめている。もう真夏は普通の五歳児では無くなっていた……突如四階の窓ガラスが割れ、そこからスーツ姿の男が堕ちて来て……

ドサッ！

野次馬はポカーンとしていたが、直ぐに悲鳴を上げてその場から少し離れた。

「あ、あははは……こりゃ、集金どころじゃないよね……」

「駿ちゃんって事件体質なんかな？」

「……………それはまなちゃんもじゃない？」

そんな事無いで？と言いながら見ていると堕ちて来た男が立ち上が

ろうとしていた。

そして騒ぎを聞きつけた警官が堕ちて来た男へと駆け寄る。

「退いてください!」

「道を開けてください!」

そう言ってやっと男の元へと駆け寄る。

「これで解決やな」

「そうだといいいんだけどね……」

「二人とも!見学はそのへんにして早く集金に」ぎゃあああああ
っ!?!「へ!?!」

花が二人に喋っていると警官の悲鳴が聞こえて三人は悲鳴がする方
へと視線を送る。

「しゅ、駿ちゃん!」

「おいおいマジかよ……」

「な、何で警官が噛まれてるの!?!」

そう、堕ちて来た男が警官の喉元に噛みついていた。もう一人の警
官はアタフタとしていて何も出来なかった。野次馬はその光景を見
て悲鳴を上げながら逃げ、足元に男と一緒に堕ちて来た拳銃を蹴る。
そして蹴られた拳銃は秋山の足元へとやって来た。

「ん？」

「お、マケドニアシューターやん。ええ趣味しとるでえ」

「それどころじゃないでしょ！？」

真夏の言葉に突っ込みを入れる花、そして男は警官を解放してもう一人の警官へと向かう。

「へ！？お、おいく、くるなあ！」

警官がそう言っても男は止まらず、警官の肩を掴み引き寄せる。引きはがそうと警官も暴れるが男の力は異常に強く引きはがせない。

「た、助けてくれえ！！」

「しゅ、駿ちゃん！お巡りさんが！！」

「！！」

秋山は真夏の声で銃を拾い上げて男の方へと構える。

「おい、動くな！」

「秋山さん！」

「駿ちゃん！」

男はその声に反応したのか、男が警官の拘束を解き秋山の方へと向く、

「駿ちゃんって銃使えるん？」

「し、知らないわよ！」

「動くな。動けば撃つ……」

だが秋山が威嚇をしてもその男はこちら見続け向かってくる。
秋山も相手の行動の異常差に気付き始めた。

「おい、本当に撃つぞ？……」

「なんや全然引く気配がないんやけど……」

「撃たれたら…痛いんだぞ？」

「そりゃそうやろ」

そう言っただけしていると男の見る目が秋山から代わり……

「……………へ？あ、あれ？な、なんやなんでウチを見とるん？」

真夏の方へとフラフラと歩いて近づいてくる。

これには真夏も怖いのか秋山の後ろへと隠れる。

「しゅ、駿ちゃん！…あの人…怖いで…」

「まなちゃん！俺の後ろに、花ちゃん逃げるんだ！」

とその時、後ろにいた警官が男に向けて銃を発砲した。

パンツ！パンツ！

だが、男は少しよろけただけで効いて無いようだった。撃った警官はそれを見た後上から降って来た別の男達によって……

「ぎ、ぎあああああああ！！！！」

男達は警官に掴みかかって襲う、その光景を来てヒツと悲鳴を上げる真夏を抱き上げた秋山は走り出す。

「どうなってるんだ？」

「わ、わからへん……」

そう言いながらもこちらを標的したかの様に秋山と真夏を追いかける男達、

秋山は逃げる為、地下街へと逃げた。

「……！！、あらら……」

「ど、どうしたん？」

肩に担がれている真夏は秋山が走るのをやめた事に気づき声をかける。

「……シャッターが下りてる……」

「え〜と…それって」

「袋のねずみだね……」

そう言つて秋山がシャッター蹴る。

「しゅ、駿ちゃん！う、後ろ！」

「！」

「「「あ”あ”……」」」

後ろからつめき声の様な声を上げる男達、その姿を確認している
と、

「な、なんで噛まれた警官まで追いかけて来たんや!？」

「おいおい…増えちゃってるよ…」

秋山は真夏を肩からおろして迫りくる男と警官達に言う。
真夏はすぐに秋山の後ろへ隠れる。

「あのー…穩便に話し合う気はないんだよね?…きっと」

「き、来とるで…」

「絶対…無理なんだよね?」

「も、もうそこまで……」

「そしたら悪いけど……」

「しゅ…駿ちゃん!」

「俺はこんなところで死にたくないし……」

秋山は銃を構え、真夏の方を見る。

「まなちゃんに指一本触れさせる訳にもいかないんでね!」

その日、神室町で一人の金貸し屋の男が大事な友を守る為、銃をぶっ放した。

六話や！「始まりは突然にや……」（後書き）

一夏「始まったな…とうとう」

真夏「そやね…ウチどないやるんやろ？」

一夏「そうだな…所で、名前に龍を入れるって話は？」

真夏「作者が名前を変えるエピソードを考え中や」

一夏「変えちゃうんだ……」

真夏「ん？どしたん？」

一夏「な、なんでもない（同じ夏が入ってるのがよかったんだけどな……）」

七話や！「秋山フイバーや！あとだいちゃんも」(前書き)

上手に出来ま……できたかなあ？

七話や！「秋山フィーバーや！あとだいちゃんも」

パンツ！パンツ！パンツ！

「キヤー」駿ちゃん集金取り立てる姿もカッコええけど撃ってる姿もカッコええで〜！」

「そんな事言ってる場合じゃないでしょ！？」

秋山は撃ちながら移動し、真夏は……

「ほれほれ〜鬼さんこちらっ手の鳴る方へ〜」

「さっきまで怯えは何処に！？」

真夏がオトリになり秋山がその隙を突いて真夏に襲う”奴ら”を撃つ、

だが秋山がいくら撃つても多少は怯むが全然奴らの勢いは収まらない。

「うひょ！？あつぶなあ…もう少しで鬼になるところやったで……」

「ほんとに鬼にされちゃいそうだけどね！」

「あ”あ”……………」

「あー！もう！なんで倒れない！」

秋山はいらつく、早く無力化しなければ真夏も危ないからである。

「どうすれば……!」

「駿ちゃん駿ちゃん」

「!、な、なに?」

真夏は奴らに追いかけてまわされながらも秋山と話す、

「この手の相手はお決まりの急所があるで?」

「急所?」

「せや、急所や」

そう言つて真夏は奴らを指差して秋山に撃つ場所を教える。

「狙つて!」

「わかつたよ!」

秋山は真夏の指さす方へと銃を構え……

「ザケル!」

パンッ!

真夏は意味の分からない言葉を言う。その声に反応して秋山が撃つ

た急所は……

「あ”――――”――――」

ドサッ！

ゾンビは頭を撃ち抜かれ、倒れるその後起き上がることは二度となかった。

「た、倒れた……」

「ナイススキルや」

「あ”あ”……」

一体は倒したがまだ四体いた。真夏はその後オトリを続けて秋山を援護する。

「駿ちゃん！」

「任せて！」

パンッ！ パンッ！

秋山は正確に急所を狙い撃ち、確実に倒して行く。

「ビューティフォー………や」

「後二人………！」

そして秋山が最後の二体に向けて発砲する。

パンッ！ カチッ！

「！？」

「ん？なんや弾切れか…？」

「クソッ！こんな時に！」

秋山は予備のマガジンなど持っていなかった。その場で銃しか拾っていないので当たり前なのだが、

「し、駿ちゃん！？」

「！？」

秋山がどうしようか悩んでいると真夏の声が聞こえ見ると、

「まなちゃん！！」

「あ”あ”………！」

「い、いやあ………来ないでえ！」

真夏は壁際へと奴らに追い込まれ、ジリジリと後ずさる。

「まなちゃん！クソっ！！」

秋山はいても立ってもいられず真夏に駆け寄るが相手の警官を掴んで離さなかった腕力を思い出し、思いとどまる。

（駄目だ！もし俺が噛まれてあいつらと同じになったらまなちゃんを襲ってしまうかもしれない！）

秋山は必死に考える。

（もし噛まれた時の自決用の弾が……）

弾切れを起こした銃を恨めしそうに見つめる秋山、すると真夏が秋山へ向けて叫ぶ、

「駿ちゃん！」

「！、まなちゃん！？」

「これを！」

真夏はポケットから銀色の輝く何かを手を上げて見せる。

「それは！？」

「さっき駿ちゃんが倒した男のポケットから落ちて来たんや！」

それは秋山が使う銃のマガジンだった。

真夏はそれを思いっきり振りかぶり下へ滑らす様に投げた。

「受け取ってや！」

「ああ！」

秋山は真夏がマガジンを投げると同時に走って飛び込む、秋山がでんぐり返ししている途中で真夏が地面に投げる様に滑らせたマガジンを取り、銃のマガジンキャッチボタンを押して空弾装を捨て、それと同時にマガジンを銃へと挿入する。

カシャッ！ ジャキンッ！

スライドレバーを押してスライドを前後に戻し、秋山は素早く構え、こう言い放った。

「少女趣味は二次元だけに留めろっ！」

パアンッ！

「あ”っ……」

秋山の撃った弾は奴らの頭部へと吸い込まれる様に当たり、

ドサッ！

倒れ伏した。秋山は撃った体勢のまま呼吸を乱していた。そして真夏は秋山に駆け寄り無事を確認する。

「駿ちゃん平気か？」

「あ、ああ……なんとか」

秋山は体を起して腰を叩く、

「ふうう……年甲斐もなくダイナミックショットをやるもんじやないねえ……」

「フフ、何言うとるんや？駿ちゃんは十分若いで？」

「そうかな？」

「そうやって」

二人は笑いあう。その時花が階段から下りてくる。花は二人を見つけ無事を確認して駆け寄る。

「秋山さん！まなちゃん！」

「花ちゃん！」

「やあ、花ちゃんも無事だった様だね」

真夏も秋山も花の無事を確認してホッと一息した。

「でも…これって…」

「……うん、そうだね……」

「いったい……これは……」

三人が倒れ伏した奴らを見て吹いていると、真夏が……

「映画の撮影には中々気合が入ってるで」

「へ？」

「え、えつと？」

真夏は秋山達から離れて撃たれて倒れている奴らをツンツンしていた。

「ホンマに上手く演技してるでえ、このゾンビ役の人たち……」

「えつとまなちゃん？」

「ん？なんや？」

「今の……撮影だと？」

「？、違うんか？」

「あゝ……えつと………そうだね。うん！映画の撮影だった見たいだね」

「やっぱりそうなんかゝそらそうやよなあホンマにゾンビなんておるはずないよなあ……」

「えっと…秋山さん？」

『シッ…下手に本当の事を言ったらまなちゃんがパニックになるかもしれない…』

『と、言うത്？』

『このまま黙ってよう。後、一度スカイファイナンスに戻って状況の整理をしたいし』

花と秋山は未だ役者だと思っている真夏は倒れている人をツンツンしていた。

また起き上がって真夏を襲いかねない奴らの側にいる真夏を見て気がでない二人は即座に行動した。

「さ、さあ！まなちゃん！今日はもう帰ろう？撮影も終わった事だし」

「ん？もう帰るんか？監督とかからギャラ貰ってへんのに？」

「あ、あとから振り込み式だから大丈夫さ！さ、帰ろう？」

「そ、そうよまなちゃん！もう遅いから私達の会社に帰りましょ？」

秋山達は必死で真夏を説得した。真夏は二人の必死様に可笑しそうに見てそれから秋山達の言う事を聞いて立ちあがる。

「そやね。もう遅いし…今日はお開きやな」

「じゃあ行こう。もう冷えてきたし」

「そ、そうですね社長！」

「?……なんや分からんけど二人とも必死やなあ……まるで何かを隠している様に見えるんやけど……」

「ドキッ」

「あわわわ……」

二人は真夏に言われアタフタしていたが、とりあえず今はこの場から離れる事にした。

「さ、さあ行こう！」

「え?あ、ちょ……」

「行きましょう！」

「い、行き成りどないしたんや？」

真夏は訳が分からず頭を悩ませていた。そして真夏は何かを思い出したようにして倒れている奴らに、

「あ!そやったわ……えっと、お疲れ様でしたー！」

そう言っただけで倒れている奴らに手を振りながら秋山に手を繋いで連れて行かれる真夏、

花と秋山はそそくさとその場を後にした。

秋山達がスリルを味わっている頃。ここは龍司が働いているタコ三味、そこに織斑兄弟の姿があった。

「一坊！一人前追加や！頼むでえ！」

「はい！」

「一夏、気合を入れろ」

「千冬姉ちゃん…なんで俺働いてるんだ？」

一夏は姉に連れて来て貰って龍司の店で働いていた。

「将来の為に成る。覚えとけ…（そうすれば龍司さんの店に気兼ねなく行ける！）」

案外黒い姉だった。一夏の将来の為に成ると聞きとりあえずは龍司から仕事を覚える。

「龍司さん！出来ました！」

「おう！」

龍司は一夏からたこ焼きを受け取り、その盛り合わせに不具合が無いか見る。

「ええ感じや…やるやないか！一坊！」

「ありがとうございます！」

一夏は龍司に頭をクシャクシャに撫でられ、少し恥ずかしそうにして笑顔になる。

「この調子で頼むで」

「はい！」

「一夏、頑張れよ」

「おう！任せとけ千冬姉ちゃん！」

そう言つてまた注文が来てたこ焼きをパックに詰める一夏、千冬はそれを微笑んで見ていた。

（中々に上手い手付きだ……今度の夕食のたこ焼きも期待できそうだな……）

千冬は少し楽しみにして二人の仕事を見ていた。
そして龍司達はあとから気づく、真夏達がある男の復讐劇に巻き込まれている事を……

オマケ・「東城会六代目、仏の顔も三度まで……の巻や！」

「おやっさん！宣伝に行ってくるで〜！」

「おう、きいつけてな」

日曜日、ウチは今町中でたこ焼き屋をやっているおやっさんとおとんと一緒に営業をしとるんや
おやっさんのたこ焼きはむツチャおいしいねん！せやから接客とかのお仕事とかが多いんよ。

でもおやっさんの店にくるお客さんは何故かまいどウチが接客や宣伝する時が多いんや、何故やろ？

「たこ三味のたこ焼きはむッチャ美味しいですよ！よってってや〜！」

ウチは少し店から離れた路上で店の宣伝を始める。

「たこ三味の店によつてな〜！美味しいで〜！」

ウチがそう宣伝するとウチの周りにはたくさんのお客さんが集まってくる。ウチはそのお客さんを店まで案内するんがお仕事や、

「おやつさ〜ん！六人様追加や！」

「おう、ご苦労さん」

そう言っておやつさんはウチの頭を撫でてくれる。
おとんもそれを見て笑ってたんや、

「えへへ〜♪」

「ほな、また宣伝頼むで…郷田！六人分追加や！」

「へい！」

おとんはおやつさんに言われて、慣れた手つきでたこ焼きを六人分の紙パックに入れていく、
その素早さはおやつさんには遠く及ばないもののなかなかの腕やつた。

「おとんも上手に焼けました〜やな！」

「まだまだや、おやつさんの腕には遠くおよばへん」

「そないなことないって」

「まあ、まだ暖簾を譲るにはまだまだやな」

「おやつさんまで……」

おやつさんは厳しいな。おとんのたこ焼きは早くてむっちゃ美味しいのに……

「ふん、おおきにな真夏……ワイもぎょうさん腕を上げるさかい。そんときやおやつさんの味を超えるたこ焼き食わしたる」

「おとん……うん！」

「へっワシの味を超えたきやワシの腕見てもっと腕を上げい」

「へい！」

「おとん！ファイトや！」

「おう！」

おとんは気合よく声を出してウチに返事をしてくれはった。

「ほら、真夏ももう行きや。客をぎょうさん集めたツてくれ」

「了解や！」

ウチは走って人の多い場所へ向かう。そして何時も通り大きな声を出して宣伝をする。

「美味しいたこ焼きありまっせ〜！よってってや〜！」

ウチがそう言うといろんなお客さんがウチによってくる。もっと声だしてぎょうさん稼ぐで〜！

「たこ三味のたこ焼きは世界一いいいいいいいい！！！！」

ア、アカン……少し気合を入れ過ぎてもうた……お客さんが引いてしもうてる……

そんなこんなで店は大繁盛、ウチとおとはホクホク顔で家路に着いた。

「おと〜ん、いっちゃんの家遊びにいつてもええか？」

「ん？千冬の嬢ちゃんの家にか？」

「そや、いっちゃんと遊ぶ約束してんねん」

ウチがそう言っておとんに頼むとおとは笑って言う。

「ええで、でも暗くなる前には帰るんやで？」

「うん！分かったで！」

そう言っただけでウチはいっちゃんの家に向かって走る。

「ん？曇って来よったな……」

おとんが何言うたかは離れてしもつてよう聞こえなかったけど、ウチはおとんの吹いた言葉を聞いてやな予感がしたんや。この時、ほんまにあないな事が起きるなんて思いもせんかった……

視点・「織斑一夏」

今俺はまなちゃんとの約束があつて自分の家の前で待っていた。

「遅いな…まなちゃん」

俺がまなちゃんがくるのを待っているが、その待っている人物はなかなか現れない。

ちなみに、俺は普段千冬姉ちゃん意外はちゃん付けはしない。では何故まなちゃんはちゃん付けして呼んでいるかと言うと……

（ウチがサッカーで勝ったらまなちゃんって呼んでな？）

まなちゃんにそう言われ、俺は負けるはず無いと思つて勝負をしたのだが……結果…負けてしまった……

と言う訳で俺は真夏をまなちゃんと呼ぶ事になってしまった…これ結構恥ずかしいんだがな……

「ふう…少し様子を見てくるか…」

俺はまなちゃんの家のある方向へとかけだす、アイツが約束の時間に遅れるなんて結構珍しい……
そう思っている……

「ん？アレって……」

少し走ってから少し経つと黒服の一団がいた。

（なんだあれ？）

俺が少し近づくと黒服の人たちの奥に誰かがいた。

「あの子って…まなちゃん？」

囲まれてる？そう思っていると、

「来てもらおう」

「嫌や！離してえ！」

（！？）

ま、まさかこれって……

（ゆ、誘拐！？）

俺は誘拐の現場を目撃した。それも自分のいところがさらわれようと

している。

（な、なんとかしないと……！）

でも…俺は、その場に動けなかった……

（ど、どうすれば……）

俺が躊躇していると黒いワゴン車が黒服の前で止まり、まなちゃんを無理やり抱きかかえた男は車にまなちゃんを放り込もうとしている。その時、偶然にも男に担がれたまなちゃんと目があつた。

「！、……………」

（ま、まなちゃん？……）

まなちゃんはずっと俺を見ていた。その目は助けてと…そう呼んでいるようで成らなかった。

でも俺は、その場から動く事が出来なかった……そしてまなちゃんは車に放り込まれ、

「きゃああ！！」

「！、まな……………」

声を出しそうになったが慌てて口をふさぐ、

「ん？」

「どうした？」

「……………」

男の一人が俺に気づいた。不味い、気づかれた!?

「……………いや、気のせいかな」

「そうか、さつさと行くぞ。二階堂さんが待ってる。あっちの方も桐生一馬の泣き所をさらい終わったはずだ」

「そうだな……………」

そう言つて男達はワゴン車に乗り込もむ、

「た、助けなきゃ……………!」

だが俺の足はガクガクと震えていた。なんだよ…なんで震えてんだよ!?

その時聞き覚えのある声がした。

「ちよつと待つて貰えないか?」

「ああ? なん…バキイ!…ブべらッ!？」

「え!？」

俺は顔を上げるすると…………

「まなちゃん、東城会の大事な人なんでね? 返してもらつ……………!」

そこには神室町を仕切る……

「誰だテメエ!？」

「俺か?俺は……」

東城会六代目会長……

「俺の名は……」

「堂島大吾だ」

堂島大吾さんその人だった……

「んうゝ!んー!(だいちゃん……!!)」

「まなちゃんは返してもらうつよ?」

「と、東城会だとお!？」

「そ、それも六代目!？」

「ひ、ひるむな!やつちまえ!」

ヤラレ役の台詞を言う黒服の男達は次々と襲いかかるが、大吾さんは微動だにしなかった。

「危ない！」

俺がそう叫ぶ大吾さんは相手の手を取り、

「ふんっ！」

ボキッ！

「ぎいやああああああっ！？」

腕をへし折った。それを見た黒服の相手は驚く、

「ひ、ひいい……」

「お、折りやがった……！？」

「いてえ……！」

「神がお前達を見逃しても……」

大吾さんは後ろを向き背中を指差す、

「俺の背中中の不動明王は見逃さない！」

「うっう……」

「こ、こいつ……」

「た、助け…助けて……」

大吾さんは拍子抜けと言った感じで溜息を吐く。

「今ならあまり血を見ずに終わらせてやる……まなちゃんを解放しろ」

「く、クソっ！」

大吾さんジリジリと後ずさる男達に近づく、するとまだ車の中にいた一人がまなちゃんを抱えたまま出て来て、

「動くな！コイツがどうなってもいいのか！？」

「！？」

「んー！んー！」

そこには口に布を巻かれ縛られているまなちゃんがいた。

「てめえら……！」

「へ、へへ……これじゃあ手も足も出せねえな！」

「仲間の腕折られたケジメ付けさせてやるぜ！」

そう言っ大悟さんに近づいてくる男達に、大吾さんの顔が陰しく

なる。

ど、どうすれば!?

(そ、そうだ!まなちゃんを助け出せば!……でも……)

ど、どうやって!?!そうしているうちに男達と大吾さんの距離が縮まって行く。

………お、俺がやらなくちゃ!

「逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ!」

そう自分に念じて覚悟を決め、俺はまなちゃんを捕まえている男の元に走った。

「うおおおおおっ!……!」

「!?!、な、なんだ!?!」

「まなちゃんを返せえええええっ!……!」

「一夏君!?!?!」

「な!?!まだ仲間がいたのか!?!」

皆が驚いているがそんな事知らない!今はまなちゃんを!

「まなちゃんを返せ!」

「なあ!?!い、いてて!コイツに足に噛みつきやがった!?!」

俺は男の足に噛みついてまなちゃんを助けようとする。

「は、離せ!」

「んー!」

「んうー! (いっちゃん!)」

「このガキ!」

男は思いっきり足を振って俺を蹴飛ばす、その勢いで俺は飛ばされて壁に当たったしまった。

「ぐうっ!」

「んー!?」

「一夏君!?」

くっ!……負けるかあ!!!

「まだまだあ!」

「こ、こいつ性懲りもなく!?」

俺はまた再度男の足に噛みついてまなちゃんを助ける。

「いててててっ!?このガキ!」

ゲシッ！

「ぐっ！！」

「んっ！んっうー！！」（いっちゃんもう止めてえ！）

まなちゃんが何か言っではいるけど俺は……

ガシッ！

「な！？今度は掴みやがった！？」

「俺は……」

俺は龍司さんに！

（一坊…ワシは昔恨まれる様な事しotta…せやから、真夏にもそれが及ぶと思うんや…）

俺はあ！！

（せやから、そんときに真夏の一番近くにおる一坊に……）

まなちゃんをお！！

（真夏を守って欲しいんや…ええか？男の約束やで？）

「守る！！死んでも離さない！！」

「こんのがキはああ！！！！」

男は足を上げ、俺を踏もうとする。

「死ねやあ！！」

「んーーーー！！」

「くう！！」

俺は目をつむって痛みをこらえる。だがその痛みは来なかった。

「ふうう…間髪…だね」

「な、なああ！！」

「え？」

「んんう？」

俺はゆっくりと目を開けると、

「もう大丈夫だ。一夏君…あと残っているのはコイツだけだよ」

「へ？」

「な、なにに！！」

俺はあたりを見回す、すると……

「お、お前ら!!」

向こうで血を流して悶絶している二人組の男がいた。

大吾さん……俺がまなちゃんを助けている間に倒していたんだ……

そして大吾さんは俺を踏もうとしていた足を持ち上げて男の体勢を崩し、

「んむう!?!」

「おわあ!?!」

まなちゃんだけを取り上げて男を倒した。

そして大吾さんはまなちゃんの口に着いていた布を取り安否を確認する。

「大丈夫か?まなちゃん」

「大丈夫や!いっちゃんが助けてくれてん!」

「そうか……」

大吾さんはその場でまなちゃんを下ろすと倒れている男の元へと歩みよる。

「覚悟は……出来ているんだろうな?」

「なっ……」

男は何かとてつもない者を見た様な目で大吾さんを見る。

俺にも分かる。大悟さんの後ろに不動明王が見えている様な錯覚が

……

「お前は三回の罪を犯した……」

「さ、三回？」

「まなちゃんを誘拐した事、一夏君に怪我をさせた事、そして……」

大吾さんは握り拳を作り、構える。

その構えは喧嘩殺法だ。

「女の子に涙を流させたことだあああっ！！！！！」

バキイイイツ！！！！

「あべしい！！！？？」

大吾さんの渾身のパンチが男を取らえる。男は円をかく様にフツとばされてそのまま大地に伏した。

仏の顔も三度までってやつだな……

「……………ふうう　一夏君大丈夫か？」

「あ、はい……………大丈夫です」

俺はポカーンと見ていた様で大悟さんに声を掛けられるまで固まっていたようだ。

て、それどころじゃない！

「まなちゃん！」

「いっちゃん！」

まなちゃん俺に賭けつける。

その顔は心配と悲しみで染まっていた。

「いっちゃん！いっちゃん！平気か！？平気なんか！？」

「だ、大丈夫だまなちゃん！伊達に千冬姉ちゃんに鍛え上げてもらって無いからな」

「で、でも口から血いでとるで！？」

「え？ああ、これが……」

どうりで痛いと思ったら、蹴られた時口の中切ったかな？

「俺は大丈夫だよ」

「でも、ウチを助ける為に……」

「まなちゃんの為におった傷だ。どうってことないさ」

「……………」

まなちゃんは声を押し殺して泣いていた。そっか…誘拐されかけたんだもんな…

「……俺は救急車と警察を……むっ!？」

大吾さんは何かに気づいたらしく、慌てた声だ。何かと俺も見ていると、

「ず、ずらかるぞ!」

「「「お、おう……」」」

ボロボロになりながらも必死に車に乗って逃げる男達がいた。そして全員が乗り車は急発進して逃げた。

「まてえ!…クソ、逃げられた……!」

大吾さんは悔しそうにして顔を歪めていた。

俺も奴らが逃げた事に腹が立ったが、今はまなちゃんの無事を喜ぼう。

「まなちゃん、怪我は無いよな?」

「うん…グスッ…無いでえ…」

まなちゃんは泣きながら応える。
ほんとに怖かったんだなあ……

「まなちゃんもう大丈夫だから泣かないで……」

「ちゃう……」

「え？」

まなちゃんは声を上げて否定する。
そして顔を上げて俺を見るまなちゃんの顔は涙でぐちゃぐちゃだった。

「ウチが泣いとるんはいつちゃんが怪我したからや……」

「まなちゃん……」

「いつちゃん…もう無茶せんといて…いつちゃんにもしもの事があったら…ウチはあ…」

そう言つて俺に寄り添うまなちゃん、そうか…心配かけちゃったんだな…俺は……

「わりいすまねえ許せ……」

「そんな…謝らんでもええって…」

まなちゃんはまた泣きだし、俺の胸に顔を埋める。

それに俺はまなちゃんの背中をポンポン叩いてあやす、

（……………守ろう…今度こそ…絶対に！）

俺は生まれて初めて強くそう願った。

「……………お邪魔のようだな……………」

大悟さんは察してケータイを取り出して警察と救急車に電話した。その後警察と救急車が駆けつけて俺はタンカに乘せられまなちゃんと一緒に病院に行った。

そして病院で待ち構えていた千冬姉ちゃんに無茶をするなと抱きつかれて怒られたのは少し意外だった。

千冬姉ちゃんと一緒に駆けつけていた龍司さんは俺の頭を撫でてよく守ってくれたと言いつ俺はなんだか分からないけど泣いた。その光景を嬉しそうに見つめるまなちゃんを見て恥ずかしくなったのはここだけの秘密である。

七話や！「秋山フィーバーや！あとだいちゃんも」（後書き）

真夏「いつちゃん…ホンマに平気か？」

一夏「大丈夫だって、ほんとに口を怪我しただけだから」

真夏「でもお…」

龍司「真夏、傷は男の勲章とも言っんや。褒めたれや」

千冬「龍司さんの言うとりだぞ真夏、一夏は良い事をしたんだ」

真夏「……………そやね…いつちゃん、おおきに！」

一夏「あ…うん…（え、笑顔が眩しすぎる！！）」

八話や！「ウチは……人を……」（前書き）

遅くなつてしまい申し訳ありません

八話や！「ウチは…人を……」

「社長…あれはいつたいたんだっただんでしょう……」

「分からない…まなちゃんの言うとおり撮影だったらよかったんだけどねえ……」

「スピー〜……」

俺は今背中で寝ているまなちゃんを緒ぶって花ちゃんと一緒にスライファイナンスへ帰宅している。

あの襲ってきた連中を片づけたはいいが、どうして俺が襲われたのが分からな……いやあり過ぎて検討がつかないだけか……ともかく、俺は撃ちあつた場所から離れる事を選択して帰る事にしたんだ。

なんでまなちゃんが寝ているかと言うと歩いて帰る途中でコクリコクリと頭を揺らして寝むそうなまなちゃんを俺がおんぶする事になったんだ。まあ、俺は役得だけだね。

「……………まなちゃんってある意味大物ですよな」

「そうだね、あんな事があつたのに寝てるし……」

「うつゝん……えへえ……」

寝ているまなちゃんは何故かにへらあと笑ってよだれを垂らそうとしている。

ちょ！俺のスーツに掛けてしまう！？

「あー今吹きますね……」フキフキ……

「んむう……」

「ふう…危なかった」

危うくスーツが涎かけになるところだった……しかしほんとになん
だっただろうねえあれは……

俺は本物の銃で人を撃った感触を思い出し、少し身震いした。

（まなちゃんにホントの事が分かったら人を撃った俺を責めるかな
あ……）

何故かそっちがかなり心配になる俺だった。と…着いたか……
俺は階段を上がって花ちゃんに鍵を開けてもらい中へと入った。

「どっこちらせつと……」

ポスンッ

「んうう……スウ……」

まなちゃんを起こさない様に部屋の奥に前々から用意していたハン
モック（注：以前からまなちゃんはウチの会社で寝泊まりすること
があつて用意した物だ。ソファーでもよかつただけどハンモック
が安く売られていたから衝動買いしちゃったんだよね……）で寝か
せ寝顔を見る。

「ホント、子供の寝顔は天使だね……」

伊達に「神室町の龍妃」、なんて呼ばれてはいないか……
ちなみになんでそんな異名で呼ばれているかと言つと、まあ……あの
人の娘だしねえ？

「そうですね……」

俺達はまなちゃんの寝顔を楽しみつつ、煙草に火を付けようとした
がまなちゃんがいるので止めた。
そしてさっきの出来事について花ちゃんが切りだした。

「あの人達つて……ホントになんだったんでしょう……」

「分からない……」

奴らがなんで俺達を襲ったのかは分からない……まあいずれ分かる
だろうさ……とその時、花ちゃんは唐突に、

「私……今夜泊つて行きます！」

「へ？」

「だって秋山さんが心配ですし……まなちゃんも……」

「……………俺は良い秘書を持ったもんだ……………」

俺はしみじみそう吐く、まなちゃんと良い花ちゃんと良い、俺は恵
まれている……

「でも襲わないでくださいね？」

「襲う？俺が？、ハ、ハハハハ……」

俺が乾いた声で笑うと花ちゃんはムスーとした表情で、

「なんです？その笑い……」

「えっと……」

花ちゃんは大丈夫として…まなちゃんは……

「まなちゃんも襲わないでくださいね？」

「いや、少女に手は出さないよ？」

「ホントですかあ？」

……えっと……

「……もういいです。私はソファで寝ますから」

そう言つて奥から毛布を持って来て花ちゃんは寝る。さて……

「俺も寝るかな……」

考える事は沢山あるが今は体を休めよう、まなちゃんの親御さんにもまなちゃんから会社で寝るかもと伝えたつて聞いたし、

「明日、何もなきゃいいが……」

俺は不安な予感と共に椅子で寝る。まさか明日にはリアルバイオハザードが起るとは夢だけにして欲しかった……

視点・「郷田真夏」

「ふあゝ……よう寝たでえ……」

ウチは目をこすりながら駿ちゃんが用意してくれはったハンモックから起きあがる。

あたりを見回すと雑誌を顔に乗せて寝ている駿ちゃんと……

「花ちゃん？」

体を震わせて毛布を体にかけてソファで寝ている。花ちゃんを見したんや、

「花ちゃん？平気かいな？」

ウチは少し心配して花ちゃんの元に駆け寄ってん、
そんでおでこに手を置くとかなり熱かったんや、

「これ…もう微熱やあらへんで……」

ウチは直ぐに駿ちゃんを起こしに行く。

駿ちゃんは相変わらずのスタイルで寝とつといた。

「駿ちゃん！起きてえな！」

「う、ううん……」

「駿ちゃんってば！」

「ううん？……まなちゃん？」

「せや、駿ちゃん起きて、花ちゃんが！」

「花ちゃんがどうかしたかい？」

ウチは立ちあがった駿ちゃんの手を引いて花ちゃんのところまで連れて行く。

駿ちゃんは震えている花ちゃんのおでこに手を当てると険しそうな顔をしたんや。

「これはもう微熱じゃないな……」

「それはウチがもう言ったで？それよかはよ花ちゃんを……」

ガチャガチャ！

「！」

「ん？なんや？お客さんかいな？」

でもなんやろう……嫌な予感がするで……

とその時駿ちゃんはテーブルの上にあった拳銃を取ってドアの横へと移動したんや、

「駿ちゃん？」

「あ、秋山さん？」

あ、花ちゃん起きたんや、

「シッ……」

駿ちゃんがそう言つとウチらは黙つて駿ちゃんの様子を見る。
カチリと駿ちゃんは拳銃のハンマーを下ろしてドアに近ずき……

「どちらさん？」

駿ちゃんがそう尋ねても返事が無く、次の瞬間……

ドオオンッ！

「！？」

「な、なんや!？」

「きゃああああ!」

ドアを突き破って血だらけを人たちが押し寄せて来よったんや……
て!

「な、なんや?まさかまだ撮影続いとんのか!？」

「まなちゃん!離れて!」

駿ちゃんがそう言っていると拳銃を構えて入ってきた人たちを迎え撃
った。

ウチは花ちゃんを庇うようにして部屋の奥へと連れて行く。クッ!
お、重いで!

パンツ!パンツ!パンツ!パンツ!

部屋の中で銃声が響く、駿ちゃんの射撃センスは良いようで次々と
入ってきた人を倒す。
せやけど人数が多いようで次第に追い込まれて来よった。

「あ”あ”!」

「!?!、不味い!」

「駿ちゃん!」

ウチはハツとして昨日撮影で拾ったある物を取り出して……

「わあああつ!?!」

「駿ちゃんから離れて!」

パァンッ!

「あ”――――”

ドサリッ

駿ちゃんに噛みつこうとした人をウチは銃を使って倒した。
それを見た駿ちゃんはポカーンとして見てはった。

「駿ちゃんボーとしてはる時やないでえ!」

「え!?!で、でも……」

「はよ!」

「は、はい!」

駿ちゃんは再起動して相手を出迎える。まったく……一日連続撮影
なんて聞いて無いで……

真夏があのに拾った密造銃で秋山と共に交戦し、奴らは何とか倒した。

「ふう……」

「まったく、ウチらの会社を使ってまで撮影するなんて…非常識や！」

相変わらずズレた発言をする真夏に秋山は、銃を使った事に怒って良いのか現実を教えるかで少しなんだ。秋山は直ぐに窓の方へと歩き、外の状況を確認…その後、電話を取って見たものの繋がらずケータイを見たが圏外だった。

「……………花ちゃん、まなちゃん…どうやら集金は無理そうだ」

「どしたんや？なんか外であつたんか？」

秋山は真夏の問いのどう答えればいいか悩んだが、花の状態が最優

先と考えた。

「その話は後だ。大丈夫かい？花ちゃん」

「はい、なんとか……」

「花ちゃんもしかして昨日の風邪が悪化したんか？」

「歩けそう？」

「はい……きゃ」

花は立ちあがろうとするが体に力が入らないらしく崩れてしまう。

「花ちゃん！」

「体の具合は？」

「寒いです…凄く」

「医者がいるな……柄本先生を呼んでくる」

「え？…でも」

花は倒れている奴らを見る。秋山も気づいて苦虫を噛み潰した様な顔をする。

「？、どしたん？」

「いや……とりあえず場所を移そう」

そう言って秋山は花を担ぎ部屋を出る。真夏もそれに続いて部屋を出た。

「どうするんですか？」

「二階にさ、ニューセレナって店があるだろう？」

「はい……」

「そこに立てこもろう」

「駿ちゃん平気なんか？」

「大丈夫だよ……花ちゃん、少し、最近痩せた？」

「おととい……一キロ、痩せました」

「やっぱりね」

「昨日…二キロ増えちゃいましたけど……」

「あつそ……」

「意味無いやん……」

秋山達は真夏を前衛にして階段を下りている。
真夏が前の安全確認をして秋山達はそれに続く、
そして二階に着くと秋山は花を下ろして階段の隅っこになる植木鉢

を退かす、

「よっこらせと……」

「お、鍵や」

「不用心なんですね…セレナさんって……」

「そうなんだよねえ……」

そう言つて秋山は扉に鍵を差し込む、

「でも助かった礼は今度言つとして……」

「せやな」

秋山は扉を開け、真夏はすぐさま中に入り安全を確保する。

「異状無しや」

「……ちよつとだけ邪魔させてもらおう」

秋山は真夏の手慣れた行動に苦笑いしつつ花の肩を担いで中へと入った。

真夏は奥から持つてきてくれた毛布でソファ―横たわる花に掛ける。

「直ぐに戻るよ。柄本先生を連れてくる」

「すみません……気を付けてくださいね……」

「分かってる、終わったら今日こそ集金に行くよ」

「ウチも付き合っで？」

「はい……」

そう言っ外に向かう秋山、そしてそれに着いて行く真夏、秋山が気づき、ピタリと足を止める。

「……………まなちゃん？」

「なんや？」

「なんでついてくるの？」

「？、駿ちゃん一人で行こうとしてはるからウチが手伝おうと思うて」

「いや、外は危険だから……」

「危険って……映画の撮影なんやろ？」

「……………まなちゃん」

「なんや？突然真剣なりはって……」

秋山は決心した様に真夏の肩に手を置くと語りだす。

「昨日の時も、今日起きた出来事も……全部本当の事なんだ」

「本当の事？」

「そうだ。俺が撃ったあの人達も…ホントは役者じゃなくて、本物のゾンビ…かもしれない」

「ゾンビって…駿ちゃん死者が蘇ってホントに襲ってきた言うんか？…笑えん話やで？」

真夏は少し可笑しそうにして笑う。だが秋山が真剣な表情したまま真夏の目を見ている事に気づき、次第に目を見開いて信じられない様な顔をする。

「…ホンマなん？」

「本当だ」

「じゃあ駿ちゃんが撃った人は？」

「…死んじやった…と思う」

「じゃあ…じゃあウチが撃つてもうた人達も…？」

「………ああ」

真夏は手から銃を取りこぼしてその場でガタガタと震える。花も真実を告げられた真夏を心配して上半身だけを起こす。

「う、ウチ…は…ウチ、人を殺して…」

「まなちゃん落ち着いて……」

「ウチ…人殺しなって……」

「まなちゃん……」

「ウチい！」

「まなちゃん！」

秋山は力いっぱい真夏を抱きしめる。秋山の胸の中では真夏が息を殺して泣いていた。

「……………ありがとう」

「え？」

「まなちゃんが俺を助けてくれたから……俺はここにいて、花ちゃんやまなちゃんを助けられたんだ」

「でも……ウチは……」

「それなら俺だってそうさ……まなちゃんよりも多く人を撃つやつたしね」

「駿…ちゃん」

秋山は真夏の頭を撫でる。真夏は撫でられいく事に落ち着きを取り戻し始める。

「それに、あれは正当防衛だ。気にするなとは言えないけど、まな

ちゃんは俺達を助ける為に撃ったんだ……誰も責めやしない。ううん……誰にも責めさせない」

「うん……」

秋山は少しの間真夏を抱きしめたまま頭を撫で続ける。

真夏も落ち着いたのか涙はもう止まっていた。そして数分が立って真夏は秋山から離れる。

「……………決めたで」

「ん？何をだい？」

「ウチも行く」

「は？」

「駿ちゃんだけに行かせられへん。ウチも行くで！」

「い、いや！だから……」

「それに駿ちゃんやて銃もったんは昨日からやる？ほんならウチが教えながら先生んとこまで行くやさかいそれに駿ちゃんの事が心配やねん」

「でも……………」

秋山は真夏を連れ行く事を拒むが……

（……………あれ？不安があるのになんでこんなに心強いんだ

？)

そりゃまあ真夏はガンスリンガー宜しくて銃の扱いは真島に教えて貰っているからだろう。

その指導を受ければ問題無く進める予感が秋山にはしていた。

「……………危険だと思ったら直ぐにセレナに帰るんだよ？」

「それじゃ！」

「あ、秋山さん！？」

「花ちゃんゴメン、一人で残す事になっちゃうけど……………」

秋山は申し訳なさそうにして花に話す、花もはあため息を吐いて…………

「……………もし安全な場所に出られたらまなちゃんをそこに置いて行ってくださいね？」

「分かった」

そう言って秋山は外へと出て真夏もその後に続いた。

「花ちゃん、直ぐに戻って来るわ！」

「秋山さんから絶対離れちゃダメだからね？」

「はい！」

そう言って真夏はドアを閉めて鍵をかけてる。

「はああ……凄く心配だわ……」

花は横に寝て秋山達の無事の帰還を祈りながら瞳を閉じた。

「まずは柄本先生のところに行かないと……」

「そやね、またあないな人たちと戦う事になるんやな……」

「まなちゃん……やっぱり」

「平気や、それでもウチはおとんの娘や……支えるで駿ちゃん」

「っ……ぜったい無理だけはしないでね？」

「うん、約束や」

二人は前を向いて歩く、ここにガンスリンガーガールと金貸しの男と言つ奇妙なタッグが組まれた。

八話や！「ウチは…人を…」（後書き）

秋山「まなちゃん…俺は…」

真夏「駿ちゃん言っただやん、正当防衛やって……それにウチも撃ったんや、駿ちゃんはお門違いやしおあいこや」

秋山「まなちゃん…ありがとう」

九話や！「ピコーン！ウチは新しい武器を手に入れた！」（前書き）

真夏「うゝん職業先は東城会……」

一夏「ま、まなちゃん！？」

千冬「私達は出番無いのだな… IS作品なのに…」

作者「結構後に原作は開始されますけどね……」

九話や！「ピコーン！ウチは新しい武器を手に入れた！」

ウチらは花ちゃんの風邪を直す為、解熱剤を持っている柄本先生の所に行く所や、

それでウチらは花ちゃんを残してニューセレナ出た。

「鍵はちゃんと閉めた？」

「大丈夫やで、鍵はちゃんと閉めたしウチが持ってたもう二丁のハジキも花ちゃんに渡しといたわ」

「用意が良い事で……」

にやははは……ちゃっかりしてる所がウチのええ所やで？

「それじゃ……」

「ほな……」

ジャジャキンッ！

「行こうか！」

「行きましょか！」

ウチらは柄本先生がいる医院がある泰平通り西へ歩く、そしてニューセレナ裏から出て天下一通りに出ると……

「か、神室町が……」

「一体、どうなってるんだこれは……!？」

神室町のあちこちから火の手が上がり、破壊された町やった。

「どないしてこないな事に？」

「分からない……今は柄本医院に急ごう！」

「せやな……」

ウチらは道を阻むゾンビを避けては撃って天下一通りを進む、

「ムムツ！天下一通りの道が塞がれとるで……」

「この先には行けそうに無いな……」

ウチらがバリケードの前で悩んでいると駿ちゃんが壊れた建物を見ている。

「……、？、どしたん？」

「……この建物の奥から反対側に出られるかもしれない」

「え？ホンマ？」

「うん、言ってみよう」

ウチは駿ちゃんの後について神室町西屋上上り口の中に入る、建物の中は所々損壊しており何時崩れても可笑しくは無い状態やった。駿ちゃん勇気あるでえ……

「まなちゃん気を付けて……粉じんで見えないけど、いるよ」

「了解や駿ちゃん、お互いバックアップを忘れんように、な？」

「分かってる、まなちゃんも俺から離れない様にね？」

「おk、や」

ウチらは粉じんで見えん敵を確実に排除しつつ上の階へ通じる階段を上って行く。

「良し、最上階だ……うわっ!？」

「駿ちゃん!？」

ウチらが上り終えると左からゾンビが現れ寄った。

「はいだら!」

パンッ!

「う”あ”……」

うめき声を上げてゾンビは倒れはった、危ないところやったで……

「あ、ありがとう……」

「気い付けや駿ちゃん……行き成りドア破って出てくるんはゾンビの十八番や」

「……以後、気を付けます」

駿ちゃんは頭を下げてウチに謝る。もう……謝って済むんなら他の人やてゾンビにならへんで？

そう言いつつウチは階段の反対側にあるドアに見つけて扉の横に体を密着させる。

「扉の奥にいそうやな……」

「そうだね…お？窓がある」

駿ちゃんはドアの横にある窓を覗く、すると……

「うわ……結構いる」

「どんくらい？」

「二人じゃ対処に難しいくらい」

「困ったもんや……」

ウチらがどう切り抜けるか考えていると駿ちゃんが何かを見つけた。

「！、あれは……ドラムカン？」

「使えるでソレ……何のドラムカン分かる？」

「……………何かの燃料だね」

「なら可燃性は十分ありや、駿ちゃん」

「わかった」

駿ちゃんは窓から銃でそれを狙い、

「当たれ！」

撃った、次の瞬間駿ちゃんの撃った弾はドラムカンに当たり爆ぜた。

「うひゃあ！」

「クッ！」

ウチの横の扉が吹き飛ぶ、あ、危なかったで…巻き込まれてたら死んでたわ……

ドラムカンの横で立っていたゾンビ達は上手に焼けていたんや……
うぷっ……

「まなちゃん平気？」

「な、何とか……大丈夫や」

大丈夫な筈なのに……やっぱりウチに荷が重かったんか？
……………止めよう、今はクスリを取りにいかへんと………！

「平気や……いこー！」

「……うん」

ウチら進む、少し経ってからウチらは広い部屋へ着くと不気味な声が聞こえて来た。

「な、なんや!?!」

「なんだ…この不気味な声は?」

ウチらが辺りを警戒すると、奥の廊下から……

「!、くるで!」

「勘弁してよ!」

ウチら構える数十人のゾンビを目前にして、

「!、駿ちゃん、銃よりもこれを!」

「!、これは!?!」

ウチは駿ちゃんにある物を指差して気づかせる。

「これ、使えるで!」

そつ、お馴染みの……

「鉄パイプ!」

「これで一掃や!」

駿ちゃんは鉄パイプを持って敵へ振りかぶり怒涛の如くなぎ倒す、
うーんやっぱり駿ちゃんは棒で戦った方が見栄えするで、
そんなこんで一掃してウチらは階段を下りるせやけど……

「ちょ！行き止まり！？」

「ん？後ろか！」

後ろからゾンビが現れる。まあ、数が少なかったんで早々と退場し
てもろおたけど、

「ん？この壁は……」

「どしたん？」

「壊せそうだ……あれを壊して外に出よう！」

そう言つて駿ちゃんはウチが持ってた鉄パイプで叩いて壊し道を開
けた。

「駿ちゃん……ここ高いで？」

「まなちゃん、俺に捕まつて」

そう言つて駿ちゃんはウチをお姫様だつてして飛び降りる。
こ、これは！一度は女の子が憧れるシチュなんやないか！？

「もう駿ちゃんウチはまだ五才やで？困るわぁ……」

「ん？何が？」

「なんでもあらへんで」

「？」

駿ちゃんは首をかしげながらも飛び降りて着地する。その時コキッと駿ちゃんの腰のあたりから聞こえてきたのは黙ったところ。駿ちゃんも悲痛な顔しとったし……

「平気か？駿ちゃん」

「ど、どうってことない！」

そないな顔で言われても説得力無いで？

とりあえずウチを下ろして腰をトントンしとる駿ちゃん、

ホンマに歳は取りたくないもんや。あ、ウチはまだ五歳児やった。

第三公園を抜けてウチらは天下一通り裏路地を通り天下一通り表へと進んだんや、

その時にウチはたちちゃんがバイトしてはるコンビニを見つけたんや少し寄ってくと呻き声と一緒に違う声を聞こえた。

「おいっ！しっかりしろ！」

「うっう……」

「今の声……駿ちゃん！」

「うん、彼だね」

ウチらは急いで半壊しているコンビニの中へ入る。

するとコンビニ定員の服を来てトンファーを持つタツちゃんとそのタツちゃんに守られる様に蹲っている知らん人がおったんや。

「真夏！？」

「タツちゃん！ってあれ？どないしてこっちのコンビニいんの？」

「こっちのコンビニ定員が欠落しててな。呼ばれたんだ」

「さよか」

「龍也君！無事だったか」

「ああ、何とか…でもバイトの後輩が……」

「うっう……」

真夏は蹲っている男に近付いて状態を見える。

「……打撲やな、運がええで噛まれてたら助からへんかったで？」

「！、そうか、なら俺はコイツを連れて安全な場所へ避難する」

「一人で平気なん？」

「俺を誰だと思ってんだよ？それに後で沙紀と合流するから心配すんな」

タツちゃんはウチに笑いかけると男の人を担いで外に出ていきよつた。

「タツちゃん……」

「まなちゃん、俺達も自分出来る事をしよう」

「……うん」

ウチらは少し心配やったけど、とにかく花ちゃんを助けんと！
そうしてウチらは泰平通り西へ向かうとそこには……

「なんやの……これ？」

「……なんつーデカイ壁だ……」

ウチらの目の前には行く手を阻む巨大な壁が立ちはだかる。
茫然とウチが立つくしていると駿ちゃんが叫ぶ、

「おい！誰かいなか！？」

「お願い！返事してや！」

「おい！」

ドンツと駿ちゃんが壁を叩いて、ウチが呼んでいると後ろから誰かに声を掛けられる。

「無駄だぜ」

「へ？」

「！」

足音が近ずき、ウチらは後ろ向くと……

「誰も答えやしねえ」

「え、えつと……」

「……………」チャキッ

「おつと」

駿ちゃんが話して来た人に銃を向けて警戒する。
この青い服来た人は手を上げる。でもその顔は何故かあまりビビッ
とらんかった。

「俺達は隔離されたんだ。見捨てられたんだよ」

そう言つてウチらそう告げた……

ウチらが黙つて聞いていると青い服を着た人がまた喋る。

「あんたの事を知ってるぜ、スカイファイナンスの秋山社長だ」

「なんや駿ちゃんしつとるん？」

「いや…こっちはアンタを知らない」

「長濱つてケチな極道だ」

そう言つて自己紹介をする長濱さんは手を下げてこっちに近付く、

「しかしなんだ？最近の金貸しや子供は……いや、子供の方は明らかに可笑的いか……」

「ウチがハジキ持ってたら変なんか？」

「……ノーコメで……昨夜あんたのご同業のを拾つたんだ」

「ならそいつはオレに寄こすのがスジってもんだ」

駿ちゃんはそれを聞いて鼻で笑う、

「本気で「ほい」てつてまなちゃん!？」

「あ？」

ウチは長濱さんに自分の銃を渡す、
それを見て驚く駿ちゃんとポカーンとする長浜さん、なんや？ウチに何か間違つてん？

「おい、何の真似だ？」

「何のつて……銃を返してるんやで？」

「ま、まなちゃん！何を言つて……!」

「ウチのおとんは元極道や」

「…………だから、なんだ？」

長濱さんはウチに視線を合わせて見る、うつうつ…ちょっと怖いかも……

「元極道でも…ウチは極道や無いけど…スジと言っんなら、それは通さなアカンねん…それが元極道でもウチはまだ極道にはなれへんけど、それでもスジだけは通したいんや」

「まなちゃん……」

駿ちゃんは心配そうにウチを見る。

堪忍や駿ちゃん……ウチはやっぱり血は繋がらへん親子やけど、元極道の娘なんよ。

「ウチはおとんに憧れて極道と触れあったんや、せやからスジを通したいんよ」

「……………」

長濱さんが途中から目を見開いて驚いた表情した後、顔を上げて大笑いした。

「はははははははっ！！」

「……………」

ウチらはそれを黙って見ている。笑い終えた長濱さんはウチが渡した銃を押し返した。

「長濱さん？」

「氣に行つたぜ嬢ちゃん、アンタ大きくなつたら度胸のある良い別嬪さんになるぜ？」

「ウチは極道志望や」

「そうだったな、良い極道になる」

ウチと長濱さんは笑いあうと駿ちゃんがヤレヤレとした感じで頭を掻いていた。

「氣に行つたついでに抜け道の案内をしてやるよ」

「え！ホンマに！？」

「極道に嘘はねえその代わりといつちやあなんだが……」

「なんや？」

「ハジキ扱つてる店を知っているそこで俺の銃を調達してくるんだ」

「俺達が？二人で？」

「今ハジキ持つてんのはアンタと嬢ちゃんだけだ」

「ハジキ……確か劇場前通りの地下のDVD店に置いてあるって真島組の人が言つてたなあ……」

なんでしつてるの？と言う突っ込みがきつたけど、まあそれはお

「いおい…な？」

「しかし、極道がどうたらこうたら言ってたけど…まったく、それが極道の台詞かねえ」

駿ちゃんは呆れる。しゃあないやん極道やてゾンビ相手の戦いなんてやった事ある訳ないじ、

「しょうがねえだろ、俺は……桐生一馬じゃねえんだ」

ピクッ

「フッ、伝説の極道、堂島の龍か」

「知ってんのか？」

「……で？ウチらはそのDVD店に行けばええんやな？」

「ああ…てなんだ？どうしてそんな睨ん目えしてんだ？嬢ちゃん」

「まなちゃん？」

「……何でもあらへん…はよい」

ウチは駿ちゃんの手を引っ張って行く。

「まなちゃん？」

「聞きたくない名前を聞いてもったで……」

「え？」

「何でも無いんや…行くで」

そう言っつてウチらは劇場前通りの地下にあるDVD店へと進む、
ホンマ……厄日や、ウチらが行こうとすると長濱さんが言う。

「ああ、あと店の前には奴らがウヨウヨいるから気を付けろよ！」

「あ、ああ！わかった！」

「……………」

……………泣けるで……

視点・「秋山駿」

俺達は途中長谷川と言う女に出会い、何故か不機嫌なまなちゃんと少くし一悶着あったが、

まあとりあえずは依頼やら指令やらを承諾して何とかDVD店に辿り着いた。

「なんやあんまりいいひんかったなあ」

「そうだね、でも都合がよかった」

俺達がDVD店にいると後ろから足音が聞こえる。

「っ！」

咄嗟に俺が銃を向けるとそこには長濱が立っていた。

「良い仕事するな、相棒…金貸しにしとくにや惜しいぜ」

「そりやどうも……っ！」

後ろから人影が見えて俺は拳銃を構える。

「撃つなよ、こいつらは人間だ…敵じゃねえ」

「よおアンタら助かったぜ！銃が手に入りや怖えもん無しだ」

「ああ、ハジキの保管場所はこっちだ」

レザーを来た男はレジに近づいてボタンを押す、

「ここでバイトしてた事があってよ」

そう言いながらレジに入らし終えるとカウンターが地面に沈み壁から段差の様にせり出てきた。

「この通り、暗証番号も知ってるって訳だ」

そう言って男は得意そうな顔でいる。

「ここまで来たらもうSFやな……」

「まなちゃん今は突っ込みは禁止だよ……」

そう俺達が言っていると段差の台が一つ一つ裏返し、いろんな武器が出てくる。

「へえ……」

「ほわぁ……」

俺は拳銃で一番でかい銃を手に取りスライドを下げる。

ガシャンッ！

「……ゴツイねえ……」

俺はそれに夢中で色々銃を見ていると、他の奴らも自分の銃を取って行く

「駿ちゃんそれにするん？」

「ん？まあね」

「秋山」

「ん？」

俺は長濱に呼ばれ振り向く、

「遠慮はいらねえ、アンタから好きなのえらんでくれ」

「…当たり前だろ」

そう言つてフツと笑うとしたからカチャカチャと音がする。

そして下を向こうとしたが長濱に着いてきた連中が啞然として俺の下を見ていた。

（なんだ？）

俺が首をかしげて下を見てみると……

ガチャ… チキチキ… カチャ…… ジャキンツ！

「うゝんサイティングも整備もちよつち不安やなあ……」

そう言つて標準装置や弾装を確認しているまなちゃん、え？なんで

ここまで詳しいの？

「SWS2射撃銃……連射だとウチが使えるからこれでええかな？」

そう言つてスリングを体に掛けて背中に背負うまなちゃん、
なんでだろう……全然違和感が無いや、真島さんの影響かな……？

「ゲイちゃんも、オマエハスナイパーダ！てっ言つてはつたし」

ゲイちゃんって……

「なあ秋山……」

「……なんだ」

俺達が遠い目でまなちゃんを見つめていると長濱が……

「あの嬢ちゃん……ほんとになにもんなんだ？」

「……普段は……ほんとに極道達と戯れる可愛い女の子んだけどね……」

「いや、極道と普通に話せる時点で普通じゃねえぞ？」

「ですよー」

俺達は乾いた声で笑うしかなかった……

「この密造銃は取つといて損はせえへんな……あ、後予備の弾薬と調

整も……」

ホントに凄いや……まなちゃん………

九話や！」「ピコーン！ウチは新しい武器を手に入れた！」（後書き）

真夏「桐生……一馬……」

秋山「まなちゃん？桐生さんがどうかしたのかい？」

真夏「何でも無いんや……何でも……」

龍司「真夏……おめえ……」

十話や！「やっと外に出れたでえ……」（前書き）

感想まっています。はい

真夏「……………そんだけ？」

十話や！「やっと外に出れたでえ……」

ウチらは準備を整えてDVD店から出てすっぽん通りにある出口へと向かう。

まず駿ちゃんと長濱さんが前衛をしてウチが後衛でスナイピングして援護する形や、

それのお陰か直ぐに地下から出れたで、

「地下から出たで」

「よし、直ぐにすっぽん通りに向かおう」

ウチらは迫りくるゾンビを撃って倒し、すっぽん通りの前までこれたんやけど……

「なんやこのデカルチャーは……」

「おいおい、なんだあこいつは……」

「クソ、変なまできやがって……！」

駿ちゃんがDVD店の武器でもう一丁見つけたマケドニアシューターで二丁撃ちで攻撃したんやけど、全然効いてへん、

「な！効かない！？」

「どうなってんだ！？」

「効かんとなると……」

ウチはお揉むろに狙いを定め、弾丸を発射した。
そして撃ちだされた弾丸はまっすぐデカイ図体をした巨人の顔に当たり、低い呻き声と共に倒れ伏した。

「……………」

「なんや結構簡単やな」

ウチはそれに続いて他にもいるゾンビを倒していき、やがてはすっぽん通りのゾンビは全て倒してん、

「よっしゃ、オールクリアや……ん？駿ちゃん？」

「……………ハッ！な、何かな？」

駿ちゃんは我に返ったようにウチの言葉に気づいて返事をする。

「まあ、何かなやないで？駿ちゃん……ウチだけに任せんといて欲しいわ」

「う、ごめん……」

「ホントにこいつぁ……なにもんなんだ？」

なんや長濱さんはえらく首をかしげてウチを見つめる。
ウチい何かしてはったか？

「と、とりあえず行こう……もう脅威は無い様だし……」

「俺にはこの嬢ちゃんが脅威に見えるぜ……」

二人はトボトボとゾンビの屍を越えてすっぽん通りの奥へと進む、
なんや？悪い事したんか！？

そうしている間にもウチらは巨大な壁に塞がれ、ガレキが誓っている前まで来た。

ウチらはとりあえず側に自衛隊の支給品らしき物を見つけて補充した。

そんなとき長濱さんが手にボールを持ってしゃがみこむ、

「ここだ」

「準備が良いんだな？」

「せやなあ」

「こんな所、さっさとおさらばしたいんでな」

長濱さんがそう言いながら蓋を開けて中に入る。
ウチらもそれに続いて入る、

「暗いわぁ……」

「大丈夫？まなちゃん」

「へ、平気や、どつって事無いで」

ウチらは下まで降りるとそこは闇の世界やった……

視点・「秋山駿」

「この先がバリケードの向こう側になっている。ここにも、連中がウジャウジャいるからな。気を抜くんじゃねえぞ」

「はいはい。わかったよ」

「ほーい」

「それにしても暗いな……」

まあマンホールの地下なんだから当たり前か……

「心配すんな。あまり良い品では無いがコイツを使え」

長濱が渡してきたのはバリや傷、ヒビが入ったLEDライトだった。なんだか少し不安だが明りを付けて見る。

「お、結構明るくなったな」

「そやねえ」

「今度は使つかもしれないからな。そいつはお前にやるよ……さあ、先へ進もう」

そうして俺達が進もうとすると急に後ろが明るくなった。

「な、なんだ？」

「お前も持ってたのか……」

「せや、ゲイちゃんがくれた軍用ライトや、確かC4テクノロジー
スーパージェットっていったなあ……」

なんでそんな高級品持ってるの？

……まあ良いか、まなちゃんも持っているなら有効的に使わせて貰おう。

「それじゃあ行こう」

「了解や、ウチ地下のマンホールの中入るんは初めてや！」

冒険や探検も良いけど今は実戦だからね？

俺はまなちゃんにそう言っただけで歩き出す、少し歩いて行くと暗い道にゾンビがいてまなちゃんが遠距離からの狙撃で対処したり直ぐ近くにいた奴とかは俺と長濱が担当した。

そして俺達が進んでいくと……

「……まあ変なのがいるぞ……」

「なんやあの女の人……怯えてる？」

「どっちにしろゾンビだ。早く片付けちまおう」

そう言つて長濱が銃を向ける瞬間、

「きゃあああああああああ……！！！！！！」

「！！」

「うひゃあ！？叫んだで！！」

「なんだアイツは！？」

俺達がうろたえていると何処からともなく……いや、そこらじゅうからゾンビが出てきたり這いあがったり落ちてきたりとその叫んだゾンビの近くに出てきた。

「駿ちゃん！！」

「長濱！まなちゃんが遠くにいる敵を倒す！取りこぼした奴は俺達の担当だ！」

「任せろ！」

俺達は直ぐに銃を構え、まなちゃんは狙撃してゾンビを倒し俺と長濱は近づいてきた敵を倒して行く。

そして何とか倒し終え一息ついた所にまたあの女のゾンビが叫ぼう

とする。

「！、不味い！」

「駿ちゃん！これを！」

「！？、そいは！」

俺はまなちゃんが持っているスチール缶の様な物を握ってる事に気づく、それって……

「負けられへん！行くで！」

そう言ってまなちゃんは両手で持つ多数の手榴弾を思いっきりあの叫んだゾンビへと投げる。
俺は咄嗟に狙いを定め……

「そこだ！」

パアアンツ！

狭い地下内で銃声が響き、その放たれた弾丸はまなちゃんの投げた手榴弾に当たって……

ドオオオオオオンツ！……！！！！

「きゃああああ………」

女の悲鳴を上げたゾンビを吹っ飛ばされ、二度と立ち上がる事はなかった。

「ナイスや駿ちゃん」

「へっ、これぐらい朝飯前だよ」

「そうやなあて、ウチらまだ朝ご飯食べてへん……」

まなちゃんのお腹が鳴る。まなちゃんは少し顔を赤くしてモジモジし、俺達はその腹の虫を聞いて少し笑った。そのさい笑われたまなちゃんにド突かれたが……

そんなこんなでマンホールの出口に着いて俺達はハシゴを上り上のマンホールを開けた。

秋山がマンホールを開けて外に出る。その時、通行人の人がマンホ

ールから出てくる秋山を見て不思議そうに見た後に通り過ぎる。真夏も長濱を出て来る。

「秋山」

「ん？」

「借りが出来たな」

「いいさ」

「お陰助かりました」

「別にいいさ……それと、お前らはこれからどうするんだ？」

「医者に用がある」

「なんだと？まさかどこかやられたのか？」

「ちゃうって、駿ちゃんの子が熱出したんや」

「そう言う事」

真夏と秋山が説明すると、長濱は険しそうな顔をする。

「またあの中に入るのか？」

「付いて来てくれるのか？」

「まさか……俺は桐生一馬じゃあ無い」

「ふっ……そうだったな」

「……………」

真夏はまた少し不機嫌な顔になった。二人は気づかないが、それから二人は長濱にモグリの武器屋がある事を聞いて、柄本医院に向かった。

その道を歩いていると太った男が話しかけてくる。

「や、やあ、秋山さんまなちゃん……久しぶりですね」

「おお、おお。えっと……誰だっけ？」

「誰やったっけ？」

「か、上山ですよ。い、一年前に、会ってるです」

秋山はポンと手を叩き、思い出した様な素振りを見せる。

「あ、あー。思い出したよ、武器を改造してくれた……」

「おー見た事あるっと思うたら上山はんでしたわ」

「あ、そ、それ兄の方、です。お、俺は防具、担当でした」

「あ……えー、そう。ごめんごめん」

「か、堪忍や……」

とりあえず謝って気を取り直し長濱が言っていた事を聞く、

「そついえば……長濱って奴が言っていた銃を改造してくれる上山ってのはもしかしてそのお兄さんの事？」

「そ、そうです」

「そっか……なんだ、情報料支払わなくてよかったよ」

「せやなあ」

「え？な、なんです？」

上山は秋山の言った事を疑問視した。

秋山は首を振って逸らす、

「あ、いや、こっちの話。そっかまだ改造屋やってたんだね」

「は、はい。い、いや、むしろこんな時こそお、俺達の出番です」

上山は何かを知っているらしい事を言う。

「……フツ。もうこの町に起きてる事分かってるようだね」

「え、ええ、まあ、ば、化物が出てま、町は無秩序になってるくらいは……な、なので、武器の改良はお、俺たちにお任せ下さい！い、今はトラックで、仕事してるです。こ、こ、こんな状況なので移動出来た方が、べ、便利」

「こりゃ……凄いね。ハハ」

「ホンマやなあ……」

「あ、案内します。あ、兄もそこにいるんで」

そう言つて秋山と真夏は上山に付いて行き、さっきの通りまで戻る。

「こ、ここです。ど、どうぞ」

そう言つて後ろのトラックのドアを開けて中に入る三人、するとそこには……

「いっぱい銃が並んどるで……」

「へえ、結構な設備だね……戦争でもするのかい？」

「お、俺は戦争に見たいなもんになると思ってます。あ、秋山さんなら、薄々分かつてる、はず」

「……………」

「……………」

真夏は顔を伏せるその顔には少し悲しさが満ちていた。

「い、今は、このトラックも、お、大袈裟に見える、と思うけど、きつと役に立つ、です……あ、秋山さんは、む、昔からの幼馴染。う、ウチが色々お手伝いを、しますよ」

「……………手伝い？」

「は、はい。今まで通り、ぶ、武器のチェーニングや装備品の販売、させてもらいます。そ、それだけじゃ無く、買い取りもさせてもらいます。い、いらなくなった物、何でも買い取りますよ」

「質屋見たいなもんかい？それは、便利だな」

「まんまガンショップやな」

「え、ええ。質屋じゃ買い取らない様な物でも改造に使えそうであればうっ、ウチが、高額で引き取りますよ」

「ほんなら質屋で売った方がええのと、こっちで売った方がいいもんがあるっちゅう事か？」

「そ、そうですね。そ、そんな感じです」

「なるほどねえ……」

秋山がフムフムとしていると服の裾を引っ張られる。

「ん？なんだいまなちゃん」

「駿ちゃんそろそろクスリ……」

「……………あ！そうだった！」

秋山は今思い出し、慌てて外に出る。

「もう…………ホントにしっかりしてや」

そう言つて真夏は上山に別れを告げてトラックを出ようすると……

「ま、まなちゃん」

「ん？なんや」

「む、昔の約束、お、覚えてる？」

「約束う？」

真夏は首を捻つて思ひだそうとする。だが中々出てこない。

「ふ、服の約束だよ。お、俺が用意した服を着てつて約束」

「……………おお！そないな約束した覚えがあつたなあ！」

「そ、それで、い、いいかな？」

「うん、ええよ！良い洋服を着れるんなら何でも着るでえ」

「わ、わかつたよ、そ、それじゃあ今の問題が終わつたら何時でもき、来てね」

「分かつたで」

そう言つてトラックから出る真夏は秋山を追い、柄本医院へと向かう。

「……………け、計画通り」

上山は嚴重に箱詰めされた段ボールの蓋を開けて中身を見る。

「ら、ラブシャインなまなちゃんまであ、後少しだ……」

少し気持ちの悪い笑みを浮かべる上山、真夏自身に手を出さない自制心だけは褒めるべきか？

真夏が外に出てくるとそこには……

「なんやまた長谷川さんかいな……」

「なんだその言い草は……まあいい付いて来い」

「ほーい」

そう言つて真夏は連れていかれ、長谷川から「神室の盾」と呼ばれる自警ボランティアをしている赤石と言う男を紹介され、隔離エリアの入り口、「フリー・ルート」の情報を秋山に教える様言われる。真夏は二つ返事で了承し、秋山の元へと向かう、だが……

「へ？」

「ダカラモウその人はクスリ持ッティツチャッタヨ？」

「ええーとつまり……」

「ソレト伝言ネ」

「伝言？」

「ウン、…「外で待ってなさい。もしくは家に帰る様に」ッテ…マナちゃん？」

「……………やん」

「ン？」

「駿……………ちゃんの」

「??？」

「駿ちゃんのアホ……………!!!!!!」

真夏は秋山に置いてかれた。それに腹を立てて叫ぶ真夏だった。そして怒りながら外に出て怒った様な歩き方で徒歩を進める。

「まったく駿ちゃんも白状や…ウチを置いて行くなんて……………!!」

とにかく秋山に置いてかれた事を怒っている真夏はどうしようか悩む、

「どないしよう…ウチだけ行っても少し危ないやし……………」

ホンマどないしようかなあと思っていると……

「まなちゃん!」

「ふえ？」

前から迷彩柄のズボンをはいた外国人が現れる。

「ゲイちゃん？どうしてこないな所に？」

「まなチャンが戦ッテイルと聞イテキタンダ。秋山さんモサツキマデ訓練ヲサセテタカラナ」

「駿ちゃんも！？」

「ソウダ、ダカラお前モ鍛エテヤル。付イテ来イ！」

「サーイエツサーや！」

そう言ッて真夏は元軍人ことゲイリー・バスターズに本格的な指導を施された。

どこまでかけ離れた幼稚園児……いや、もうすぐ小学生だから、どこまで行く気なんだこの小学生は……

「モット大キイ声を出セ！」

「サーイエツサー……！」

「良シ！行クゾ！」

そうして真夏はワンマンアーミー真夏へと成った……………

オマケ・「その頃一夏は……」

「ここだ、私が通っている道場は」

「……神社？」

それもあると言って歩き始める千冬に一夏は追う、そして神社の横にある家のドアを叩く、

「織斑千冬です。弟を連れて来ました」

その声に応える様に中から声が聞こえてドアが開く、

「よく来たな千冬君」

「はい、それで弟の件なんですが……」

「構わないぞ門下生が増えるのは良い事だからな」

「助かります」

一夏は訳が分からず首をかしげるとそこにその男性の奥から一夏と
同じ年くらいの女の子が立っていた。

その女の子は一夏を見た後にプイツと顔を逸らして廊下の奥へと消
えた。

『？、誰だろうあのポニーテールの女の子は……………』

「……………？、どうした一夏」

「えっと……………さっきの女の子は……………」

「ん？ああ、娘の事が」

「娘？」

「そうだ。君はこの門下生になるから後で自己紹介をして貰おう」

「え、えっと？門下生？」

「聞いていなかったのか？」

「はい、付いて来いと言われただけです……………」

「ふむ、まあいい」

え？いいの？と言う一夏の言葉はスルーされてとりあえず家にお邪魔し、道場の方へと向かう一夏であった。この出会いがきっかけで

あのツンデレ幼馴染が生まれたとさ……、

『千冬姉ちゃん、一言くらい言って欲しかったよ……』

そう思う一夏につゆ知らず、千冬は一夏を連れて男の後に付いて行き道場へ向かうのであった。

一夏はまだ、真夏が神室町で戦っている事を知らない……

十話や！「やつと外に出れたでえ……」（後書き）

真夏「駿ちゃんのアホー！ウチを置いて行くなんて！ゾンビに噛まれてゾンビになってまえ！」

秋山「ちょ！？それ洒落にならない！」

束「束さんより篝ちゃんが出るなんて……」

篝「普通では？」

作者「少し早く出し過ぎたかな？」

十一話や！」「新しい武器ってなんか興奮せえへんか？」「（前書き）

真夏「なんでこないに遅かったんや？」

作者「新潟で用事がありました……」

真夏「そうなんかあ……結構高速道路込んでたやろ？」

作者「……吐いた」

真夏「……ご愁傷様や」

十一話や！」「新しい武器ってなんか興奮せえへんか？」

秋山に置いてかれ、怒っていた真夏は今ゲイリーズ・ブートキャンプの訓練を終えて外に出てワークス上山にいた。

「ふう…やっと終わったで、ゲイちゃんホンマに激しすぎや…ウチの体が壊れてまう所やった…」

「は、はは激しく…こ、ここ壊れる…」

上山は息を荒くして真夏の声聞いていた。真夏は少し心配そうに見る。

「秋山ははどうしたんや？なんや息が荒いで？」

「な、なななな何でも、な、なないよ」

「そか、ならええんやど…」

「そ、そそっそれより、こ、これからどうするの？」

「うゝん…どうないしよう…」

真夏は置いてかれてしまった為、どうするべきか迷っていた。

「訓練もしたし武器は…」

真夏は自分が持ってきたライフルと拳銃を見る。

「ライフルは整備不良で、拳銃は密造やから心配やなあ……」

うーんと唸なって考える真夏に上山は……

「ん、なら今こ、ここにある武器をも、もも持ってていいよ?」

「え? ホンマに?」

「う、うん、これなんてど、どどう?」

上山は真夏の前に大きな物を差し出す、

「なんなんやこれ? でつかいコンセント?」

「ち、違うよ、こ、こここれはお、俺が開発した電気ショックガンだよ」

「電気?」

「そ、そう…名付けて、「ラブシャイン・スパーク」!!」

ドドーンツと効果音の様な物が聞こえた様な気がした真夏と自分で作った自身作を真夏に見せる上山、

「ラ、ラブシャインスパーク?」

「そ、そう文字通り、でで、電気ショックで相手をた、た倒す武器だよ」

上山は真夏に説明をする。

「こ、これは強力な電撃で攻撃する、ぶぶ、武器で。」

スタンガンと違って、ち、小さな電極を、と飛ばして離れた相手にもで、でで電流を流す事が出来るんだ。でで電流は強力で、ぞ、ゾンビを感電死させる事も可能だよ」

「えっらく恐ろしい武器やな…これ」

真夏は上山にラブシャ…長いのでスパークショットを受け取り、構える。

「大きさはライフルとおんなじで、重さはライフルよりも軽めってとこかいな……」

真夏はとりあえずスパークショットを機動させて充電させる。

ウィーンと音がした後、緑のランプが点灯している。

「じ、充電は、もう完了してるから、い、何時でも撃てるよ」

「さよか」

そう言つて真夏は電源を切り、肩に乗つける。

「あ、そや後ブローニングとかあったら貰えへん？」

「う、うん、ははいこれ」

「サンキューや」

真夏は上山からブローニング・ハイパワーを貰って腰に刺し、準備

は万端だ。

「お世話になったで、上山はん」

「う、ううん、お、俺にはこれくらいしか出来ないから、きき気を付けてね？」

「うん、ほな行ってくるで〜」

そう言つて真夏はスパークショット、「ラブシャイン・スパーク！
！」を肩に掛けてトラックから出た。

視点・「郷田真夏」

ウチは上山はんからラブシャ、長いからスパークを貰つてトラックから出る。

「さて、駿ちゃん床に行かなあ」

まったく、うら若き乙女を置いていくなんてどういう神経しとんねん、駿ちゃんは！

「ウチかて戦えるんや、駿ちゃんも見たはずやのに……ん？」

突然ウチの携帯が鳴っていて、ウチはそれに出る。

「もこもこっこりっ？皆のアイドル真夏やで？」

（切るぞ……）

「堪忍や〜」

ウチの携帯に掛けて来たんわタツちゃんやった。

「どしたんや？タツちゃん、なんかあつたんか？」

（ああ、実は……）

ウチはタツちゃんの要件を聞いた。

タツちゃんが言うには今隔離エリアの中にいて身動きの取れない後輩と沙紀ちゃんがおるんや、

そんでタツちゃんが一人じゃ無理そうやから誰かに助けて貰おう思うたんやって、

（じゃねえ沙紀が俺一人じゃ無理だと言って電話させたんだ）

「そやねータツちゃんなら一人でやろう思っってしまうもんない」

（俺一人でどうにか出来る）

「そやけど一人より二人の方が何かと良いで？」

（ガキのお前に頼む時点で大人としてどうかと思うんだがな……）

まあガキっちゅうのは認めはるけど……

「安心しい…パワーアップしたウチの力見たる。んで何処にいるんや？」

（あ、ああ…俺が欠員で働いていたコンビニだ）

「コンビニ？さっきそこから逃げはったんやないの？」

（逃げた所も危なくなってきたからな…それでコンビニまで戻ったんだ）

「なるほどなあ……」

ウチはとにかくタっちゃん達を助ける為に今一度あの地獄へ戻る事にした。

「よっしゃー！ウチが迎えにいくさかい、さっちゃん達は無事なんかな？」

（ああ今となりにいる）

「さよか、とりあえず行くからまってな」

そう言って電話を切る、さてと……

カチ、キューーン……

スイッチを入れてスパークショットの電源を入れる。
どんだん充電され、電気が溜まって行く、

「さて…ダチを助けに行きましょか」

そう言ってウチは肩にスパークショットを担いでマンホールの所まで歩く、

その足取りは力強かった。

ここは龍也達が逃げていた場所だった所……

「おらあ！」

バキッ！

「あ”……」

龍也が鉄パイプでゾンビを殴って倒す、
沙紀達は襲ってくるゾンビ達から逃がす為に先に逃がしてここにはいない。

「邪魔じゃボケエ！！」

龍也は殴っては蹴って倒して行くが切りが無い。
そうこうしている内に龍也の持っていた鉄パイプが……

ポキッ！

「はああ！？」

龍也は折れた鉄パイプを見つめて叫ぶ、
ゾンビ達がどんどん群がり、どんどん迫ってくる。

「畜生！ここまでか……！！」

龍也が真夏が来る事を聞いてはいるがこの数に勝てるかどうかと言

えば……無理だ。

「噛まれてでもこいつらを減らさねえと……！」

龍也は覚悟を決めて突っ込もうとしたその時！

「伏せるんや！！」

「！！」

龍也はその声を聞いて伏せる。その時、龍也の頭上にレールガンのような閃光が走り、周りのゾンビは電撃にやられ燃えた後に黒こげになって倒れた。

「なんじゃこりや……」

「危なかったなあ、タツちゃん」

「ああ？」

ゾンビの屍なんのその、それを跨いで龍也の側に近付く影、

「……真夏か」

「お呼ばれに従い参上、てな♪」

ハアア…と地面に顔を伏せる龍也、それを見てケラケラ笑う真夏、とりあえず龍也は真夏に礼を言った。

「とりあえず助かった、ありがとな」

「気にせんでええで？ウチらの仲やん！」

「どういう仲かは気になるがな……」

フツと笑い、胡坐をかく龍也に真夏が近寄って顔を支える。

「ホントに大事無いん？怪我や噛まれたりしてへん？」

とたんに心配そうに顔を覗きこむ真夏、その顔と顔の近さにテンパる龍也、

「だ、大丈夫だ！心配ねえ！」

「さ、さよか？それならええんやけど……」

そう言って少し離れる真夏、そして二人が落ち着き真夏は状況を聞く、

「そんで…なんでタツちゃんだけなんや？サツちゃんや定員さんは？」

「先に逃がした、無事だといいいんだが……」

「そやな、とりあえずタツちゃんは一旦戻らんと……」

そう言おうとした時、

「ソノ話俺二任セロ！」

突然声がして二人は周りをキョロキョロしていると、

「此処ダ！」

その声を聞いて二人は上を見ると……

「なんだアレ？」

「エアボーンとは……ヤルやないかゲイちゃん」

ゲイちゃんことゲイリーがヘリからのエアボーンをしてこちらに下りてくる。

「フンッ！」

ゲイリーは着地の瞬間にパラシュートを切り離してゴロゴロ転がって目の前に止まる。

「コレヨリ…バーチャスミッションヲ…」

「もうええって」

ゴスッ！

真夏は何処からともなく取りだしたトンカチでゲイリーの頭を叩いた。

叩かれた場所からは血がドボドボと出ていたが龍也は黙っている事にした。

「マナチャン、行き成りノ突ツ込ミハ酷イデス」

「今は緊急時や、ふざけるとする場合やないで？」

「ソウデスネ、トリアエズ……オイ、ソコノウ○コ垂レ」

「あああ！？行き成り人をクソ呼ばわりたあどういいう了見だ！？」

龍也は行き成りそう呼ばれた事に腹を立てた。
その権幕を無視して話す、

「お、落ち着いてタツちゃん、この人の話し方はこれが普通なんや
！」

「だからって許せるか！」

「ヒッ……」

「あ、いや、すまん……」

「マツタク、女ノ子を怯エサセルナンテ最低デスネ」

「うがー！コイツ殺す！」

殴りかかるうとする龍也を止めようとする真夏とそれ見て呆れるゲイリー、

とりあえずは収まり、ゲイリーは龍也をゲイリース・ブートキャン
プへ袋詰め運び、

それを苦笑いしながら一緒に行く真夏がいたとき、

「フガフガー！（離しやがれー！）」

「暴レルナ、コノクソツタレ」

「あははは……」

ある意味人さらいである……

十一話や！「新しい武器ってなんか興奮せえへんか？」（後書き）

龍也「あの野郎！人をさらいやがって！」

真夏「まあまあタツちゃん抑えて」

ゲイリー「怒リッポイ人ダナ」

龍也「テメエのせいだろがーーーーー！」

真夏「ホンマの気にしたら負けやで？タツちゃん……」

十二話や！」「タッちゃんはビックマゲナム！」（前書き）

でけた…感想お願いします。

十二話や！」「タツちゃんはビックマゲナム！」

ここはゲイリーズ・ブートキャンプの射撃場……

そこでは龍也が真夏とゲイリーの猛特訓を受けていた。

「タツちゃんちゃうって！それじゃあ弾丸が下に行つてまう！」

「お、おう！」

「ナンドソノへっぴり腰ハ！モット肩ヲ上ゲロ！」

「テメーは黙つてろ！俺は真夏にやつてもらつてんだよ！」

と口うるさくも訓練に励む龍也は良い人である。

そして真夏とゲイリーの特訓が終刊に差し掛かった時、龍也の携帯が鳴る。

「あん？……！、沙紀からだ！」

「なんやと？」

龍也は急いで電話に出て話す、

「沙紀か！何処にいる！？無事か！？」

「ちょ、タツちゃん落ち着いて」

「戦場デ冷静サヲ失ツタラ死ヌゾ？」

「頼むから黙ってる！」

そうして龍也は電話に集中する。

『龍也君……』

「沙紀！無事なのか！？」

『うん、平気…後輩君も無事よ…でも……』

「でも…なんだ？」

『そ、それが「ガシャンッ！」キヤアアッ！？』

「！？、沙紀！」

『！、……いやあああ！！……』

「沙紀！おい！……クソ！切れやがった！！」

達也は切れた電話を握りしめ放り投げかけたが、真夏がそつと龍也の手を両手で握って制した。

「タツちゃん落ち着いて…」

「……………」

龍也が携帯を放り投げかけた腕をピタリと止め、下ろす、それを見て真夏は安心してゲイリーに言う。

「そろそろ潮時やな……」

「ソウダナ……新兵」

「……俺の事か？」

「ソウニ決マツテル、コイツヲヤル」

ゲイリーは腰からバカでかいリボルバーを龍也に渡す、

「これは……」

「我が祖国アメリカガ誇ルマグナムリボルバー、トールス・レイジングブルダ」

「ホンマか！？初めて見たわ…しかもそのタイプって…」

「500S&Wマグナム……現時点デ最強ノマグナム弾ヲ撃チ出シ、防弾スラ貫通スルマグナムダ」

「これが……」

龍也はゲイリーから渡されてそれを掴む、ズッシリくる重量感、シルバーに輝くガンダニウム…じゃなくてチタニウム合金の輝きが龍也の男心を擽る。龍也はそのグリップを握り感想を吐く、

「お、おめえ……」

「そらそうや、重いに決まっとるわ……タツちゃん」

「なんだ？」

「それは人を撃つ銃やない」

「は？」

「奴らを倒す銃や、そして……元は神室町の住人やった人達を撃つ銃や…」

「！！」

龍也はハツと思いだした、自分が沙紀達を守る為殴ったり蹴ったりした人達は元は何の罪の無い人だからだ。

「……………」

「せやからタツちゃんにはその認識をちゃんと……………」

「おい……………」

真夏が喋ろうとした矢先、顔を伏せていた龍也がお揉むる顔を上げて真夏を見る。

その顔は何処にも暗い感情がなかった。

「タツちゃん？」

「沙紀の為だ……覚悟は出来てる」

「タツちゃん……………」

龍也は苦しそうでも真夏に見せる顔は苦笑いに似ていたが笑っていた。

「……………ハハ…やっぱりタツちゃんは強いんやなあ…ウチなんて泣いてはったのに」

「バーカ、オメーはまだガキだろうが」

「そやったわ」

二人は何時も通りの調子を取り戻し、ゲイリーに向き直る。

「そろそろ行く、世話になった」

「ソウカ…気ヲ付ケロヨ？」

「ウチがおるから平気やで？」

「ソウダナ、新兵ノ子守…頼ンダゾマナチャン」

子守られるつもりはねえー！と叫んだ龍也、それを見て笑うゲイリーと真夏、

龍也はゲイリーから貰った腰に着ける皮のホルスターを貰い、トールスを収め。真夏もブローニング・ハイパワーの皮のショルダーホルスターを貰い銃をセットして肩にスパークショットを肩に担ぐ、

「ほなーーーーー」

「ああ……………」

「行ってくる！」

「行ってくるで！」

「オウ、死ヌナヨ二人トモ」

そう言つてゲイリーは二人を見送り、真夏達は地獄へと下つた。

「…………サテ、ソロソロ秋山サンモ相棒ヲ見ツケテイル頃ダナ」

そう言つてゲイリーは別の扉から出て自らも地獄へと下つた……

ここは神社？道場？である篠ノ之家と言つ家がある所、
そこに織斑姉弟がいた。千冬は篠ノ之家当主柳韻と話をしており、
夏はその娘の箒と道場にいた。

「……………」

「……………あの」

「……………なんだ？」

「あ…えっと…お、織斑一夏です」

「……………しってる」

「そ、そうか……………」

「……………」

「……………（か、会話が続かない！）」

一夏は極道少女真夏？との関係で普通？の女の子である筈とどう話せばいいか分からずにいた、
普通の男の子より大人の世界や事情を知って感覚がおかしくなったのがいけなかったらしい。

「え、えっと…剣道をやってるのか？」

「……………見ればわかるだろ」

「そ、そうだな……………」

「……………」

「……………（駄目だ…全然会話が続かない！どうすれば！？）」

「おい」

「な、なんだ？」

「お前も剣道をしに来たのだろう？」

「あ、ああ……」

「ならば竹刀を持って素振りでもしたらどうだ？父さんからお前に剣道のやり方を教えてやれと言われたからな」

「そ、そうかわかった、よろしく頼む」

「……行くぞ」

「へ？」

一夏はポンつと投げ渡された竹刀を受け取った瞬間、箒が打ってきた。

「ちょ！まつ……！？」

パシィンツと打ってきた箒の一撃を何とか受け止めて後ろに跳び引く、

「やるではないか」

「行き成りなにすんだよ！？」

「教えるのは面相だ、体で覚えさせる！」

そう言ってまた打ってくる箒に何とか避けては受け流しながら耐える一夏、

それを何とか止めようとする一夏は箒に打たれながらも話かける。

「ちょ、ちよつと待て！ホント待て！行き成りは不味い！」

「ええい！ちょこまかと逃げるな！」

「無茶言っな！」

そうして一夏の初の剣道は過激な物になった。

一夏は剣道がこんな怖い物だと知って恐怖した。

「助けてくれまなちゃん！」

「男が助けを請うな！」

「理不尽だ！」

一夏が真夏の戦いを知るのはあともう少しである……………

オマケ・「真夏、ホストクラブに行く」

「さてと……たこ焼き屋のお仕事も終わった事やし、かず君とユウちやんの店にでもいこか」

神室町にあるホストクラブ、スターダストに少女真夏がいた。

そして真夏は店前にいる客寄せにヒラヒラと手を振り、その客寄せは手慣れた手つきでお辞儀をして店の中へと入れた。

「ご指名は？」

「何時もの人でお願いしますわ」

「畏まりました」

そう言つて客寄せの定員は奥の部屋へと入り、真夏は通らせた席へと座る。

少し立つてから白のスーツと紫の服を着た男二人が来る、

「まなちゃんまた来てくれたんですね」

「というか普通にいいのか？これ……」

「ええやんホストは客はえらばへんもんやんか」

「だからって五歳児がここに……」

「ユウヤ、お客様の前です」

「あ、す、すみません」

「ええって、ほな楽しみましょか！」

「はい、それでは注文は何時ものオレンジジュースとポッキーで？」

「おkや」

そう言つてスターダストの店長一樹が定員を呼び、注文をする。

「頼んだよ」

「分かりました」

そう言つて奥に消えてつた定員を見送り、ユウヤと一樹は席に座る。

「今日も疲れたでえ…店にくるお客さんが何時もぎょうさんなんや、なんでやる？」

「それはまなちゃん目当てでくるからじゃないかな？」

「そうなん？」

「それはそうだろ、看板娘がいた方が売れ行きは良いに決まってるし」

「ふん、ウチがねえ…」

「まなちゃんもたこ焼きを作ったりしてるんだよね？どお？調子は」
「まだまだやな…ひっくり返すタイミングがまだ甘いつておとんが言うとするし」

「そうかな？前にまなちゃんが持ってきてくれたたこ焼きは美味しかったけど？」

「それでもまだまだや、もっと腕上げてかず君やユウちゃんにむっちゃ美味しいたこ焼き食べさせて上げるわ」

「うん、楽しみにしてるよ」

「今度はチーズ入りがいいな…」

「わかったで、楽しみにしとってや！」

真夏はホステスクラブで一樹とユウヤと一緒に話したりポツキーゲームしたりと夜更かしをした。

その事で父、龍司や東城会の面々は怒るのを通り過ぎて呆れていたと言う。

まあ、あまり行かない様にと注意されるだけで終わった。階段だが真夏がホストクラブに入っているのを警察に目撃されてはいるがその度に谷村や伊達が関わっているとかいないとか……真夏の夜は続く…

「『カンパ〜イ！』」

十二話や！「タツちゃんはビックマゲナム！」（後書き）

真夏「はあゝ楽しかったわ、またいこうかなあ」

一夏「ホスト…か、俺も……」

千冬「頼むからお前が行くなよ？争奪戦になる」

一夏「え？なんで？」

千冬「なんでもだ」

龍司「親として怒るべきか…大人に成ったとして褒めるべきか…」

作者「いや、普通は怒らなきゃ……」

十三話や！「狂犬と子犬ちゃんや！」（前書き）

真夏「長らくお待たせしましたー！見たってや♪」

一夏「やと出番が来たよ……」

真島「わしの時代が来たでー！！」

十三話や！「狂犬と子犬ちゃんや！」

ゲイちゃんと別れ、ウチらは今神室町地獄の一丁目へと足を踏み入れていた……

まあホントは劇場前通りなんやけどな。

「吹き飛ばやー！」

キュイーンとスパークショットから機械音が鳴り響き、その瞬間バチィッ！と音がした後、
ウチらの前にいたゾンビはカリカリ君へと変貌した。

「死ねやボケえ！」

ズガアアンッ！

タツちゃんがそう言って両手で持ったマグナムをぶっ放し、近くにいた敵の頭を数体吹き飛ばした。
その際、タツちゃんは後ろにすっ転ぶ、

「うお！？」

「タツちゃん今つこうとるんわマグナム弾や、普通のパラベラムや無いんやから反動考えなあ」

「わ、分かってる！だがこいつは強力過ぎだぞ！？」

そらそうや、近距離ならアンチマテリアル並みなんやから、戦車やて紙装甲やで？

タツちゃんは立ちあがっては反動で倒れ、その都度腰を痛めると言うなんともお間抜けな事になってたんや、コントやな……まあウチは倒れたタツちゃんに近付いてくるゾンビを倒して何度も難を逃れてんやけどなホンマ世話焼けるで……

「サツちゃんが逃げはった方向は分かるん？」

「いててて…ああ多分あのコンビニのはずだ」

ふむ……となるとすっぱん通りの横にあったあのポツポ店やな、ウチは変えのバッテリーを確認してラブスパ（注：ラブシャインスパークです）を再充電して歩く、

「タツちゃん行くでえはよサツちゃん達を助けな！」

「お、おう！」

そうしてウチらは劇場前を走る、待っててや…サツちゃん！

一方一夏は篠ノ之箒による修練？を終えて帰宅しようとしていた。

「あ、そうだ…まなちゃんにも紹介しないと」

そう言つて一夏は姉の千冬に真夏に箒を紹介したいと言つて別れ、神室町に向かう。

「篠ノ之とまなちゃんを合わせて大丈夫かな？まったく正反対…いや案外似てる？」

箒と真夏はスジを通すと言う分野では一致している部分があり、仁義もある。

割と息が合いそうだと一夏は考える。

「早くまなちゃんに言つてあげよう！」

一夏は早足で神室町に向かう、そこが今ラークンシティになっている事を知らず……

そして一夏は電車に乗り、少しあるいて神室町に到着したが……

「なんだあれ？警察に自衛隊…あ、消防隊員までいる。いったい何が起きたんだ？」

一夏は神室町が慌ただしくなっている事に気づき、警察の一人に聞いて見た。

「すみません」

「ん？何だい？僕」

「何かあつたんですか？」

「ああ、それが……」

言いかけた警官が口をつぐみ苦虫を噛みしめた様な顔になった、
一夏はそれを不思議そうに見ていると警官が喋りだす、

「ゴメン、俺でも分からないんだ。それと今神室町は慌ただしくな
っているから早く帰るんだ。いいね？」

「え？あ、はい……」

「良い子だ」

そう言つて一夏の頭を撫でてもう一人の警共にその場を後にする、
一夏はこれは何かあると思ひ急いで公衆電話へと向かい、真夏に電
話する。

「……………早く出てくれ……………」

少し焦らしながら待っていると真夏と繋がり一夏は話し出す、

「真夏か？平気か？」

『いつちゃんか？悪いんやけど今とりこみ中で……………あー！も
う邪魔せんといて！』

「ま、まなちゃ「ドゴオンッ！」な、なんだあ！？」

電話越しから爆音が響き、一夏は驚く、
真夏は焦る様に一夏に話しかける。

『いっちゃん！いいか！？神室町から離れるんや！ほとぼりが冷めるまでぜったいやで！』

「まなちゃん！？」

『今——…神室町は——…危険——…せやから！』

「ま、まなちゃんどうするんだよ！？」

『ウチらはサツちゃんを——助けんと！』

電波が悪いのか、電話はじょじょに繋がりにくくて成って行き……

「まなちゃん！！」

『！——…真夏！早——くし——と！』！？……！——
『——！！』

「まなちゃん！！まなちゃん！！」

一夏は必至に呼ぶが雑音だけしか聞こえずにいたその時、出た言葉で電話が切れた。

『まったく戦場は地獄やで！フハハハハハ！』

ブツツ…ツーツー……

「は？」

一夏は呆気にとられその場に固まる、数秒後再起動してどうするか考える。

『ま、まなちゃんは今危険な事に巻き込まれてる！？』

真が自分から危険に飛び込んだともしらず心配する一夏はある意味、いや普通の子より良い子である。

『俺一人じゃどうしようも……そうだ！真島さんなら！』

一夏は急いで真島の事務所がある神室町ヒルズへと急ぐ、今真島なら暇だと言ってそこでくつろいでいるはずだと、

「待ってるまなちゃん！直ぐに行くからな！」

一夏はひた走る。大事ないところを守る為に……

またまたその頃、真夏の父親こと郷田龍司は家で寝そべりながら元弟分から渡されたメモを見ていた。

「何しようとしてるんや……テツ……」

ポツリとそう吐いて龍司は寝返り打ち、真夏の帰りを待っていた。龍司はどこか寂しそうにして部屋を見渡す、

「……ハッ、ワシは何時から真夏依存症になったやんやたくつ……」

そう言って持っていたメモを胸ポケットに入れて胡坐をかく、

龍司は部屋に干された洗濯、綺麗に片付けられた部屋、

そして龍司と真夏が写っている写真と元はお皿の上にラッピングされていたおにぎりの皿を見る。

（今日は早く神室町へ行ってきます、せやからご飯はおにぎりや！
堪忍な〜）

「朝食作ってくれはるだけで感謝してるわい、バカたれ……」

そう言っただけで龍司は起き上がりおにぎりが乗っていたお皿を流しへ持って行き洗う、

その後に洗濯物をカゴに入れた後に畳み、真夏と龍司のタンスに分けていれる。

そして部屋に掃除機をかけてホコリを吸い込んだ後、片付けをして

座った。

「……………これを真夏が全部やっとなんやな……」

龍司は食事管理や部屋の整理とかの家の仕事をちゃんとこなす真夏に色々と感謝していた。

そして何よりも龍司が感謝しているのは何時も笑って家の出迎えをしてくれる事だった。

「……………なんや…わしって駄目亭主やな……」

その事に気づいてガツクリと肩を落とす龍司、今度の誕生日にはどこか連れて言つてやろうと誓う龍司だった。そしてふと気付く事があった。

「……………真夏の奴が遅いなあ……」

今真夏がある意味激戦区になっている事もつゆ知らず、龍司は秋山の所に行くと聞いていたので安心はしていたのだが……

「もしや真夏によからぬ事を……………」

親バカを炸裂させた龍司は、首を振りそんな事は無いだろうと考え寝転がる。

一息ついた所で目を瞑り真夏が帰ってくるのを待つ事にした。

「誕生日には何処連れて行こう…そや…真夏はキャンプに行きたい言つとな…今度キャンプセット勝手こなあ……………」

そう言つて龍司は眠り付く……………龍司の戦いは、近い！

場所は戻り此处、ミレニウムタワーにたどり着いた一夏は中に入る。
そこでは受付の極道がいた。

「……お？織斑のぼつちゃんじゃねえか！どうした？」

「あ、あの！真島さんはいますか！？」

「ん？親父なら事務所にいるぞ？」

「ありがとうございます！」

「あ！おい！タワーの中では走るなよ！」

分かりましたー！と言って早歩きになる一夏、
その姿はどこか酷く焦っている様でその極道を不安にさせる。

「ぼっちゃん…なんか焦ってたな…大丈夫か？」

そう言っているとその極道の前に帽子を被り、ところどころ穴や血が付いて不気味だった。

「は？だ…誰だデメエ！」

そう言って近づいて行くと野球帽の男は顔を上げる。その瞬間！

「な！？ぎゃああああああつ！！！」

行き成り噛みつかれ悲鳴を上げる極道の男、男は倒れ伏し、野球帽の男はコホオ…と声を出してあたりを見回す、

「……………甘美な…死を…」

そう言って野球帽の男は歩きだした。一夏は直ぐにエレベーターに乗っていてこの惨状は聞こえていなかった。そして噛まれた極道の男はビクツとした後、静かに起き上がりノロノロと歩きだす、

「あ”…あ”……………」

ゾンビになっちゃった元極道は他に噛まれた極道達を引き連れ階段へと向かい、あるきだしていった……そして一夏は真島の事務所に着いた。

「真島さん！」

「んおっ！？な、なんや一坊やないか…どしたんや？ワシは今ゾンビ映画見取ったんやけど……………」

「す、すいません……じ、実は……」

一夏は真夏との電話の会話を言った。
そしてそれを聞いた真島は少し目を細めた後にニヤアと笑う。

「なんやあ……真夏ちゃんおもしろい事してはるなあ……わしも混ぜて欲しいわあ……」

「ま、真島さん……」

一夏は真島がそう言う性格を理解してはいるがやはりどこか不謹慎だと少し思ってしまう。

「キツヒビヒツまあ一坊にはまだ早い感情や、もっとおもしろい事を経験したら理解出来るって」

「そう言うもんなんでしょうか……」

「そう言うもんや」

真島はケラケラと笑う、一夏はとりあえずどうすべき聞く、

「真島さん……俺はどうすれば？」

「そやなあ……」

真島はテレビに映ったゾンビ映画を見て笑う、

「キツヒビヒ……やっぱたまらんなあ」

「……はあ……」

一夏は肩を落とすすると一夏はテーブルにあった写真を見つける。

「……あれ？龍司さん？」

ここはある大部屋……そこに東城会の幹部がいた……

「一昨日、都内で撮られた物です」

「それが？」

「こっちのスーツの男……」

「関西近江連合直参、二階堂哲雄」

それ聞く10人の東城会幹部がソファ―に座り、聞いていた。

「近江か…確かに気になるが、緊急で召集をかけるほどか？」

「ですが、こっちのハチマキの男は皆さんもよくご存知のはず……」

「……なんだまなちゃんの親父さんじゃねえか」

「元極道だつて聞いたが有名な奴なのか？」

「この頃食つてねえなあ…まなちゃんのたこ焼き……」

「あーそう言えばそうだな、今度食いに行くか」

「ついでに酒でも持って行こう、まなちゃんには世話になってるしな」

「……話を戻します…六代目、いかがで？」

話を振られ、問いを待つ、その問いかけられた人物は……

東城会六代目会長…「堂島大吾」ドドーンッ……

「近江連合、郷龍会会長……」

「郷田龍司……」

大部屋にいる幹部達が大きくどよめく、

「な、なんだと？まなちゃんの親父さんって……」

「で、でもその男は死んだはずじゃ？」

「おい、安住、どないなっとんのや」

幹部達は安住どういう事が聞く、説明をしている安住は話を続ける。

「……五年前のウチと関西の抗争……ご存知の様にアレの糸を引いていたのがまなちゃんの父親の郷田です。その後、姿を消していたんですが……」

「キヒヒヒ……たこ焼き屋のおっちゃんになってたんやなあ……気づかんかったわあ」

いや気づけよ……と幹部の心がシンクロした。

「……何にしてもタイミングが良すぎる、二日後には神室町ヒルズの振興セレモニーです」

「東城会の幹部もまなちゃんはもちろんの事、全員が顔を揃えます」

「冴島は中国で商談中だろ？」

「そしたら…全員とちゃうなあ」

「……ほぼ全員です」

「思い出したわ、その二階堂……、今はイケイケやけど元はまなちゃんの父親の弟分やった男です。まなちゃんの父親が消えた途端、関西で頭角を現しおった男ですわ」

「問題は…何故今この二階堂が東京にいるのか……何か、臭いませんか？」

安住はそう言い幹部を見渡すが……

「いや、普通に元兄貴分に合いに來ただけじゃ？」

「いや、まなちゃん目当てかもしれないぞ？」

「待て待て、たこ焼き目当てかもしれへんぞ？あそこのたこ焼きはテレビでも出とったし」

幹部の全員が思う事を言つて場はその話で盛り上がる。

安住は頭を抱えながら唸る。

（毎度毎度、まなちゃんの話になるとなんでこう盛り上がるんだ……）

安住が頭を抱えていると六代目が話しを進める。

「真島さん」

「んあ？」

「ヒルズの振興セミナーには、東城会の威信がかかっています…
…」

「ん…せやなあ」

「他の組とも連携して警備の強化を……采配は、お任せします」

「…ハッ……………」

「……………」

「あ、あの真島さん…早くしないとー」

すると突然部屋に組の一人が入って来た。

「お、親父いいい！」

ドンと棚にぶつかり、棚に置いてあったDVDが床に落ちる。

「こらボケえ！何やっとなじゃ！？……ん？」

「え？」

真島と一夏はテレビとこちらにくるゾンビを交差に見る。

「……………」

「……………」

そしてまたこちらにくるゾンビとテレビのゾンビを交差に見る。

「……………」

「……………」

そして少し経つと真島が、

「ムホッ！やっぱりホンマもんは迫力がちやうなあ」

「そつですねえ」

二人は冷静に見ていると別の方向から飛びかかってきて真島を襲う、

「！？、真島さん！」

「ん？」

「があ”あ”あ”！！！」

ドンッ！！

唸り声を上げながら真島におい被さるうとするゾンビにショットガンの銃口を口に突っ込む、

「最高や」

「ま、真島さん…それ、どこから？」

真島はニヤリと笑いゾンビを見る。

「まさかゾンビとやりあえる日が……来るのはのう」

ニタアと笑った後、部屋に銃声が響きゾンビは頭を撃ち抜かれ倒れ伏した。

「へ……………」

一夏は状況が分からず、ただ混乱するだけだった。そしてまた組の者が現れ、二人に脱出を促す、

「親父！織斑のぼっちゃん！早く下へ脱出を！…う、うあああああ
ああっ！？」

「行くでえ」

ガシャンとショットガンに弾を送り込み肩に担いで立ち上がる真島、
今ここに狂犬が唸りを上げて起きあがった。

「がっかりさせんなやー！」

十三話や！「狂犬と子犬ちゃんや！」（後書き）

真夏「ところで作者はん、他にウチの相棒って出るんか？」

作者「出そうと思います、はい」

真夏「さよか、で？誰や？」

作者「秘密です」

真夏「そんな殺生なあ……」

十四話や！「パーティーーやなくてパーティの始まりや！」（前書き）

作者「二話連続辛い……」

真夏「よう頑張ったなあ…千夏ちゃんトコもあるのに」

真夏「まだ見てくれる人がいますからねえ…頑張らないと！」

真夏「その意気や」

十四話や！「パーティーーやなくてパーティの始まりや！」

「…………ハッ！？今いつちゃんが組み合わせてはいけない人と一緒におる！」

「何言つてんだ？沙紀達も助けた事だしさっさとずらかるぞ」

ここはポッポ店前の路上、そこには頭や体が半分にされたゾンビ……それに無数のカリカリ君が横たわっていた。

「……そやねえ、サツちゃん怪我無いか？」

「う、うん……まなちゃん凄いな……たった二人で数十人もいたのに物の数分で片付けちゃうなんて……」

「あははは、まあ慣れてはるからなあ。タツちゃんも凄かったやろ？」

「……うん、凄く……カッコよかった」

「んな！？」

龍也は沙紀にカッコいいと言われ、顔をもの凄く赤くした。

「な、なななな何言つてやがる！？」

「ほほう？タツちゃん」ニヤニヤ

「龍也君……」クスクス

龍也は地面に不可解を覚えて下を見たが、マンホールがあるだけで何もなかった。

「……………気のせいかな」

「タツちゃんかわええなあ」

「ほんとだね」

「もうからかうんじゃないよ!?」

そして龍也は真夏と沙紀の追跡を開始、ゲイリーはその五分後別のマンホールから出て来て沙紀は真夏の相棒になった……………

視点・「真島吾朗」

キツヒビヒビ、まさかゾンビが現実におるなんてなあ！

「コイツが一棒の言っていた事かもしれへんなあ」

まったく真夏ちゃんも人が悪いでえ、こおーんなおもしろい事を黙々とくなんて、

「おっしや！いっちょ真夏ちゃんのとこにでも行こか！」

わしはそう言って部屋のゾンビを片付けた後に行こうとしたんやが

……

「…………ん？、どしたんや一坊」

「あ…………あ……」

一坊はあーあー言いながら口をあぐり開けたまま固まっていたんや、どないしんやろ？

「一坊？どないしたんや、そんな鳩が豆鉄砲食らった様な顔は…………」

「真島さん！」

行き成りワシに向かい名前を呼んで来よった。んんう？どしたんや
いったい……

「こ、こここの人達って…………」

「ん？ん？こいつらウチの組や神室町の住人に見えるなあ…………」

「え、えっと……この人達って…………」

「……元は神室町の人間や無いのか？」

「だ、だったら何で躊躇なく撃ったんですか！？もしかしたらただの遊びで……」

「一夏」

「！」

わしは一夏を待ったを掛ける、たく、無駄に正義感あるガキやなあ。
ま！そう言う一夏は嫌いや無いんやけどな！

「なら一夏、こいつらをそのままにして奴らに食われろっちゅうんか？」

「そ、そう言う意味では……」

「それにな、お遊びでもこれはリアル過ぎるで？」

「う……」

「確かに元わしの組のもんや神室町の住人を撃つのは………気が引けるで？」

「なんですか今の間は…それに何故疑問形？」

「細かい事は気にせんでええ、ウチが言いたいのは一夏が噛まれるかもしれへん事や」

「！、それは……」

一夏め、自分が食われるかもしれへん事を忘れておったな……

「もしお前が噛まれてゾンビにでもなってみい、わしはお前を多分撃てんでえ、それにな……」

ワシは一呼吸して一夏の目を見る、五歳児の目はこんなにも汚れの無い純粋な目をしとったんやなあ……おっと今はそこやないな。

「ん、んん！……真夏ちゃんも、絶対ゾンビになつたお前を撃てへんで？下手したら自分も一緒に……」

「そ、それはヤダ……！」

「そやる？せやからワシはお前を守る為に銃を撃つたんや……」

「……………え？楽しんでませんでした？」

「ドアホ！今わしがカッコいい事言つとんのにチャチャをいれんやない！」

「す、すいません……」

「……………まあええ、せやからわし……………まあ楽しんでるのは本音やせやけどそれよりも大事ななんは一夏を守って無事に真夏ちゃんと合流させる事や」

「え？外に俺を出すんじゃ？」

「真夏ちゃんを助けにきたんやろ？なら……………」

わしは一夏の前でしゃがんだ体勢を解いて立ちあがり、ドアの前へと移動する。

「わしに着いて来い、真夏ちゃんを助けに行くで！」

「……………はい！」

ワシはドアを開けてミレニアムタワーの廊下へとでる。さあ…お楽しみ的一幕開けや…！

「ふう…無事に沙紀ちゃん達を届けたし、……………あ、おとんに電話するのすっかり忘れてたわ…」

テヘッと自分の頭をコツンと叩く真夏、龍也達は一旦後輩の定員を柄本の両院へと送った後にゲイリースブートキャンプへと行った。

「はよ電話せな……」

そう言つて五才の誕生日に堂島に買つて貰つた携帯で電話する。

「これって確かVOROU社の携帯つて言つとつたなあだいちゃん……」

どこかで聞いた事ある様な携帯で電話する真夏、だが電話はしたが一向に掛らない。

「……寝てるんかなあおとん……」

そう言つて携帯を切り、ポケットにしまふ真夏、さてこれからどうしようと思つているとある事に気づく、

「……そう言えばだいちゃんに誘われていたセレモニーの事すっかり忘れてたは……」

今から行けば間に合うかなと喫茶店アルプスでくつろぎながら考える。

そして真夏は会計を済ませて外に出て大吾達がいる神室町ヒルズへと向かった。

「そう言えばヒルズもなんや高い壁の裏にあつたなあ……どうやって入ろう?」

悩んでいると後ろから声を掛けられる。真夏は振り向くとそこには長濱がいた。

「よう、まだこんなところでウロチョロしてたのか」

「長濱さんもどないしてここに？」

「俺は…まあ金稼ぎだ」

「へえーそうなんか、とそうや長濱さん」

「ん？なんだ？」

「また壁の向こう側へ行きたいんやけど、どうやったらいけますう？」

「はあ？何死に行く様な事言つてんだ？」

「大丈夫やウチにはコイツがあるで」

そう言つて肩に担いでいっている布に巻かれたラブシャをとりだして長濱に見せる。

「……………五歳児が持つ武器じゃねえよこれ……………」

「へへへ…まあええやないですか、そんで……………」

「あ、ああ壁の向こう側への行き方だな？それなら赤石って奴に頼んでみる」

「赤石い？」

「神室の盾つてつうボランティア団体を組織している奴だ、奴なら中への入り方を知っているはずだぜ。聞いてみな」

「ホンマか？おおきに♪」

そう言つて真夏は長濱に礼を言つて去る。

「奴らはあのデカイ壁にいるから話掛けろよ！」

「おおきに〜！」

真夏は長濱に手を振つて歩き出す、一夏との再開は……近い！……かも？

オマケ・「ダチはカメラマン！」

「なんでレゾナンスにこないにいつぱいおんねん！」

そう言つて真夏（注：この真夏は13歳です）は銃砲店から拝借し

たショットガンを撃つ、

「しょうがねえだろ！ショッピングモールなんだから！」

そう言ってバールを振り上げゾンビの頭を力チ割る一夏（注：未来の一夏、13歳です）、

「はよりッちゃん迎えにいかんと！あの子泣いてる！」

「弾も早く見つけねえと何するか分からないからな……」

友達の心配をよそに敵であるゾンビ達は一夏と真夏を目指して進軍する。

「くっそう、ラブ亜門レールガンがあれば一発やのに！」

「無茶言つな！あんなもん何時でもどこでも持ち歩けるか！」

二人は喋りながらもゾンビを倒していくとその時！

ドゴォーンッ！！

「！？、なんやー！」

「次はなんだよ！？」

そう言ってゾンビの遙か後方から爆発と共にゾンビが粉碎されていく、

「生存者かいな!？」

「だがこの状況だとありがたい!」

そう言つて二人は倒しながらゾンビを蹴散らし、爆発があつた方向へと走つてゆくと爆煙の中から人があるいてくる。

「だ、誰や？」

「生存者…だよな？」

一夏と真夏はお互いの武器をその人影の向けながら警戒する、そして煙幕は晴れてその人物が見えた。

「………はい？」

「なん……だと……？」

二人は信じられない者を見た……

「結構苦戦してるな?一夏、真夏」

そこには二人の良く知る人物だつた。

一夏と真夏は別人であつて欲しいと願つたがたやすく打ち碎かれた。そう、そこには……

「………弾ちゃん？」

「おう、無事で何よりだ二人とも」

「ほ、本当に…弾…なのか？」

「当たり前だろ？親友の顔を忘れたか？」

二人は啞然としていたそれは何故か？

「「へ……………」」

「ん？」

そう……弾の格好は今……

「変態や—————！！」

「変態だ—————！！」

女性物の服を着て頭には馬キャップ、そして首にはカメラをぶら下げた弾がいたからだ。

「ちょ！おま！変態って！？」

「い、いやああ！？近づかんといて！」

「だ、弾！い、いくら親友でもま、まなちゃんに近付くとゆ、許さないぞ！？」

真夏は腰を抜かしてへたり込み、一夏はそれを守ろうとしているが足が震えていた。

「お前ら何やってんだ？」

「それはこっちのセリフだ！、や！」「

弾は未来、最強のゾンビハンターになっていた……オワレ、

十四話や！「パーチー……やなくてパーティの始まりや！」（後書き）

真夏「未来で弾ちゃんが……嘘や……」

一夏「俺だつて夢だと思いたい……」

弾「何がいけないんだ？」

一夏「お前の格好だ！」

真夏「アンタの格好や！」

作者「あのファッションって誰が思いついたんだろ？」

十五話や！」「なんでウチが？」（前書き）

早々十五話目！感想待ってます！

十五話や！」「なんでウチが？」

ここはミレニアムタワーの出口前、そこではショットガンを肩に担いで堂々と歩く真島と拳銃を持ちながらオドオドしながら真島の服にしがみ付きながら歩く一夏がいた。

「キヒヒヒ！いやゝあないにぶつ放したんは初めてやあ！爽快やで！」

「……………」キョロキョロ

「ダイジョーブや一坊！そないにキョロキョロせんでも平気や、わしが付いとる」

「は、はい……………」

とは言っているがタワー内では一夏そつちのけでゾンビを狩りまくり、一夏を涙目にさせていた。
それもあつてか、一夏は真島から離れようとしなない。

「一坊、そろそろ離れんか？男やろ？」

「で、でもお……………」

「せやけどなあ…………ん？」

真島が一夏と話していると近くから悲鳴が聞こえる。
そして真島と一夏の前を逃げていく人達が走ってゆく、
その一人が真島達を見つけて声をかける。

「おいアンタ達逃げろ！とんでもねえ化物が来るぞ！」

そう言っただけでまた再び逃げた。

一夏は不思議そうにして真島に聞く、

「化物って……？」

「しわんわい、せやけど……なんや、ゾンビとちゃうのがおるんかい」

そうして二人は歩き出し、道路に出ると近くからまた悲鳴が上がっていた。

「ま、また悲鳴……」

「あそこの車からや」

真島が指差す方向を見ると白いワゴン車が止まっていた。前の座席にいる人はエンジンをかけようとしている。エンストした見ただけだ。だがその指差した方向にいたのはそれだけじゃなかった。

「な、なんだあれ！？」

「……………なんやゴリラの一種か？」

真島達がそう言っているとその巨大なゴリラらしき化物が悲鳴上がるワゴン車を両手で掴んだ。

「た、助けて！助けて！」

「ま、真島さん！」

「こりやどえらい楽しめそうや……」

そうこうしている内に巨大ゴリラは車を持ち上げてあるうことが真島達の方へと……

「え！？」

「おほっ！」

分投げた、真島は一夏の首根っこを掴みステップして避けた。
そして投げられたワゴン車の中にいた人たちはもがきながらも外に出ようとする。

だが投げた巨大ゴリラはそれ良しとせず、こっちに走ってきた。
隣にあった戦車を殴ってふっ飛ばしながら……だがこちらもそれを良しとせずにいる男がいた。

「ドアホ！お前は……」

真島は一夏を離し、化物の前へと出る。

一夏はそれを止めようとしたが……

「わしの獲物や！」

バキッ！！

「……うそ……だろ……」

一夏は信じられないの物を見た、あの巨体を誇る巨大ゴリラを真島はゴリラの顔を殴り、静止させたのだ

。ゴリラは目をまん丸くして真島を見ていた。

「キツヒツヒツヒツ！」

その笑い声が癪に障ったのか、ゴリラは顔を怒りに変えて雄叫びを上げる。

「せや！そうこなアカン！」

「……まなちゃんゴメン……俺帰りたい」

ガクツと頂垂れて現実逃避をする一夏であった……

視点。「郷田真夏」

「――――ハッ！？いつちゃんが別の意味で危ない！？」

「まなちゃん！こっちの応援頼む！正面のゾンビの猛攻が激しくて！」

「！、了解や！」

ウチは今何とかヒルズに辿り着いたんやけどそこもやっぱりゾンビがいて東城会の幹部が襲われておったんや……ウチは東城会幹部の人達と共にヒルズに来店していたお客さんと非戦闘員の幹部の部下達を避難させてる所や。

「非戦闘幹部はお客の避難を！安住組は他の組と連携してゾンビを店内に入れんなや！」

「ウツス！」

「ライフルを持ってる人は上からの狙撃を！間違ってもダチに当てるんや！」

「合点だ！」

「それから――！、ダイちゃん何やってるや！？下がっといて！」

「い、いや俺も戦わないと！」

「アホ言つなや！総大将が前に出てどうすんねん――！」

まったくいつちゃんと同じで正義感強いわぁ、まあそこがダイちゃんのええ所なんやけど……

「クッ！熊谷はん！安住さん！」

「おう！」

「どうした？」

「ダイちゃんの警護を！前に出ようもんならフンじばっても止めて！」

「わかったぜまなちゃん！」

「任せろ」

「お、おい！お前ら！」

ダイちゃんは熊谷はんと安住さんに両脇をガッチリ拘束されて避難している人達と共に連れて行かれる。

「六代目、すみません…まなちゃんのお願いですので…」

「六代目が死んだら東城会は終わりですからね」

「だ、だからってなんでまなちゃんのお願いが優先されるんだ！？」

「まなちゃんだから」

「どんな理由だそれは！？」

「安住さんはお願いしますう、ウチは他の組引つ張って奴らを殲滅せんといけまへんから」

「わかった…行くぞ熊谷！」

「おう！六代目、失礼します！」

「ま、待て！ホントに待ってくれ！」

まなちゃん！と声を上げながら奥へと消えるダイちゃん、
まったく、総大将が前に出る戦なんて無いで？

「まなちゃん！ゾンビ共が防衛線を突破！至急救援を！」

「！？、思ったより早い…非戦闘幹部はそのままお客を店の奥に…
……真島組！！」

ウチが呼ぶと直ぐに声が来てウチの前に数十人の真島組の親衛隊が来た。

流石はごーちゃんの組や、まだ誰も掛けてへん。流石はレンジャー連隊にも引けを取らない強さや……

ちなみに、何故かウチの親衛隊なんやけどな。

「及びで？」

「親衛隊はありったけの武器を持って最終防衛ラインを死守！後残ったもんはウチと一緒に前戦行くでえ、ウチに着いて来い！」

「……オウツ……」

ウチは極道の人達にお願いして幹部達を連れてゾンビ共を迎え撃つ、
「こりゃホンマ物の戦場よりもたちが悪いで……」

ウチはラブSPAを持って最前戦へと走る。もうウチのダチは殺させ
へん!!

場所を代わりここは神室町に向かう電車の中、そこに白いコートを
着ている厳ついオッサンがいた……

「……………」

郷田龍司である、
龍司はコートのポケットから携帯を取り出して電話をかける、
掛けた先は真夏である。

「……………やっぱり繋がらへんなあ」

そう言っただけでポケットに携帯をしまう龍司、何故龍司が神室町へと向かっているかと言つと……

「真夏が行つた神室町ではけつたいな封鎖がされているとテレビで言つとつたが、真夏は巻き込まれておらんだろうなあ……………」

龍司の心配もむなしく東城会の指揮官してバリバリ巻き込まれている真夏であつた。

神室町まで電車で後四十分、龍司にはそれが長く感じていた。

「真夏……………無事でいろや……………」

そう言つてまだ遠くに見える黒煙を出している神室町を龍司は険しい目で見ている……………

ここはミレニアムタワー最上階、そこに椅子に座る二階堂とDDと言われる日系アメリカ人がいた。

「真夏ちゃんと言う郷田の娘の誘拐には失敗したね」

「ああ…まさか東城会六代目が助けにくるなんてな……」

二階堂にとっては予想外の伏兵だった事は言うまでも無い。

「……………あの男を使うかい？」

「……………林か…………」

DDは二階堂に元兄貴分に当たる林を使い、真夏を誘拐させようと提案した。

「彼はまだちゃんと命令に従って動いてくれるし、適任じゃあないかな？」

「……………そうやな…奴を使おう」

二階堂の了承を得た後、DDは携帯を取り出しどこかに掛ける。

「……………ああ僕だよ、指示通り真夏ちゃんをここに連れて来てくれ」

そう言った後携帯を切りしまふDD、

「そつだ、さっき映像で見たけど彼女の戦いには驚かされるね」

「……………流石は兄貴の娘や、一筋縄ではいかんっちゅう事やな」

真夏見たいな子供がいっぱいいたらバトルロワイヤル宜しく、大人達に宣戦布告しかねない。

「次いでにヒルズにアラハバキを送つといたから、連れてくるのはたやすくなると思うよ?」

「アレを送ってもあんまり心配しないのはなんでや?」

「君の兄貴の子だからじゃないかい?」

「……………否定はできひんな」

二階堂は溜息を吐き、とりあえず林や送ったハラハバキの心配しか思い着かなかった二階堂とDDであった。

オマケ・「悪霊山脈の悪夢！」

「いっちゃん走って！」

「フルスロットルで走ってる！」

真夏と一夏（注：14歳です）は悪霊が住むと言われるアークレイ
ーでは無く悪霊山脈にいた、
絶賛肉の剥げた犬共に追われているが……

「なんで犬に追われなあかねん!？」

「しるか!てか追っかけてくる犬ってアレもう普通の犬じゃねえよ
!」

とにかく走る真夏と一夏、少し走っていると遠くに建物の様な物が
見えてくる。

「いっちゃん建物や!あそこに入るで!」

「お、おう!」

二人は全速力でゾンビ犬との距離は離して走り、何とか建物内へと
逃げ込んだ。

「はあ……はあ……はあ」

「ぜえ……ぜえ……ぜえ」

二人は息を切らして建物の中であるエントランスに寝転がる。

「はあ…はあ…はああああ…こないな事になるなら探検なんてするんやなかった…」

「ぜえ…ぜえ…あああああ…悪霊に興味を持ったまなちゃんがいけないんだろ？」

「そらそうやけど…いつちゃんだって探検って聞いて目えキラキラさせとったやん」

「そ、それは…」

悲しいかな、男の探検心を借り立たせたばかりにこの様な眼に合う真夏達であった。

「まあええわ…とりあえずこの旅館？見たいな所に住んでる人に事情を説明して泊めてもらわな…」

「同感だ…とりあえず人を探さないと…」

「せやな」

そう言うては二人は立ち上がり、旅館のエントランスを見渡す。

「……ここって…旅館…やよな？」

「だと思っんだが…人がいない？」

ここが旅館ならいるはずの受付嬢や接客する旅館人が何時までたっても来ない事に疑問を抱く二人、

「まさかここって廃館なんじゃ……」

「でも電気は通ってるぜ？しかも廃館ならここまで綺麗じゃ無いだろ」

「確かにそうやなあ……ん？なんやこれ」

真夏は足元に転がっていた金属の丸い物を見つける。

「これって……」

「薬莢……だよなあ？」

「せや……9ミリ弾……パラベラムの薬莢や、せやけどどうしてこんなところに？」

二人はこれを見てやな予感がした。

「……いっちゃん、手分けしてこの旅館を散策するんや」

「お、おい！いくらなんでも危険だぞ！？」

「わかってる……せやけどここで留まって何も得られへん。ウチは向こうのドアに行くからいっちゃんは反対側を……」

「……わかった、気を付けてな？」

「誰に言ってるんや？」

「そうだったな」

二人は手分けして旅館を散策する事にした。これから訪れる悪霊よりもたちが悪い相手にして……

続く！……かも、

十五話や！」「なんでウチが？」（後書き）

真夏「ウチらつてもしかして……」

一夏「うん、とんでもない旅館に来てしまった見たいだ……」

作者「自分、ゾンビ物大好物です！PSPで新作出してくれませんかねえ……」

十六話や！「何とかヒルズは守ったで……」（前書き）

真夏「ええなあ……ごーちゃん、あないな化けモンと戦って……」

一夏「え？普通怖がらない？」

真夏「怒ったおとんの方が怖いわ」

作者「地震、雷、火事、親父……て言いますもんねえ」

十六話や！「何とかヒルズは守ったで……」

「キヒヒヒヒヒ！ええでえ！岩ゴリラア！もっともおーと突っ込んでこんかい！」

「ヒイイイイ！？お助けー！！！」

一夏と真島は岩ゴリラことオンラキと死の鬼ゴツコをしていた。真島は一夏の首根っこを掴んで背中に背負いながら後ろから追いかけてくるオンラキにショットガンをぶっ放す、

ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！

「うひゃひゃひゃひゃあ！楽しいなあ！」

「ヒ、ヒイイイイ！？う、後ろから！後ろが見えるから余計怖い！？」

「じゃかしいわあ一坊！そんな情けない所を真夏ちゃんに見られたら嫌われるでえ！」

「まなちゃんだって絶対怖がります！」

「アホ抜かせ！まなちゃんならわしと同じでこの状況を楽しむに決まっとるわあ！」

「なんで俺は極道少女に惚れたんだーーーーー！」

と今更後悔はするが真夏への想いは諦めない一夏はある意味凄
と思う……

「たく、コイツはあ……ん？一坊！」

「は、はいい？……へ？うわああああー！？」

真島は行き成り一夏を戦車の上にブン投げた、一夏は放物線を描きながら戦車の上に落ちてへブツ！と言う情けない声を上げて悶絶していた。

「い、痛い…ふえ…」

「泣いてる暇はないで一坊！ソイツを使ってコイツの岩剥がすんや！」

五歳児に酷な事を言う真島だった。

「ふえええん…まなちゃん…」

「だー！もう！まなちゃんに泣きいれんなや！男になるチャンスやで！？」

「うつう……？男に？」

真島は追いかけれ、撃ちながらも一夏に言う。

「真夏ちゃんに一坊の武勇伝聞かせて惚れさせるんや！」

「ほ、惚れさせる？」

「せや！今がこの時や！」

真島に言われ一夏は泣いてグチャグチャになった顔を引き締める。

「……グスツ…ズズー！、真島さん、俺…やるよ！」

「その意気や一夏あ！ぶっ放したりい！」

一夏は覚悟を決めて戦車の砲主に乗り込む、真島は時間を稼ぐ為一人でオンラキと対等する。

「さあーてえ…岩ゴリラア！わし一人でヤツたるけど堪忍なあ！？」

そう言いながらも心底楽しそうに顔をほころばせる真島、

一夏は急いで大砲の操作を覚える。

「………よかった！戦車の設計はゲイリーさんに乗せて貰ったエイブラムスと類している。これなら！」

一夏は素早く操縦をし、砲身をオンラキへと向ける。

「真島さん！行きます！」

「いいでえ！食らわしたりい！」

そして一夏はトリガーを引く、そして砲身から……

ドオオオオッ！！！！！！

砲身から弾が発射されてオンラキに直撃する。

「G
A
A
A
A
A
A
A
A
A
A
ッ
!!
??」

「一夏あ！！」

「はい！第二弾装填！」

一夏は戦車を捜査して弾を排出、弾丸を再装填した。

「目標う！。岩ゴリラ！」

「発射！」

ドオオオオンッ！！！！

また弾丸が発射され、オンラキの体にまとわり付いていた岩が砕かれ徐々に剥がれて行った。

「ええでえ！一棒！次や次い！！」

「はい！……あ、あれ？」

「ん？どしたんや？」

「……………弾切れです」

「なんやとお!?!」

一夏が乗っている自衛隊の戦車の大砲の弾が弾切れを起こしていた。

「じゃあない……………わしがフィニッシュ決めたる!」

「真島さん!?!」

「行くでえ!?!」

真島は走り出し、オンラキそれに気づいて腕を振り上げ横薙ぎに振り下ろすが……

「これがヴァンキッシュや!?!?!」

真島はギリギリで滑り込み、それを回避した後に……

「雑魚ボスの弱点はお決まりやさかいな!」

そう言っつて真島はオンラキの腸あたりにある光るコアに銃身を押し付ける。

「そこや!?!」

ドオオオオオオオオンッ……………

手に持つショットガンが火を噴き、コアを破壊オンラキは声にならない悲鳴を上げながら仰向けに倒れた。真島はそれを見届け、立ち上がり一夏に笑い掛ける。

「ナイスファイトや…一夏あ……」

「……あ、ありがとうございます……」

ふう〜と息を吐きながら砲主席にヘタレる一夏、真島は今の戦いを思い出して高笑いしていた。

「にしてもコイツはいつたい……ん？」

真島は岩の剥がれたオンラキを見て気になる物を見つける。

一夏も何事かと思い、戦車から下りて近くで見に行く。

「……真島さん、これって……」

「ああ……これは、どないな設定やねん。マニアックなゾンビやなあ」

二人はオンラキの右肩に付いている人工物を見て疑問に思っていた。

「さて、これどうし……ん？」

真島は自分の携帯がなっている事に気づき、その電話を取ってみると……

「真夏ちゃんからか……」

「え！？まなちゃん！？」

真島は電話を取り、電話に出た……………

「やっとバリケードと中に入ったゾンビを一掃出来た……………ふうう……………」

真夏はスパークショットを地面に置いてよっこらせっと言って腰を下ろす、実に爺臭い。

「さて……………安住組！被害報告よろ」

「ウツス！と言っても被害が多すぎて……………推測ですが、かなりやられたかと……………」

「さやか……………真島組の被害は？」

「ありません、皆生き残りました。真島組とまなちゃんがいなければこの倍は……」

「いわんでええ……どっちにしても、ウチは守れなかった……」

そう言つて肩を落とし両手で膝を抱える真夏に組の幹部は慌てふためく、

「い、いえ！まなちゃんがいなければ俺だつて生きていたか！それに六代目だつて危なかったと思います！」

「せやけどなあ……」

「そうそう、そう落ち込む事は無いと思うぜえ？まなちゃん」

「うゝんそうなんかなあ……ん？」

真夏は隣で腰を下ろす人物を見て驚く、

「うひゃああああ！？なんでここにまー君が！？」

「んな！？マツポが何時の間にここにいやがる！？」

幹部と真夏は驚き、警察のである谷村が何故かいた。

「そりゃあ俺がここの調査に来たからさ」

「ち、調査あ？」

「そ、調査、東城会が経営するって言う神室町ヒルズなんだから警察が警戒するのは当たり前だろ？」

「ま、まあ確かに…せやけどなんでここにまー君が？」

「俺がここに派遣されたんだよめんどくさいけどさばれそうだし、まなちゃんと暇出来そうだしな」

「あ、あははは…まー君ホンマに自由人や……」

「こんなのが警察で喜んでいいのか悪いのか……」

幹部と真夏は複雑な心境だった。

とりあえずヒルズの防衛は終わり、一休みした後には大吾の所に戻るうとすると、

「あ、俺も言っでいいか？」

「ああ！？駄目に……」

「ん？ええでえウチがダイちゃんに話しくわ」

「まなちゃん！？」

「おー助かるう」

二人は店の奥に向かい、ポツンと残された幹部は啞然としたまま立ち尽くしていた。

「俺が…俺が可笑しいと言うのか!？」

そんな悲痛な叫びは誰にも聞こえなかった……

ここはヒルズの店の一角、そこに大勢の生存者が避難していた。
そこにいた安住に声を掛ける真夏、

「アズにゃーんお客一名来たでー」

「……アズにゃんは止めてくれ」

「えー？カワエエのに……」

「はあ……ん？その男は？」

「どうも」

そう言って頭を下げ、挨拶をする谷村に安住は首をかしげる。

「ソイツは一体……」

「マツポのまー君」

「なんかその言い方警察のマスコットキャラになってないか？」

「別に間違ってへんやろ？」

二人が話していると店の奥から大吾が現れる。

「まなちゃん！無事だったんだね！？」

「ちょっと疲れたけど、怪我はしてへんから安心しい」

「そうか……ん？君は……」

「マツポの谷村っす、以後良しなに……」

「ああ、確かまなちゃんが言ってた麻雀仲間の……」

「せや、警察の人なんやけど……アカンかな？」

「いや今の状況じゃあ警察も何も関係ないからね、こっちは人手が増えて助かるよ」

「だそうや」

「はあ……やっぱ働くんた……」

「当たり前や、マツポなんやから、それに今回はマジでしゃきつとせな……死ぬで？」

「……わかってる……ちゃんとやらないとあの世の上司に怒られちゃうからな……」

「うふふ……頑張つてな、まー君」

真夏はケラケラ笑い、堂島も釣られる様に笑って場を和ます。と真夏はある事に気づく、

「そう言えば……ごーちゃんは？」

「真島さんはここにはいないよ」

「たく……あの人は……」

堂島と安住は困った様な顔をする。

「……サボリ、か……」

「サボリだねえ……」

「忘れてるだけだと思うよ？」

「アイツ、何様のつもりだ。まったく……」

「まあええわ、ウチが電話を掛けて見ます」

そう言つて真夏は携帯を手に取り、電話を掛けて見る。

「……………あ、ごーちゃん？ウチやウチィ」

「ウチウチ詐欺？」

「…うん…うん…え？一夏も一緒なん？」

「一夏君も一緒なのか……」

「真島さんに付いていたとは…運が無い」

「まああの人振り回されたら命がいくつあっても足りないねえ」

人のいない所で好き勝手言う幹部とマッポ、

「……え！？マジで！？やくんごーちゃんズルイ！ウチもいつちゃん見たいにぶっ放しかつたで！」

「ぶっ放す？」

「真島さん一夏と何をやったんだ？」

「とりあえずは過激な事で間違い無いねえ」

またも人のいない所で勝手な事を……いや事実か…

「うん…そつかそか、それじゃあ直ぐにこっちに来てなあ。あ、いっちゃんに代わってくれへん？」

「お、一夏君に代わるみたいだ」

「よく無事だったもんだ」

「一夏もついてるねえ」

一夏の無事を喜ぶ一同だった。

「いつちゃん？…え？な、なんやいつちゃん泣いてるん！？どうしたんいつちゃん…ん、ふむ…そかそか、そりゃあ可愛そうに…うん…うん…もう大丈夫やで、ウチがごーちゃんとO H A N A S H I するから…変わってくれへん？」

「！？（な、なんだ！？急にまなちゃんの周りの温度が下がった！？）」

「ま、まな…ちゃん？（こ、これは一体！？）」

（あゝあ…怒らせちゃった…）

三人は真夏の急な温度差にビビっていた。そして…真島に代わり、真夏が喋りだす、

「……真島さん」

「！、まなちゃんが名前で！？」

「こ、これは…死んだか真島！？」

（骨は拾ってきますよ……）

「なーんでいつちゃんを泣かせたんかなあ？いつちゃんを戦わせんでも一人でやれる筈やったやろ？いつちゃんはまだ五才やで？銃も持つ歳でも戦車乗る歳でも、ましてや化物とやり合う歳や無いんや…そこんところ分かってるやろ？」

（こ、これは……）

（な、なんて……）

（……骨も残らないかもなあ）

（（（マジで怖い！！）））

三人は真夏の低い声とハイライトの消えた目に恐怖し、真島の心は絶望的だと悟った。

「……ウチはどうなんやと？今ウチはいつちゃんの話をしとるんやで？話を変えんで欲しいんやけど？……それでええんや、そんで…
…返答は？……まあええやろ、何時までも怒ってもしかへん、早くいつちゃんを戦わせず、安全に、エスコートしてやねごーちゃん
へ」

ピツと携帯を切り、ふうと息を吐き三人はやつと重空気が解放された。

「まったく、ごーちゃんはなんでこう加減を覚えてくれへんのやろ。困った子や……」

「……安住」

「はい……」

「……よし」

「「まなちゃんを絶対に怒らせないようにしないと」「」

三人は固く決意したのだった……

「……まー君」

「な、なんだ!？」

「とりあえずまー君を隔離エリアから出して、警察にこの場所を教えて欲しいんや」

「お、おう」

「そんで、その護衛にウチが行くからまー君は武器持つてる？」

「い、いや……俺の銃は弾切れで……」

「さよか」

真夏は腰から自分のブローニング・ハイパワーを谷村の前に出す、

「これを使って、ウチはこっちがあるからそれじゃあいこか」

「い、いまから？」

「早い方がええ、お客さんも心身ともにまいって来てる……反乱を

起るのは防がなあ」

「わ、わかった…」

谷村は真夏から銃を受け取り、腰に収める。

「ほな行くで」

「え、えつと…真島さん達は待たなくて？」

「まー君送ったらウチは直ぐ戻るから平気や、いっちゃんは泣いてはったけど根は強い子や」

そう言つて谷村に笑いかけながら歩く真夏、それにオドオドつて行く谷村……真夏の暗黒面は誰だろうとビビらせる迫力があつた。

「この事件終わったらごーちゃんとお話せな」

「真島さん…生き残つてくれ」

その後、真夏達がヒルズを離れ、その入れ替わりに真島達が到着。真島は入つて来た直後斜め四十五度の綺麗なお辞儀に似た謝罪が店に響いたのを真夏達は知らない……

オマケ2・「旅館検索」

真夏は一夏と別れ反対側の部屋へと進んでいた。

「ここにやちわ……誰かいませんか？」

真夏（注：13歳）は呼んでも返事が無い、そしてさらに進むと大きな部屋に辿り着く。

「ここは…食堂か？」

そこには大きなシャンデリアと横にのびるテーブルに椅子が沢山ある部屋だった。

奥に進むと暖炉がありそこに近づく。

「……これは…？」

暖炉のそばには赤い染みといくつもの葉莢が転がっていた。そしてもう一は……

「物騒やなあ…拳銃が落ちてるで」

真夏はそれを拾い上げ、確認する。

「……弾切れかぁ……お、マガジンがある」

真夏はマガジンも拾い上げ、拳銃の空弾奏を抜いて弾の入ったマガジンを挿入する。

「なんやろなーこれ、結構カスタムされてるし……このグリップの星のマークはなんやろ？」

真夏は拳銃のカスタム化されてる事に疑問を抱いていたが、とりあえずはスライドを引いて初弾を装填する。

「弾は12発……ちょっと心細いけど、何とかなるやる後で見つかりそうやし」

そう言つて真夏は拳銃の具合を確かめた後、床に飛び散っている赤い染みを確認する。

「……血……やよね、これって……アカン、ホンマに危ないかも、この旅館……」

真夏は一夏にこの事を知らせようとしたが、

「まだ奥に部屋が残ってる……少し奥に行つてから報告しよ……」

そう言つて真夏は立ち上がり歩き出す、そこで捕食者に出会つとはしらずに……

「ここは廊下やな……明りが少な「グチャ……」ん？」

真夏は奇妙な物音に気付き、音の発生現と思われる廊下の一番奥に向かう。

「人か？」

真夏はゆっくり近づいていき、確かめる。

そして真夏は床に寝ている人とそれを支える様に側にいる人を見つける。

「あの…この人ですか？」

真夏は呼びかけたが、一向に返事が無い、そして真夏が近づいてゆくと……

ブシュ！ゴロン……

行きよいよく床に赤い液体が流れ床を染め上げる。
そしてその後にゴロンと転がってくる物体があった。

「へ？……ひい！？」

真夏は瞬時に飛び引いた。なぜならそれは……

「な、なな生首！？」

真夏の大声に気づいた人物はゆっくりと真夏の方へと顔を向ける。
その顔は口は血で汚れ、目は生者の目をしていなかった……

十六話や！「何とかヒルズは守ったで……」（後書き）

真夏「うふふ… ホンマごーちゃんはオイタが過ぎるわぁ……」

一夏（まなちゃん…目が怖いー！）

作者「真夏と一夏のバイオ編……初代のアレの振り向き様の演出はホントに印象に残りますね……自分、小さい頃父親に抱きつきながら一緒にプレイしました……」

十七話や！」「トラの狩りが始まるでえ！」（前書き）

あの方の出番が決まりました！見てください！

十七話や！」「トラの狩りが始まるでえ！」

ウチはまー君を警察署では無く、突然現れたゲイちゃんによってまー君はゲイリーズ・ブートキャンプに拉致られ、ウチは一人神室町の隔離エリアの外にいた。

「まさかゲイちゃんが待ち構えていたとは……まー君もご愁傷様や……」

離せー！俺はまなちゃんとサボるんだー！と言って引きずられながら連れてかれたし……
ゲイちゃんも積極的やなあ……

「……アッー！な展開にならなきゃええけど……さて、ウチもヒルズに戻るかいっちゃんやごーちゃんがまつてるはずやし」

ウチはとりあえず必要な物を買う為にドン・キホーテと無事な方のポツポ店に向かう。

お金はちよつちゾンビから拝借したからお財布はパンパンや……追いつきとか盗人とかやないで？ヒルズの人達の為に使うんや、ゾンビになった人達も許してくれるはず！……多分。

視点・「????」

「どないなつとんねん……これは」

わしは中国の商談が早く終わって神室町についたんやけど……

「なんやエライ騒ぎやなあ…テロでもおこったんかい？」

商談相手が真夏ちゃんの知り合いで商売が滞りなく進んだんわええんやけど、

まさか外国にも真夏ちゃんの知り合いがあるとは……

「確か、上山とか言う奴から聞いてそれで知り合ったとか言うとなな……」

商売相手はなんや派手な衣装を着た人形を頼ずりしてはったし正直
気味が悪かったわ……

（しかもその人形が真夏ちゃんに似てた様な似て無い様な……）

まあええわ、それよりもどうやって開催セレモニーがやっている神
室町ヒルズに行くかな、

六代目や兄弟もおるはずやし、

「真夏ちゃんもきつというはずや」

「ウチがどないしたん？」

「うお!?!」

「ちょ!どないしたんやトラちゃん?そんな大声上げて……」

わしが喋っている途中で後ろから声を掛けられてビックリしたんけど……真夏ちゃんかい……

「ま、真夏ちゃん?」

「そやでーてトラちゃんは小龍はんと商売の話で中国行っってはったんやろ?終わったん?」

「あ、ああ真夏ちゃんのお陰で商売は上手く行っただで?」

「さよか、そりゃよかったわ小龍はんも話の分かる人やなあ」

「ああ、こんなに上手く行っただのは初めてや」

「そかそか、あ!そういえばその人に中国に来て見んかって話があったんよ」

「そないな話が?」

「せやで、なんやこつちに来てご奉仕せえへんか?って来たんや」

「ご奉仕やと!?!ま、真夏ちゃん!それって!!」

「トラちゃん……」

「な、なんや？」

「ご奉仕ってなんや？」

ズドンッ！！

わしは頭からまつさかさまにずっとけた。イツテエ……

「トラちゃん？」

「……え、ええか真夏ちゃん、絶対中国に行ったらアカン！」

「？、なんでえ？」

グッ！この純粋な瞳が汚される所やった！危なかったで……

「ええか真夏ちゃん、これはウチとの約束やご奉仕つちゅうもんをまだ教えられへんけど何時かは真夏ちゃんにも知る時がある。せやけどなあそれは心に決めた人にだけするもんや」

「心に決めた人？」

「せやいるやろ？その…す、好きな人とか…」

「うん、いるで」

「ど、誰や？」

「トラちゃん」

「は？」

な、なんやと？わ、わしが！？

「トラちゃんは優しくて、時々見せるお茶目な所がカワイエんや」

「……………」

「そんでもって腕っ節が強くてカッコよくて……………」

「……………」顔真っ赤

「ウチの大事な……………」

「だ、大事な？」

「友達や！」

ドオオオオオンッ！！

わしは地面を陥没させる勢いでドたまを打ちつけた。

「トラちゃんだけやないでダイちゃんもごーちゃんも駿ちゃんもまー君もタツちゃんもサツちゃんもたっちゃんや伊達はんやサイの河原の人達と東城会の幹部の皆、そしておとんやちー姉ちゃんといっちゃんも大好きやで」

まなちゃんは指で数えながら神室町の人達の名前を言う。

「は、はははは…さ、さよか」

「うん！」

アホかわしは…何を五歳児に期待しとんねん…これじゃあ真夏ちゃんを襲ってきたロリコンと一緒にやないか……

「……はあ、とにかく中国に行きたい時はまずわしと兄弟と後これれば六代目や親衛隊が連れていきい……（てか中国マフィアってなんで真夏ちゃんを欲しがらんや？）」

「???、トラちゃんが言うんならそうするわ」

よし、とりあえず拉致監禁は防いだで、六代目に言ったら中国との商談を即効で破棄しようやし……

「わしの苦勞が水の泡になりそうやしな……」

「トラちゃん？」

「なんでもないんや気にせんでええ」

そう言っつてわしは真夏ちゃんの頭を撫でる、少し驚いていたが直ぐにされるがままに撫でられている。

ホンマに可愛いやつちゃ……

「さて…そろそろヒルズにいかなあ」

「あ、そやったわ…ゴソゴソ…はい！トラちゃん」

「ん？なんや？」

真夏ちゃんはお揉むろに後ろの腰から……て拳銃！？

「ま、真夏ちゃん！？それは！！」

「ヒルズに行く途中は危険やからこれ貸したるわ」

おいおい…いくら神室町が危ないからって拳銃はいらんやろ……

「いらんと思うで？真夏ちゃん」

「絶対必要やって…それに撃てないんならウチがやるし」

「な、何言ってるんや！真夏ちゃん！？」

真夏ちゃんがわしの代わりに撃つやと？人を撃つ怖さしらんのかい！……いや知る訳ないかこんな五歳児に……

「真夏ちゃんあのな……」

「トラちゃんはよいこ！皆が待つてるで！」

真夏ちゃんはそのままわしに拳銃を押し付けて手を引っ張る。

「神室の盾に頼めば入れてくれる筈や、はよういかな！」

「お、おい真夏ちゃん!!」

わしは引つ張られるまま真夏ちゃんについて行く、わしはこの時しらなかった……

真夏ちゃん言う拳銃が必要な意味を……

視点・「織斑一夏」

「弾幕薄いでえ!何やってんや!!」

「は、はい!」

俺は群がるゾンビをヒルズの二階からスナイパーライフルで狙い撃つ、

「クソ!クソ!なんで神室町の人達を撃たなきゃいけないんだ!」

「今はゾンビや、ためらうんやない！今は後ろにいる奴らを守る事だけ考えい！」

「っ…………はい！」

俺は撃つ、後ろにいる人達を守る為に銃を握り、狙いを定め、引き金を引く……

まなちゃんが守った人達を守るんだ！絶対に突破させない！

パアーンッ！

「助かったで一坊！」

「あまり前に出ないください真島さん！」

「わしが前に出んで誰が出るんや！」

「真島さんがゾンビになったら誰が倒せるんですか！！」

「うひゃひゃひゃひゃ！そうやったわ！」

ホントに楽しそうにゾンビにショットガンをぶちまける真島さん、まなちゃんが出て言った後にそれを狙った様にまたゾンビの群れが押し寄せてくる。

（真島さんが奮闘してくれたお陰で前線が保たれているけど……このままじゃもたない！）

俺の他にも幹部の人達が援護しているけど、ほとんどが銃をあまり扱って無い人だから戦力は俺と真島さんの部下のまなちゃん親衛隊だけだ…後どのくらい持つか……

「親父！」

「！、不味い！」

真島さんがゾンビ達に囲まれている！助けないと！

俺はスコープを覗き、真島さんに群がるゾンビを撃とうとするが……

「駄目だ…俺の腕じゃ真島さんに当たる！」

「畜生！どうすれば！？」

こんな時にまなちゃんがいれば……！！

その時、キューーンやバチバチッと音が聞こえた。

「な、なんだこの音？」

「こ、この音は！」

そう言った瞬間ゾンビの群れの一部が吹っ飛び体を炎に包まれながら沈黙した。

真島さんの前に退路が広がった。

「なんだよ…これ？」

俺がゾンビを一瞬で半分まで減らした電撃に驚いていると、聞きなれた声が聞こえる。

「だあかあらあ！銃は必要やって言っただやん！」

「わかったわかった真夏ちゃんの言う通りやったって」

「わかりやあええんや、ほないこか」

そう言っただけで出て来た煙から小さい影と大きな影が見えた。

「あ、あれって！」

「まなちゃん！冴島さんもいるぞおー！」

幹部の人達は歓喜の声を上げる、俺もいここが無事でホッと胸を撫で下ろす。

「よお兄弟！なんや楽しんでるやないか！」

「キツヒヒヒヒ、まあなあゾンビを撃てるなんて夢の様な！」

「まあ、夢だったらよかったんやけどな……」

「せやねえ……」こーちゃん

「んんう？なんや？」

「さっきの電話でした話……続きがあるからこいつらカタアつけたら……分かってはるな？」

「……………はい」

こゝこえゝ…一瞬まなちゃんの周りの空気が凍ったぞ！？何故かゾンビもまなちゃんから後ずさりしてるし……

「いつちゃん！」

だが直ぐに顔を笑顔にして俺に向けて手をふるまなちゃん、癒される……

「一坊！無事やったんやなあ！」

「はい！お陰さまで！冴島さんもお帰りなさい！無事で何よりです！」

「おおきになー！」

お礼を言つて手を振つてる冴島さん、中国の商談が終わつたんだ……あれ？早すぎじゃないか？

「……………ま、まなちゃん！兄弟！再開は後にしい！こいつらを片付けるでえ！」

「そうやった、真夏ちゃん！やるで！」

「了解や！」

まなちゃんは巨大なコンセント見たいな銃をゾンビに向けてバチバチツと音が鳴つた後、雷撃が放たれる。冴島さんは拳銃を撃つ的確に頭を撃ち抜いて行く。真島さんは相変わらずショットガンをぶ

っ放していた。

「凄い…圧倒的だ！」

「親父い！」

「いいぞー！」

幹部の人達も応援する中、まなちゃん達の戦いは一方的な戦いで終わった。

オマケ・「フルメタルジャケットとホローポイント……どっちで撃たれたいん？」

「はいはいいつちゃん怖かったなーもう大丈夫やでーウチがいるから安心しい……」

「うん……」

ウチとトラちゃんとかーちゃんてヒルズの外にいるゾンビを倒してヒルズに入り東城会の幹部の人達に喜ばれながらウチらがあるいているといっちゃんかウチの前に現れて泣きそうな顔でウチに抱きついてきたんや、少し驚きはったけどいっちゃんか少し泣いてはったからウチはいっちゃんの背中をポンポン叩いてあやしめてるところや。

「外のゾンビはウチらが片付けたからもう安心や、せやからもう大丈夫やで？」

「……うん」

ウチはいっちゃんの頭を撫でて落ち着かせる。
やーん今のいっちゃん力ワエエなあ。

「一坊も苦勞したんやなあ……」

「せやねえ……」ナデナデ

そんなウチらの光景を見ている幹部の人達もどこかほんわかな雰囲気になっっていたんや。

そんな中、ケツを上げて倒れている人が約一名おった。

「……………」チーン……

「お、親父…大丈夫ですか？」

「だ、駄目や…完全に落ちてる」

「こりゃ…復活するのに時間掛るんじゃないか？」

「そりゃそうだろ、だって……」

「ごーちゃんの部下の人達はごーちゃんの状態を声をそろえて言う。」

「……ケツにネギをぶち込まれたらなあ……」「……」

お尻を抑えながら部下の人達は言う、ごーちゃんがいつちゃんを泣かせたお仕置きでウチが服ひん剥いて刺した結果がこれや、ちなみにネギの先にはタバスコを付けてたのは内緒や。

「兄弟……哀れやなあ……」

「確かネギをお尻に刺す治療法があった様な……」

「六代目、それは嘘ですから……」

ダイちゃんやトラちゃん、あずニヤンもそう言いながらお尻を痛そうに擦る。

「いつちゃん…もう平気やから泣きやんで？な？」

「うん……」

ちなみに弾丸で言うならネギにタバスコを塗る方がホローポイント、ネギを奥深く突き刺すんわフルメタルジャケットや。アーマーピアッシングは……分かってるやろ？

十七話や！」「トラの狩りが始まるでえ！」（後書き）

真夏「いっちゃんが風邪ひいたらごーちゃんにやった治療法で治したるね」

一夏「い、いやいい！普通に頼む！」

大吾「あの治療法って為した事があるのか？」

冴島「確か…真夏ちゃんのお父さんに為したとか……」

安住「……ご愁傷様」

真島「ケツが……ケツが……」

作者「真島さん…お悔やみ…申し上げます」

十八話や！」「東城会はホンマにええなあ！」「（前書き）

感想待ってまゝす。

十八話や！「東城会はホンマにええなあ！」

俺は金村興業若頭の城戸武だ。前は若衆だったんだが兄貴がムシヨに入って後また出て来て兄貴が組長に就任、俺が若頭として金村興業を動かしている。俺もムシヨに入っていたんだが何故か脱g出所して神室町にいる。

よくわからないが須藤とまなちゃんのお陰らしい……どうやって俺を出したんだ？

ちなみに兄貴の方は最初は出るのを断つたらしい、スジは通すつて奴だな俺だつて最初は断つたんだぜ？でもまなちゃんが……

『金村興業を守るんは二人しか出来へんで？たけちゃんと新井はんだからこそ金村興業や』
♪

俺はその願いを聞き入れて俺は若頭になった。まなちゃん…俺、頑張るよ……

まあそんな事があつてここにいるんだが今の状況が最優先だ。俺は今まったく動けない状況にある。

「……………（なんなんだよあの赤い目をしたゾンビは！？それに人食つてたしよ…………）」

と言う状況に陥っている、俺は興業の仕事が終わって神室町を歩いていたんだが突然周りから悲鳴が上がって人でごった返している神室町がさらに逃げる人で埋め尽くされて俺はもみくちゃにされたんだ。

そして人がいなくなつた神室町になつたいや……”人ならざる者”なら残っていた……

（何時までもドラムカンの中に隠れていられねえ……どうすれば……）

俺はすぐに隠られる物に隠れ、状況を把握して逃げだそうと試みたがまわりにいるゾンビ？達が一向に消えねえから出るに出れなくなっている。くそ……早くどこか行ってくれ！

（なんで神室町にゾンビがいるんだよ、こんなのまなちゃんが見せてくれたゾンビ映画で沢山だ！）

そう愚痴って今の状況を打破すべく頭を使う、だがどうにもこんな状況がくるとは思わなくてまるで考えがつかない。ヤクザやチンピラ相手なら手立てはあるんだがこいつらは人間じゃねえ人を襲う可笑しな連中だ、さっき見たがあいつらに掴まれた人間は暴れて振りほどこうとして全然振りほどけなかったところを見ると奴らは相当の腕力があるらしい、その掴まれた奴は首を噛まれて奴らの仲間入りになっちまった。

（くそう……こんな時まなちゃんがいれば！）

癒され……じゃなくて何か思いつくんだが、てか五歳児に頼る俺って

……

と、とにかく！ここから出て安全な所にいかねえと！

俺は意を決してドラムカンから出ようとしたが運悪く足が滑ってドラムカンの中に逆戻りして尻を打ちつけ角に鼻を強打したのち悶絶した。

「いってえええええっ！！！！！」

声を上げて俺は痛みに耐える、その声に気づいたのか数人のゾンビがこちらにやってきた。

不味い！今の声を聞かれて寄ってきやがった！？早く逃げねえと奴らの仲間入りしちまう！

急いでドラムカンの中から出ようとしたが、アホか俺は……また足を滑らせてドラム缶に逆戻りしまったケツを打ちつけその拍子にドラムカンが倒れて目の前にゾンビ達があ” - あ” - 言いながら近づいてくる。

「よ、よるなショッカー！ぶっ飛ばすぞ！」

奴らにそう言っても聞かず、俺に近付き血だらけの口を大きく開けて迫ってくる、お、俺を食っても美味しく無いぞ！！てそんな事言ってる場合じゃない！どうするよ俺！？絶体絶命だぞ！？俺はドラムカンの中でもがいているとギシギシ音を立てていたドラムカンが動き出した。

ゴロツ

「へ？」

ゴロゴロツッ！

「ちょ！っわ！待てって！！」

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロツッ……！！

これなら今の神室町から脱出できる、俺はそう思い未だに転がるドラムカンの中で歓喜の声を上げる。

「ははははははっ！こいつは良い！これなら脱出も出来「ガンッ！」「ぶべっ！？」

俺が喜んでいるとドラムカンがあるう事が壁にぶつかり俺はタイミング良く顔を壁に強打して動けないドラムカンの中で鼻血を垂らしながらまた悶絶する。いってえ……ちくしょう一緒に回るから前が一瞬しか見えねえ…早くUターンしてここあらオサラバしねえと、そう言つて俺は体を揺らしてドラムカンを動かして移動するだが目の前に待ち構えていたのかゾンビの群れがやって来た。

「あ”あ”あ”……」

「うあ”あ”あ”ゝ…」

「あ”-……」

「…………へっ上等！」

今の俺とドラムカンに怖い物はねえ！行くぞ！！

「おらおらおらぁ！ドラムカンのお通りだ！！」

ドカドカドカドカドカッ！

「あ”-……」

「い
” - - - -」

「う
” - - - -」

「え
” | - - - -」

「お
” - - - -」

俺達の突進でゾンビ達はボウリングのピン見たいに跳ね飛ばされて行った。

何人こようが俺達の敵じゃねえ！どんどんこいやー！

ところ変わってここは神室町ヒルズ……そこで東城会四代目堂島大悟と安住、そして……なんとか復活した真島達が話していた。

「真島さん……今更だがアンタ、今まで何やってたんです？」

「あゝ尻がまだ……ん？なんや…また、お前かいな……安住」

「あんた警備担当だろうが！何人死んだと思ってるんだ」

安住が怒鳴りながら真島に問い詰める、だが真島はどこ吹く風で。

「あ？わしのせい、言うんか？ドアホ、そら、お門違いやで」

「じゃ誰のせいだって言うんだ？あ？」

「そら、お前、ゾンビを送り込んで来た奴らやろ」

「てめえ……おちよくってんのか！」

安住が真島に掴みかかろうとしたが真夏と六代目が仲裁に入る。

「よせ……そんな事してる場合か」

「あずニヤン落ち着いてなあ」

「し、しかし……」

「あ、安住さん、俺たちもここに来る途中ゾンビ達の襲撃にあって……」

「な、なに！？」

一夏はここまでの経緯を話す、それを聞いた安住はどうやらそつち

もそつちで大変だった事を知った。
安住はどこか腑に落ちない顔をする。

「ま、そう言うこっちゃ」

「そんな大事な事、どうしてあの時の電話で言わなかったんだ!？」

「あずニャン落ち着いて…今はごーちゃんといっちゃんの無事を喜んでほしいんや…ダメ？」

真夏は目をウルウルさせ安住を見る、安住はその目に耐えられないのか目をそらしながら言う。

「わ、わかった、わかったからそんな目で見ないでくれ……」

「おおきに♪あずにゃん!」

「だからあずニャンは止めてくれ……」

「……いろんな意味で、ご無事で何よりでした、真島さん」

「……………六代目もや」

真島は尻を擦りながら言う、安住と六代目はあの時の光景を思い出したのかまた同じように尻をさすっていた。

「この一見で古参の幹部も半数近くやられました。まなちゃんのお陰で生き残りは大幅に増えましたが、今の東城会……いや、神室町その物が崩壊寸前です」

「見たいやなあ……」

「それと、一つ気になる話が……」

「ん？」

「神室町中にある東城会系の組事務所、今回の襲撃はそこが発端になったようなんです」

「そっぴゃあ……ウチが初めてゾンビにおうた時も、確かあそこの二階って組事務所やったなあ……」

驚いて気づかなかったわあと言ってうんうんと首を振る真夏、六代目は話を続ける。

「つまり……誰かが意図的に東城会を狙ったと」

「ああ、さっき二階堂とか言う小僧が挨拶にしてきたわ」

「俺も会いました」

真島と一夏が二階堂と言う男の話を聞いて安住は言う。

「決まりだ。今回の事件の首謀者は二階堂……。それにもしかしたら、誰かが奴のバックについてる可能性が高い……」

「しかし……狙いがウチとして、こいつはもう極道の抗争なんかじゃない。近江がここまでやるとは……」

「そんな悠長な事言っただけでしょうが!」

安住が大きな声で言う。その言葉に皆が安住へと視線を集中する。

「すぐに報復の準備をするんです！」

「あずニヤン……」

「安住さん……」

「極道が舐められたら、それこそ……！」

安住が喋っている途中で間島が安住の顎を掴み、喋れなくする。

「あがぁ！？」

「よう動く舌やなあ……どないな作りになっとんねん？、あぁ？」

「あ……あが！……あぐあぁ！」

安住は必死に離そうとするが真島の腕力に勝てずされつがままになつていた。

「もうすぐ夜やで……次のパーティーの話はまだ早すぎとちゃうか？」

「………せやな……あずニヤン、報復とか簡単に言うけどな……これはもう極道同士の抗争なんて簡単な話とちゃうねんで？これは……神室町全体を巻き込んだ、一大バイオテロや！」

真夏がそう言った後、真島は安住の顎から手を離して解放し店の窓際へと移動する。

「おう、お前ら！」

真島が大きな声でお客や避難してきた人達に聞こえる様に叫ぶ、

「死にとうなかったら店の棚を窓に寄せるんや！女子供は奥！食いもんと水は数揃えて配給制や！」

「あ！お年寄りが一番安全な場所に移ってや！元気な人は歩けん人を助けて上げて！」

真夏も指示をするだが避難してきた人はボーと立っているだけで何もしない。

「あ、あれ？」

「……………さつさと動けやボケ！」

「……………は、はい！……………」

真島に怒鳴られ避難してきた人達が慌ただしく動く女性と子供は奥に、男達は水と食料を運んでくる。

「さすがやな、ごーちゃん」

「ハッ！当たり前や」

真島はそう言って窓の外へと視線を向ける、外はもう夕方になっていた。

「ウチはちょっとダイちゃんと話をしてくるやさかい、後は任せただ〜」

「おう」

そう言つて真島の元を離れ六代目の方へ走る真夏、この後真島は真夏意外の女の子と話して調子を狂わせらるのはまた別の話……

視点・「郷田真夏」

「…………ハッ!? いまさらやけど今たけちゃんが無双してるビジョンが!」

「ううん……まなちゃん?」

「ああ! ゴメンないっちゃん、起こしてもうた?」

「ううん起きてたから平気だよ」

「さよか、ならもう夜やし寝ててや」

「まなちゃんは？」

「ウチはいつちゃんが寝たら寝るから、早よ寝なさい」

「うん……」

いつちゃんはまた瞳を閉じてウチの膝枕で寝る、今日はいつちゃんにかなり負担を掛けてもうたしなあ……まあ五才のいつちゃんが経験する事やないんやけど……ウチらはヒルズに立てこもってから数時間、外は夜でいろいろダイちゃんやあずニヤンのお願い聞いたりごーちゃんの猛烈な謝罪を聞いたりとちよつちウチも疲れてもうたしなあ中に入ったゾンビを駆逐する為にウチといつちゃんがカップル役をやってゾンビをおびき寄せたりして大変やったわ……せやけどいつちゃんウチとカップル役をやってけれとダイちゃんに頼まれた時モロむつちゃ顔を赤くしてはったけど……どうかしたんかな？もしかして嫌やつたんかなあ……

「まあ……ゾンビをおびき寄せる餌になんて好き好んでやる人なんておらんわな……」

ウチは寝ているいつちゃんの頭を撫でて寝付かせる、ホンマ……お疲れ様や、いつちゃん……

撫でているといつちゃんから寝息が聞こえて来た。どうやらいつちゃんも寝てくれはった様や。

ほならウチもそろそろ寝るとしましょか、こことん所ゾンビ相手に立ちまわって疲れててもうたしお客や避難してきた人達のアフターケアに急がしはったからもう眠くて眠くて……

「ふああ…むにゆう…お休みいっちゃん…」

そう言つてウチはいっちゃんの耳に騒音防止様の耳せんを入れて膝枕したまま眠りに着いた、明日からまた忙しくなるでえ……とそうは問屋が卸さへんのが世界の残酷なとこやなあ…

「な、なんだありや!？」

「!」

「世界は何時やってこんな筈じゃ無い事ばかりや……」

外から車のクラクションが鳴る、ウチはいっちゃんの頭をそつと膝からどけて起こさん様に立ち上がり外を見る。外にはゾンビをふっ飛ばしながら二台のトラックがヒルズめがけて突っ込んでくる様子が覗えたんやてちょ!!あないなスピードで突っ込んだらヒルズのシャッターが!!

ドガーーーーンッ!!!!!!

トラック二台はヒルズのシャッターに衝突、そしてトラックの荷台から東城会の極道と思われる人達が回りに集まって来たゾンビ達に一斉射撃を食らわせる。

「会長!ご無事で!？」

「もう大丈夫です!!」

トラックに乗って来た極道達はそう言っではるが…アカン！射撃が下手すぎや！

「なんじゃこいつら！？」

「死ねえ！！」

「バカな……これじゃ奴らが入って来ちまう」

あずにゃんがそう言っで深刻そうに言う、トラックの衝撃でひしゃげシャッターに大穴があいてゾンビ達が入ってくる。

「おい不味いぞ！入って来ちまってる！」

「……………仕事増やしてどうすんねん」

「真島さん……………！」

「クククツ…やっぱ東城会はアホばかりや……………大好きやで」

ごーちゃんはホンマに荒行大好きっ子やなあ…まあそこがごーちゃんらしいんやけど、

「同感です」ジャキッ！

「せやな」

ま！ウチらもそうなんやけど！ダイちゃんは散弾銃片手に一階へと下りて行った、ウチも続いて拳銃を持って行く。

「ん？真夏ちゃんあれはどうしたんや？」

「あれって？」

「ほら…なんやったかなあ、あのビリビリやのうて…スタンガン見たいな奴」

「ああそれは今充電中で使えのや、せやからこれっこうてやらなあアカン。まあこれだけでもやれへん事は無いんやけどな」

「さよか」

ウチはごーちゃんと話終えて下に行く、クッ！もうしたは占領されてるんか！！しゃあない…的確にドたま撃ち抜いたるわ！

「悪いんやけどもういっぺん死んどけ！！」

ヒルズでの第二回攻防戦が始まりよった……

オマケ・天啓・「サンドコンボの極み」
テンケイ

ウチ（今は十五歳）は神室町を歩いているとバイクに乗って騒いでいるカップルを見つける。

「ん？あれは……」

「マサ！早く行こうよ！」

「おう！飛ばして行くぜ！」

バイクを唸らせ、走ろうとした矢先、

ツルッ

「あ」

運転手の男の指がバイクのブレーキから滑らせ、バイクは急発進する。

「のおおおおおっ！！??？」

「きゃあああああっ！！??？」

そしてバイクは前輪を上げて持ち上がり、二人とバイクは一回転し

た後……

男は地面と後ろにしがみ付いていたヘルメットの女性に挟まれる様にノーヘルの男の頭部に直撃し……

「ガハッ！」

男は落ちた。

「……………！、ヒラメイカ！」

真夏は木のまな板を取り出し、そこに、

「フンッ！…！」

ドンッ！と粘土を乗せてこねる。

「フッ！ホッ！ヤアッ！」

粘土を捏ねてどんどん形を作り上げる。そして！

『天啓が……………！』

ラブシャインの粘土が出来上がった。

「……………むうっアカ〜ン」

ポイツとその粘土模型を投げ捨てる真夏、天啓失敗！

テイク2

「閃いた！」

またまな板と粘土を取り出してこねあげる真夏、

「……………我、天啓を得るや！」

そう言つて天高く出来あがつた技の粘土模型を掲げる真夏、思いついた天啓は……………

相手に突撃し、頭を掴んで膝打ちをした後にそのまま後ろに落とし地面へと相手の頭を膝で叩きつけるサンドコンボの極みが生まれた。

「……………あれ？ウチは誰にこの技を使えばええんや？」

神室町のアイドルになっている真夏に、チンピラや極道達は喧嘩売りにくるどころか普通にアイドル目当てで近づいてくるだけであり喧嘩に発展しないのである。

「意味無いやん！！！」

天啓、ある意味失敗！！

十八話や！「東城会はホンマにええなあ！」（後書き）

真夏「アカン…ウチ天啓得ても誰に使えば……」

一夏「そ、そのうち見つかるよ（願わくば、一生出てこないでくれ！）」

真夏「実際やつて見たいんやけどなあ……」チラッと一夏を見る

一夏「へ！？お、俺は無理だよ！？」

真夏「ええ～……ケチ」

一夏「ケチの問題じゃないよ……」

作者「なんて言うか…皆さんの技ってえげつない物ばかりですよね…なんででしょう？」

十九話「ユーちゃんばかりズルイ！」（前書き）

真夏「ユーちゃんの小説まだかなあ…早よ見たいわあ…」

一夏「そう直ぐにアイディアが出る訳無いだろ？」

DD「作者の最新速度が異常なだけだよ」

二階堂「せやな」

作者「ここぞって時に出ますね…お二人さん」

十九話「こーちゃんばっかりズルイ！」

「どうなつてんじゃこりゃあ？」

わしは真夏ちゃんに頼まれて近くのポップ店へと足りない物を調達しに行つてたんやけど……

「なんで真夏ちゃんと兄弟が戦つてんねん？」

「おー！トラちゃんお帰り！」

「よお兄弟！もうパーティーは始まつてるでえ！」

パーティーつて……んな呑気な事言つとる場合か！
わしは両手に持ったポップ店のビニール袋を捨てて拳銃（六代目から貸して貰ったんや）を取り出し兄弟達に加勢する。

「真夏ちゃん、ヒルズにいる人達は無事なんか？」

「平気や、下の奴らはウチが片付けたしいっちゃんも今頃寝てるはずや後はこいつらの注意を引いてバリケード作りの形成の時間を稼ぐだけや」

「さよか」

ほんなら……こいつらを成仏させなアカンな、
わしはまた人殺さなアカンのか……

その時不意に手に柔らかな感触が伝わりわしは下を向くと、

「真夏ちゃん？」

「トラちゃん平気か？」

真夏ちゃんがわしの手を握って心配そうな顔を浮かべる、

……ふう、五歳児に心配されるとは、わしも年を取ったかのお。

「平気や真夏ちゃん」

「でも……」

「今回は多くの命が掛つとる……せやから、わしら皆を守らなアカン」

「トラちゃん……」

そや、今わしは命を守る為に銃を握つとる。六代目、幹部達、兄弟、そして真夏ちゃん、

「迷わへんよ、笹井の親父から仁義と覚悟をもらつてゐるからな」

「……さよか、なら……派手に行くでえ！！」

真夏ちゃんは掛け出し近くにゐるゾンビを確実に倒して行く、真夏ちゃんってホンマに五歳児なん？

と言つかなんでこないにいんねん？まさか奴らはワシらの匂いや音を感じてこつちに來たんやろか……

「アカン……考えても答えが出えへん」

今は考えてる暇はなさそうやな…とにかくヒルズの周りのゾンビ共を蹴散らさなあ。

わしは再度拳銃を奴らに向けて撃つ、二十六年前の事件を思い出しそつになりそうやけど…今のわしにはへでもあらへん！

「守るもんが多すぎるからのう！」

「うひゃひゃひゃひゃ！ええのう、兄弟と背中合わせて戦えるなんて夢の様や！！」

わしは兄弟と背中を合わせゾンビ達を一掃する。今度は後悔の残らない戦いにする！絶対や！！

視点・「織斑千冬」

「遅い……」

一夏はいつたい何をやっているのだ！姉を心配させて！真夏のところに行くと言ったきり帰ってこない。

私は心配になって電話をかけてみたが一向に繋がらず、真夏にも電話はして見たが圏外だった。

まったく、この頃の子供はキャバクラやホストクラブに出入りしすぎだ！

だが私が怒っても一夏が帰ってる訳でも無くとりあえず真夏の父親である龍司さんに携帯を掛けた。

「……………もしもし、織斑です」

『千冬嬢ちゃんか』

うむ、龍司さんには繋がった様だ。よかった……私は一夏がそっちに行つて無いかを聞く、

「龍司さん、一夏がそっちに行つてませんか？」

『なんや帰つとらんのか？』

「はい、そちらで遊んでいるかと思ひまして……………」

『こつちには来てへんなあ……わしも真夏を探しに神室町へ来とるんやけど……なんや警察の検問やとかで行けへんのや』

「検問？」

神室町で何かあったと言う事が……また真夏と一緒に厄事に巻き込まれなきゃいいが……

『よう分からんけど、神室町にゾンビが現れたっちゅう話や』

「ぞ、ゾンビ？」

『せや、ゾンビや』

龍司さん、からかっているのだろうか？……いやあの人がからかうとか想像出来ない、というよりかしないと思う。それじゃあ本当なのだろうか？まああのウサビツチならゾンビを作れそうだが……

（アイツがそんな事はしない……一体誰がゾンビを？」

『どうかしたんか？嬢ちゃん』

「ああいえ、なんでもありません……それで、検問で神室町に行けないと？」

『そうなんや、しかたあらへんからコイツっこう思つてんのやけど……』

電話越しからキューーンとかガシャガシャと何かが変形する音がする……まさか！！

「り、龍司さん！いくらなんでもそれは……」

『でもものう……真夏や一坊が向こうにいるかもしれへんし……』

「わ、私も向かいますからそこで待っていただけますか？」

『嬢ちゃんもくるんか？』

「はい、一夏が心配ですので」

『わかったで待つとるわ』

「お願いします」

そう言つて私は携帯を切り、急いで仕度をする。とりあえず木刀と
かを持つていこう後両親に――

「……………いやこの頃帰つて来てないから言つ必要はないか」

私と一夏の両親は家にはあまり帰つてこない、音信不通も珍しくは
無いのだ。

「頼りになるのは私だけか……………」

大事な時に両親は一体何を！

だが私は、この後両親が二度と帰つてこないとは思ひもしなかった
……

「うつん…あれ？まなちゃん」

寝ていた一夏は起き上がり、周りを見渡すと避難してきた人は皆窓際へと移動していた。

「？、何かあったのか？」

一夏は起き上がり皆が見ている物を確認する為、窓の外を見て見ると……」

ピンッ！ポイツ……ドゴオオオオンッ！！！！

「んな！？」

真夏と真島、そしていつの間にか帰って来た冴島がゾンビ達と戦っていた。

ちなみに今の手榴弾を投げたのは真夏である。

「ど、どういう事だ？どうしてまなちゃん達が！？」

一夏は混乱していた、少したってやっと正気を取り戻しライフルを担ぎ急いで一階へと下りる。

「まなちゃんどうして起こしてくれなかったんだ！」

走りながらも愚痴る一夏、そして一階に着き出口へと向かうと東城会の幹部らが急いでバリケードを築きあげていた。

「大吾さん！」

「！、一夏君、起きたのか」

「はい、これはいったい？」

「悪いね…仲間がはしゃぎすぎちゃって」

「……あゝ、納得です」

一夏は苦笑いする、六代目と話していると幹部の一人が叫ぶ、

「六代目！バリケードが完成しました！」

「御苦労！皆はバリケードを守ってくれ、私はまなちゃん達の所に行く」

「で、でも！ゾンビの数が多すぎて……」

「心配するな、生きて帰る」

「六代目……お気をつけて！」

そう言って幹部は頭を下げ部下を連れてバリケードの道を開ける。

「大吾さん、お供します！」

「一夏君？」

「まなちゃん達が戦ってるんです！一人だけ何もしないのは嫌なんです！」

「……俺の側から離れるなよ？」

「はい！」

一夏は六代目と共にバリケードを越え、戦場へと向かった……

視点・「真島吾朗」

「クソが！」

わしは噛んできた老ゾンビの頭を殴り吹き飛ばす、クソ！噛まれて

しもうた！

「どないしたごーちゃん！？」

「！、な、なんでもあらへん！気にすんなや！」

「で、でも……」

「！、真夏ちゃん後ろや！！」

「へ！？」

真夏ちゃんが振り向いた時には遅かった、ゾンビはもう真夏の目と鼻の先まで飛び込んでいてわしのシヨットガンじゃ真夏ちゃんまで吹き飛ばしてまう、とその時じゃった。

ズガンッ！！

銃声が響き、真夏ちゃんの目と鼻の先にいたゾンビは頭を撃ち抜かれて吹き飛ばされおった。こいつは……

「兄弟後ろじゃ！！」

「！？」

わしが考えているとわしの後ろからも飛びかかってくるゾンビが現れるじゃがその時も誰かがゾンビを撃って危機は回避されたんじゃ、

「真島さん、三人でおいしいとこ持っていく気で？」

「まなちゃん平気!？」

そう言つてこちらに来たのは六代目と一坊やった、へっ!このぐらい朝飯前や!いや今は夜やから夜飯前か?

「ハッ!なんや今頃気づいたたんかい？」

六代目はわしの背中に回りバリケードの形成は完了した言つた、ほならこれぐらいでお開きにしようか……

「六代目死なわけにはいかへんしなあ…真夏ちゃん!兄弟!六代目と一坊を連れて離脱するでえ!」

「「おう!」」

「!、あれつて……」

一坊が何かに気づく、それはゾンビの奥のマンホールからライトの光をわしらに当てて何かを合図している様やった。

「真島さん」

「ああ…野郎ども着いてきい!」

わしは六代目と兄弟、そして真夏ちゃんと一坊を連れて光を当ててくるマンホールの男の元に走るが……

「な、なんだコイツ!？」

「い、今見えなくなつたで!？」

「光の屈折を利用して消えてる? いや反射を利用してはるのかな？」

「なんや消えたり出てきたりする奴がわしらの前に出て来よつたわ、
なんやアレって真夏ちゃんに貸してもらうたゲームの化けモンに似
とるなあ。確か…リッコーとか言つたか? なんや女の名前見たいな
名前やな、まあええわおもしろい奴がまあた出寄つたんやから！」

「ええでええでえ、ちようど食い足りんかつたんや」

「俺もそう思つたてたところですよ」

「上に同じくや」

「わしもや」

「もう勘弁して……」

「一坊は根性が無いのう、まあしゃあないか…さてコイツの相手は……」

「六代目、兄弟、真夏ちゃん、一坊! ザコどもは任せたでえ!」

「真島さん、また良いとこどりだ!」

「ホンマずりいわ!」

「貸し一つやで!」

「またこんな人数を相手に!？」

わしはザコども六代目達に押し付けて化けモンを対峙する、ガツ力
りさせんでくれや?行くで!

オマケ・「使いたくないわあ…この極み…の巻!」

「ん?あれは……」

ウチの向こうにヤクザがひ弱そうな青年を追い詰めていた。

「おいこら…ぶつかつといて詫びも無しかああ!？」

「ひいい!？す、すいません!！」

青年は必至にヤクザに謝まತ್ತるが、ヤクザは許そうとはせず青年
を壁際で挟むあないに謝つとるのになんて血も涙も無いやつちゃ!

「どうやら痛め付けねえと反省しねえようだなあ……」

「ご、ごめんなさい！許してくださいい！！」

そしてヤクザが殴りかかる。

「ひ、ヒイイイイツ！！??」

青年は頭を抱えて伏せた後ヤクザの拳は空を切りそのまま拳を壁に打ち付けてるう。

「イツテエツ！？」

そして痛がるヤクザに急にヤクザの悲鳴が聞こえた青年は顔を上げて驚いくとちょうどその頭が……察してなあ……まあヤクザの息子に当たったんよお、

「ハウツ！？」

ヤクザはその痛さに飛び上がり上に設置してあった店の看板に……

「ひでぶっ！！」

頭をぶつけ、気を失った。

「……………！、閃いた！」

またウチはまな板を取り出しそこに粘土を置いて捏ねて造形する。

「んしょっ…んしょっ……」

そしてどんどん形作られはった。

『天啓が……来た!』

そして出来あがった模型を片手に持ち天高く掲げ満足する、うゝんええ感じや!

ウチが編み出した天啓……それは相手をしかけさせ来た所で腹に一発与えた後に……息子を掴みそのまま持ち上げて天井か上に設置されとる看板へと叩き上げる天上頭突きの極み、我、天啓を得るや!

「…………ウチい…掴めるんかなあ……」

お、おとんのは見た事あるんやけど…む、難しいで……

「あんま使いたく無いわあ……」

自分で作つといてなんやけど……

オマケ・「真夏のオリジナル古技流」

「死にさせええ!!!!!!」

レディースの一人が真夏に木刀を上から下へと振り下げ真夏へと切りかかる、そして真夏は二つの警棒でそれ下へと受け流し木刀を地面へと突き刺せた後その木刀に乗りレディースの後ろへ飛ぶと、

「はああっ!!」

真夏は飛ぶ力を利用し警棒で身を回転させながら連続打ちをする。

「グハアッ！！??」

レディースの女は回転の乗った連続打撃で背中を強打され地面へと沈む、

これぞ相手の攻撃を防ぎ後ろに飛び回り回転切りを放つ技、自速天回切り！

十九話「ごーちゃんばかりズルイ！」（後書き）

真夏「ごーちゃんはホンマに良い所取りやなあ…お仕置きや必要か
もしれへん」

真島「！！？？」

大吾「あ、あの真島さんが！？」

冴島「ごつつ震えとる！？（兄弟…そないに怖いんか…）」

千冬「私は龍司さんと行動するのか？」

作者「どうでしょう？ストーリーの進行状無理かん、あ、待って千
冬さん！古技流は止めて「ズバッ！…！」……」

龍司「死によったな…アレは…」

二十話や！」「サイのおっちゃんってどこからネタ仕入れてんやろ？」（前書き）

遅くなりました。すんません！

二十話や！」「サイのおっちゃんってどこからネタ仕入れてんやる？」

「全然減らへんなあ…神室町に入ってこんなんおったっけ？」

そう言いながら大吾から受け取ったグレネードランチャー（火炎弾）を再装填し、ゾンビが密集している辺りに発射してゾンビの大軍を焼き払う真夏と。

「昨日は開催セレモニーとかでお客や見学者が多かったからな、他の町から来た人達とかが多いんだろう」

「

真夏に話しかけながらワンショットでゾンビをツークルする一夏、

「食らええ！！」

冴島は雄叫びを上げながらバイクを振り回してゾンビを蹴散らして行き、

「こんな大事な日に大事件が起こるなんて！！」

散弾銃をぶちまけながら愚痴る堂島、この四人は真島が化物アラハバキを倒すまでの時間稼ぎをしていた。

「うゝんもうそろそろごーちゃんが片付け終わってるはずなんやけど……」

真夏はチラッと苦戦しているであろう真島が戦っているだろう場所に目を移す、

「キツヒビヒビヒッ！！また消えたで！ホンマおもろいやつちや！！」

案外、いや逆にイキイキと化物と戦っていた、真夏は羨ましそうに溜息をつく。

「あつちに入りたかったわあ……」

「あんなのと戦うなんて洒落にならないからな？まなちゃん」

「とりあえずこつちを片付けないと……」

「死にさせええ！！！！」

冴島の投げたバイクがゾンビ共を蹴散らし、その衝撃でバイクに引火して大爆発を起こす。

「豪快やなあトラちゃん」

「ホントだな、てどんどん増えて無ないか！？」

「外のシャッターが壊れたままなんだ。だからいくら倒しても湧いてくるってことか」

「そうらしいなあ……」「ギシャアアアアアアアアアッ！！！！ん？」

真夏は甲高い音を聞いて真島が戦っている方へと視線を向けると…

「なんやもう終わりかいな… あっけないやつちゃ」

真島が化物を倒し、つまんなそうにして倒れている化物を見ていた。大吾もそれに気づき真夏達にさっきマンホールからライトを照らしていた人物の方へと向かうよう指示する。

「皆！真島さんが奴を倒した！向かうぞ！！」

「はい！」

「はいなー！トラちゃん終わりやでー！」

「おう！」

大吾は皆を連れてマンホールへと向かう途中真島と合流してマンホールへと向かうのだが……

「グ、グルルルル……」

「！？、コイツまだ生きて……」

一夏が気づいてライフルを向けるがそれより先に真島に飛びかかる。うとするアラハバキが真島に強襲した。

「死んだふりかいな！」

「兄弟！！」

「真島さん」

皆が銃を向けるが真島とアラハバキの距離はもうほとんど無く、真島はアラハバキに銃口を向けるが間に合わない。その時……

「させへんで!!」

あろうことが真夏がアラハバキの背中に飛びかかりそれに驚いたアラハバキは急停止した後背中にひっついていて真夏を体をゆすって振り落とそうとする。

「まなちゃん!!」

「なんちゅう無茶を!!」

「まなちゃん!!」

「くそ!わしの銃じゃ真夏ちゃんも撃つてまう!!」

真夏は必死に離さんし、アラハバキは飛び跳ねてヒルズの外へと向かってしまう。

一夏達は撃てないままアラハバキと真夏が外に出て行くのを黙って見ているしかなかった。

「まなちゃん!!」

一夏は追いかけようとするが真島がそれと止め、一夏を腰で抱きかえながらマンホールへと向かう。

「離してください!!」

「ドアホ!今の状況じゃあわしらも危ないんじゃない!!」

「この人数を相手に戦えない！一旦引かなくては！」

「でも！！」

「一坊！真夏ちゃんならまだ生きとる！今はここから逃げるんだ！」

そう言つて大吾達は一夏をおぶつてマンホールの穴の中に入り難を逃れた、一夏は真夏の名前をアラハバキと外に飛び出した空へと呼び続けた…………

視点・「郷田真夏」

「ちょ！？これきつい！！」

ウチはごーちゃんを守る為にアラハバキに飛びかかり守つたはええんやけど今は化物でロデオをしているところや。

「うお！ちょ！暴れ！ん！なあ！！」

背中に乗っとるウチを振りおとそうとする化物にウチは沸々といらつく。

「ああもう！！大人しくせい！！」クルクルチャキツ！

ウチは腰からバタフライナイフを出して化物の頭めがけて……

「チェストローイ！！」

サクッ

「！？、ギシャアアアアアアアアアッ！！！！」

化物のドたまにナイフを突き立て化物を苦しむ、どや！ゲイちゃんに教えてもろうたナイフ裁きを！

そして化物は前のめりに倒れ、ウチは投げ出される様に地面を転がる。

「プギヤツ！？………いつつう……」

うゝ…膝擦り剥いてもうた…もう暴れん坊は將軍だけで結構や！ウチは立ち上がり化物が息絶えた確認した後にナイフを抜いて腰にしまう。

「ヒルズから出てもうたなあ…今戻っても皆おらへんやろうし、どないしよう？」

ウチはとりあえず化物が七福パークまで来てもうたからこのまま隔離エリアから出る事にした。

「ついてないでえ…ホンマ」

そう言ってもしかたあらへんけど、ウチは隔離エリアから出て行つた。

「はあ…外は平和やなあ…さて、ホンマにどないしよう」

ヒルズの戻っても中に立てこもってる人しかおらへんし、戻ろう思うてもあの数のゾンビを相手にするんわきつついで……

「……そや！さっきマンホールから顔を出していた人って賽の河原のホームレスの人やん！」

それやったら確かいつちゃんとかよく昼間遊ぶ児童公園から行けるはずや！

ウチは直ぐに目的地に向かう為、走り出す。

「確か合言葉いらへん言うてたなサイのおっちゃん」

なんでウチだけいらへんのやろ？もしかして子供だから覚えられへん思つたんかな……

（むう…なんや子供扱いされた気分や…）

ま、ウチはまだ子供なんやけどな！

ウチは千両通り北から泰平通り東に行き、その後ピンク通り北へ進

んで七福通り東を抜ける。

「空は真っ暗やなあ…早よいかな!」

七福通り西に辿りついたウチは児童公園へ足を運ぶ、

「このマンホールやったな……」

ウチは公園にあるマンホールへ近づきノックする。
少したってからマンホールから声が聞こえた。

「誰だ?」

「ウチやウチ、真夏やで」

「ん?まなちゃんか……ちょっと待ってろ」

そう言つてマンホールの蓋が開けられ、中からホームレスの男の人が出て来た。

「福山さんか、中に入ってええか?」

「ああいいぞ旦那もまなちゃんを心配してたぜ?」

「心配かけてえろっすんませんなあ……」

「いいってほら、早く入った入った」

「お邪魔しまゝす」

ウチは中に手招きをされ中に入り、蓋を閉めた。
賽の河原へ行くのは久しぶりやなあ、ディーラーやったんは何時ごろやる？

視点・「織斑一夏」

俺は大吾さん達に連れられここ賽の河原に着いた、道の途中でかなりのゾンビ達がいんだけど何とか切り抜けてここまで辿りついた。だけど俺は……

「まなちゃん……………」

「一夏君……………」

「一坊……………」

「……………」

冴島さんと大吾さんが床で頂垂れている俺を元気づけようとしてくれているけど、俺はまなちゃんを置いて逃げてしまった事を酷く悔んでいた。

「おい、一坊何時までもクヨクヨせんとらんとしゃきつとせなあ」

「でも……」

「真島さん、一夏君はまだ子供です……」

「兄弟……一坊にはまだシヨッキングな出来事やったんや、そないに急がんでもええんやないか？」

「せやけどなあ……」

「……いかなきゃ」

俺は立てかけてあったライフルを手に取り立ち上がる。

「一夏君？」

「一坊？」

「どないしたんや？」

「……まなちゃんを迎えに行きます」

俺は歩きだし、来た道に戻る。

「い、一坊！？向かえにつて、アホか！一人で行く気か！？」

「はい」

「無茶や！」

「一夏君！止めるんだ！」

「だからつてここで悔んでも無意味です…それに」

「それに？」

「まなちゃんを守るつて約束したんです…！」

「一夏君………冴島さん」

「な、なんですか？」

「一夏君の護衛を…お願いします」

「六代目………」

「大吾さん？」

大吾さんはふううと息を吐き仕方ないと言う表情で俺に言う。

「もし一夏君にもしもの事があつたらまなちゃんに顔向けできないからね………」

「大吾さん………」

「フッ…せやな」

「そやなあ…」

皆もそれもそうだなって顔をしている、そして冴島さんが俺に近付いてきて。

「ほな、いこか？一坊」

「……はい！」

俺と冴島さんは歩き出す、まなちゃんを救う為に……

「行きおつたな……」

「ええ…まったく、強い子です。一夏君は……」

真島と大吾は一夏達の後ろ姿を見ながら感想を吹く、

「せやなあ…もう見えへんところまで走って行ってもうたわ…」

「そうですねえ…」

「せやなあ……」

「「……………んう？」」

真島と大吾は声が聞こえた後ろ下を見ると…………

「……………な、なんでここにおんねん……」

「なんでって…ここに皆いるう思うてきたんやけど？」

「ぶ、無事だったのかい？」

「当たり前や、ウチが死ぬう思うたんか？」

真夏はさも当然と言うような感じでその場にいた、大吾と真島はこればかりは驚く。

「……………そうだね」

「全然想像も出来へんわ……」

あの化物と一緒に外に飛び出したのに平気な顔してそこにいるのだ

からもう異常である。

そして大吾が急に思いだした様に声を出す。

「そ、そうだ！―夏君！―夏君達を呼び戻さないと！」

「せ、せやけど、もう外の入り口近くまで来てる頃やで？」

「？、なんやなんか買い物に行つたんやないの？」

「君を向かえにいつたんだよ――！」

「お前を迎えにいつたんや――！」

と突っ込みを入れる真島と大吾であつた……

オマケ・「その頃城戸ちゃんは……」

「気持ちワリイ……」

城戸はドラムカンで無双し続けること早三十分……冴島とやり合った男でも高速回転し続けるドラムカンでも限界があったようだ。

「クソッ……もういいっての！ドラムカンの凄さは分かったから早く抜けてくれ！」

そう言つてモゾモゾ動くか全然抜ける気配が無い事にイラつき、暴れても見るもビクともしない。

「この！抜ける！抜けてくれ！抜けるやこら！」

さらに体を揺さぶるが抜けない、どうしようかと考えていると声を掛けられる。

「何してるんだ？お前……」

「ああ？……て、兄貴！？」

「おつ」

そこには金村興業の組長、新井がいた。

「お前町中で何ドラムカンに入って遊んでいるんだ？」

「え、え〜と……ゾンビがいて……」

「ゾンビ？何処にいるんだ……」

「い、いや直ぐそこに…あれ？」

城戸は辺りを見回すと見慣れた平和な神室町が映る。

「あ、あれ？ゾンビは？破壊されてる筈じゃ……」

「何を寝ぼけているんだお前は…行くぞ仕事だ」

そう言つて新井は城戸の首根っこを持ち上げてドラムカン事引きずる。

「ちょ！？あ、兄貴！止めてくれ！そのまま引きずらないで！上半身と下半身がお別れしちまう！」

「こっちは忙しいんだ、遊んでいる暇はないぞ？」

「い、行きます！行きますからは、離し！あ…アッーーーーー！
ーーーーー！」

城戸は新井に引きづられ、ドラムカンには下半身を持っていかれそうになりながら金村興業に向かったとさ……

「二十話や!」「サイのおっちゃんってどこからネタ仕入れてんやろ?」(後書き)

千冬「これがすれ違いか……」

龍司「一夏も運がないのう」

作者「千冬の姉さんも運が無い様に思えます……」

二十一話や！「鼻折ってなきゃええんやけど……」（前書き）

真夏「オーズさんのゆうちゃん女装、めっちゃよかったわ！やっぱケツk「バキッ！」「ごふう！」

第「しつこい！」

一夏「……………」

龍也「まあ…頑張れ」ぼんぽんと手を肩に乗せる。

作者「男の娘は正義です。はい！」

二十一話や！「鼻折ってなきゃええんやけど……」

一夏と冴島が賽の河原を出て行ってから数分が経った頃に真夏が無事帰還、

冴島と大吾が一夏達に連絡を取ろうとするも県外であり真夏の無事を伝える事が出来なかった。

「じゃあない、とりあえず今は花屋に会いに行こうや」

「そうですね……」

「なんかホンマすんません……」

いってと言いながら大吾達は歩を進める、そして一番大きい屋敷に入ってしまった。

「花屋のおっちゃんの家ってホンマデカイわあ……」

「せやなあ……無駄にするんわ脂肪だけにしてほしいわ」

「真島さん……」

三人が話しながら扉を開けるとお辞儀をしている女性が目の前に現れる。

大吾はその女性を見て驚く、

「！あなたは、確か峯の秘書だった……」

「片瀬のおばちゃん!!」

ズルツと片瀬と言う女性はズッコケた。
気のせいだろうかこめかみに青筋が出来ている。

「わ、私はまだ……！」

「あー、そう言うんは後にしてくれへんか？だーれもアンタの年齢
聞いとらんし、さっさと花屋に案内してや」

「っ……、わかり、ました……」

片瀬はプルプル震えながらも仕事を全うしようとおしこらえた、
そして真夏は大吾に耳打ちする。

「あのおばちゃん、ここで働いてたんやな。しらなかったわ」

「よく出入りしてたんじゃ？」

「何時もおっちゃんが一人で会いに来てくれはったから気づかんか
ったわ」

「そうなんだ…それとまなちゃん」

「？、なんや」

「あの人はまだ若いと思うからおばちゃんは不味いと思うよ？」

「どういつこっちゃ？」

「……とりあえずそれは禁句ね？おばちゃんに見えても言っちゃダ

メだよ?。」

大吾がそう言った瞬間、前から強烈な殺気を感じ大吾は背筋を凍らせる。

よく見ると片瀬が血走った目で大吾を見ていた。大吾は命の危険を感じ目をそらした。

「地獄耳やな」

「そ、そうですね……」

大吾は小さくなった、そして立派な机があるところまで案内されると突然大吾達と共に床が下がっていく。

「これぞ秘密基地、やな」

「ホンマに手が込んで……」

「あはははは……」

そして下に着くと大吾の目に複数のモニターが見える。

「こいつは……」

そうして驚いていると真島と真夏は椅子に座ってモニターを見ている男に話しかける。

「久しぶりやな……花屋」

そう言うと椅子に座っている男がフンツと鼻を鳴らす、

「お久しぶりです花屋さん…ゆつくり挨拶したいところですが……」

「そうも言ってられん状況ですな」

そう言つて花屋は振り向く、その時真夏が走り出し。

「おっちゃん！」

ポヨヨンッ

「おっと」

花屋のお腹に抱きついた。

「お久しぶりや！」

「ああ、真夏も無事だったか」

花屋は自分の腹に乗って来た真夏の頭を撫でる。

「えへへっ」

「……………」ピキピキッ

「ま、真島さん、こらえて……」

花屋は一通り真夏の頭を撫でると真剣な顔をして大吾に話す、

「さて、真夏…少し六代目と話があるから席を外してくれ」

「えゝ？ウチ抜きでー？」

「すぐに終わる、ホームレスの奴らに無事な姿を見せてやれ」

「はあゝい」

そう言われた真夏は花屋の腹から下りて上の階へと行った。

視点・「郷田真夏」

「ホームレスの皆はんは無事かな？」

そう言いながら外に出ようとすると後ろから呼びとめられた。

「なんでウチを置いてったあ!？」

「おおおおおお……」

駿ちゃんは蹴られた顔面と打った体の激痛で喋れへん様やった、せやけどウチはまくしたてる。

「応えんかい!!」

「む…むちゃくちゃだ…」

「あ”あ”!？ウチは駿ちゃんの心配聞いとるんや無いんや!なんでウチをおいてったんや!？」

「そ、それは危ないからで……」

「ウチを心配してくれはるんわかるけど、だからって勝手はいやや!」

「い、ごめん……」

駿ちゃんは鼻血を出しながら謝る、うゝん…ちょっとやりすぎてもうたなあ…

「あゝ血い出てもうた?堪忍や…」

ウチはポケットからハンカチを取り出して駿ちゃんの鼻に当てる、あ、アカン!直ぐにハンカチがバラ色に!

「ど、どないしよう、止まってくれへん！」

「だ、大丈夫だよ、直ぐに止まるから」

「で、でもお……」

ウチは涙目になりながら駿ちゃんの鼻血を懸命に止めようとするも、全然止まってくれへん……

「直ぐに収まるさ、だから平気だよ」

「ううう……ホンマにゴメンな？ 駿ちゃん」

「！、だ、大丈夫だって！ な？」

「……うん……」

「……そ、そうだ！ お詫びにバッティングセンターに連れてってあげるよ！」

「バッティングセンターに？」

「そ、後で真島さんも誘おうと思うんだけど、いいかな？」

「うん、ええよでもなんで急に？」

「ううんちょっと面白い事がありそうだから、かな？」

「ふーんわかったで！ それで何時行くんや？」

「真島さんが来たら直ぐに」

「わかったえ」

駿ちゃんは立ち上がりスーツを整える、せやけど……

「駿ちゃん……」

「ん？なんだい」

「スーツ…血だらけに…」

ウチが顔面蹴ったせいで鼻血を拭きながら倒れたせいでスプラッタ
ーな格好になってもうた。

「……まあ、平気さ」

「見る人は平気や無いって……」

ところ変わってここはヒルズ内の避難している人達がいる所……

「俺と同じくらいの女の子見ませんでしたか!？」

「い、いや見て無いな」

「そう、ですか……」

「一坊…真夏ちゃんは大丈夫なんやないか？あの子の事やからひよっこり帰ってくるんやないのか？」

「で、でも……」

一夏は真夏が心配らしく、まだ探していた。真夏の使っていた武器は見つかったが真夏本人は見つかってはいなかった。ちなみに一夏が真夏の武器を預かっている。

冴島はかなりの時間ヒルズの周りや中を見回って少し疲れていた。

「とりあえず今は帰ろうや、兄弟や六代目も心配してる筈や」

「……………はい」

一夏はガツクリと肩を落として帰る事にしたが……

「……………別の隔離エリアにいるかもしれない」

「なんやと？」

「冴島さん！俺、向こうの隔離エリアに行ってきます！！」

そう言つて一夏は走り出し、外へと行つてしまった。

「ちょーい、一坊！……行つてもうた。はあ……まったくアイツの真夏ちゃんへの想いは負けるでえ……」

冴島はやれやれと言いながら一夏を追いかけて行つた。

オマケ・「真夏の交流奥義」

「クツ！コイツ中々やるで……」

真夏（注：十五歳）は口から出た血を袖で拭き取り相手を睨む、相手は相当の格闘家の様で真夏も苦戦していた。

「行くわよ！」

そう言つて相手は真夏に接近する、すると横から真夏に声を掛けられる。

「真夏！！」

「ほえ？」

そこにいたのはポップ店のアルバイト達也が真夏に向かって何かを投げる。

パシッ受け取ったそれは……ワインボトルだった。真夏はそれを思いつき相手の頭に振りかぶり、

「おりゃあ！！！」

バキヤアンツ！！

「ぐはあ！！！」

相手はボトルで殴られ、割れた拍子に目に入ったワインに染みて苦しんだ後真夏はボトルの口で後ろを向いた相手にの……

「チエストー！」

「ギイヤアアアアアアッ！？！」

以下省略、を突き刺し、相手はたまらず飛び上がった後に地面に沈んだ。

「どや！」

ちなみに、バリエーションは秋山と同じです。

二十一話や！「鼻折ってなきゃええんやけど……」（後書き）

真夏「は、鼻が…ウチの鼻が折れた…」ポタポタと鼻血が出る。

秋山「ありやりや…大丈夫かい？」

真夏「ずずずー！大丈夫や！あ、それと昴ちゃん！ウチとは友達やのうて今から親友や！」

作者「ウチの真夏ちゃんをよろしくお願いします。昴さん」

二十二話や！「ウチかて…苦手なモンはある！前半」（前書き）

遅くなっちゃった…風邪引いちゃったし…続けられるかなあ…

二十二話や！「ウチかて…苦手なモンはある！前半」

ここは神室町の児童公園、そのマンホールから出てくる子供がいた

……

「はあ…無事なのはわかったけど、無事なら連絡くらいくれよ。まなちゃん……」

「わしらとんだ骨折り損やな……」

一夏と冴島は真夏を探しに別の隔離エリアへ行った後、賽の河原へ戻り真夏の安否を確認出来た。

何故分かったかと言うと真夏と仲のいいホームレスがさっきまで此処にいたと言っていたからだ。

「まなちゃん……」

（一途やな…）

と呆れながら思う冴島であった。

とりあえず真夏が無事だと言う事が分かり、ここで待っていれば会えるだろう思い冴島は待つ事にした。

「まなちゃん……」

「……ホンマ疲れたわ…（歳かのお…）」

「なんや…えっらい店内はピリピリしとんなあ……」

「せやな」

真夏、真島、秋山はバツティングセンターに来て見るとそこには定員どころか客と呼べる人はおらず、黒服の男数人しかいなかった。

「おう、ご苦労さんやなあ」

「……………」

真島がそつ声を掛けるが男はこちらに視線を移すだけで喋らない。

「……………二階堂、どこや？」

（二階堂？確かおとんに会いにきた人も二階堂やった様な……？）

男はクイツと顎を上げてバツティング場の方へと向ける、そこには男が二人いた。

真島と秋山はバッティング場へと足を運ぶ、そして二階堂も気づき三人に声を掛けた。

「よう此処が分かりましたなあ！真島さん」

「アンタのごつつい体臭のお陰や！直ぐにわかったでえ！」

手をヒラヒラさせながら臭そうに歩く、真島。

（体臭って……そないな匂いしてたかなあ？）

と可愛く首をかしげる真夏、

（うわぁ……これはこの後嫌な予感が……）

やれやれと言った感じガツクリする秋山であった。

「……せつかく来ていただいたんですがねえ……アンタを相手にしとる程ヒマやないんですわ」

「連れへんのう……ノリの悪い関西人やなあ……」

「……………二階堂はん」

「……………真夏のお嬢ちゃん……」

真夏は前に出て二階堂に話す、

「二階堂はん……なして神室町をこないなヒドイ事をするんや？」

「……………」

「神室町の人達が何かしたんか？」

「……………」

「神室町の皆が、二階堂はんが来ないな事をするぐらいヒドイ事をしたんか？」

「……………」

「二階堂はんがどうしてこないな事をするのは分からへん……東城会や、近江連合とかの事だとゆうんわ分かる……せやけどこれはやり過ぎや！」

「……………」

「そりゃ……神室町の人達の中には悪い人もおる……せやけど……せやけど……！」

「皆生きとんねん……！」

「真夏ちゃん……」

「まなちゃん……」

真夏は泣きそうで、それでいて悲しそうな顔で二階堂に言う。

「二階堂はん……どないしてこないするんや！？答えて！！」

「……………それはお嬢ちゃんには関係ない話や」

「関係無くなんかあらへん！！神室町の皆は友達や！」

「友達…ねえ…」

「ポップ店のタツちゃんやさっちゃんも、金貸しの駿ちゃんも…マッポのまー君も…そして東城会の皆も！」

「……………」

「皆友達なんや！！この事件のせいで警察や自衛隊…東城会の幹部も…つつ悲しい思いをしたんやで…家族とも呼べる人を…人を…どないしてそんな簡単に奪えるんや？！」

「……………わしには関係あらへん話や」

「なんやとお！？」

「どれだけ俺の客が死ん…人達が死んだと思ってるんだ！アンタは

「！」

秋山が何か言いかけた気がしたが気にしない、ちなみに秋山の金を貸した客の多くが神室町にいた為未だ未返還だったりする。

「…………そろそろ話はしまいですわ……」

そう言つて二階堂は真夏達の後ろ上を見る、つられて秋山がその視線の先に目をやると……

「！、まなちゃん！真島さん！」

ドスウウンッ！！！！

「うひゃ！？」

「！？」

上からまるでカマキリの様な六本の腕を持つ巨大な化物が真夏達の後ろに現れた。

「そいつがお相手しますよって、堪忍してください」

「……………」

真夏は固まり、真島と秋山は銃を構え臨戦態勢に入る。その隙に二階堂と隣にいた男は姿を消した。

「びびっとんのか？」

「は、ははは……びびってなんか、いないっすよ?」

「ええ心がけや……」

真島はショットガンの弾を薬室に送る。

「行くでえ!!」

「おっしやあ!!」

そう意気込んだが、真夏は未だに固まったままだった……

「……ん?どしたんや真夏ちゃん」

「まなちゃん……?」

「……い」

「?」

「いや……」

「まな……ちゃん?」

真夏は化物を見た瞬間プルプルと震えだし目に涙が溜まっていく、
そして真夏は何かに耐えられなくなり……

「いやあああああああああああああ————!!!!!!」
虫いややあああああああああ!!!!!!」

真夏は真島の足にしがみ付き顔を埋めてへばり付く。

「ま、真夏ちゃん！？どしたんや！？」

「ハッ！？思い出した！そういえば俺がカマキリを取ってまなちゃんの見せたら大泣きして全力で花ちゃんにしがみ付いてたんだ！」

「どないしてそんな大事な事を黙ってたんや！？」

「いやだって人の弱みを言いふらすと駄目かと思ひまして……」

「ええい！どないするんや！？わしは足にしがみ付かれて動きにくいで！」

「ふ、ふえ……む、虫……虫いややあ……」

「ど、どうしよう……」

「と、とにかくや！わしが真夏ちゃんを担ぐからお前は前に出るや！」

「えええ！？そんな無茶な！！」

「文句言つとらんで早いけえ！」

「ゴフツ！」

秋山は真島に蹴られ、化物の目に出される。

「こ、コイツ、もしかして……」

秋山は化物の顔部分と思われる部分を見て絶句した。

「グルルルルル……………ポッ」

「ええええええええええ！？まなちゃん目当て！？」

秋山はまたも絶句する、まさかこの化物にそんな感情があるとは思われない。

（まなちゃん…君はフェロモンでも出しているのかい？）

はあっ…と疲れた目で化物を見る秋山、秋山の言った事は案外間違っていない……かも、

オマケ・「天啓って何人でやってもええんかな？」

真夏は今一夏と弾と組んでチンピラとケンカしていた。

「おらああ！！」

チンピラが一夏に殴りかかり、一夏はそれをかわして腕を持ちそのまま後ろに押し返す、

「はああっ！」

押し返されたチンピラは弾の所まで来て弾に後ろから手を回されてはがいじめにされた後チンピラの腕を背中に回し腕の骨を外す、

「おりゃ！！」

そしてチンピラを離して真夏に押し付ける様に渡すと真夏はチンピラの頭を鷲掴みにし、そのまま持ちあげた後思いつきり地面へと叩きつける。

「ハッ！」

ズドンと地面に叩きつけた後に真夏はチンピラの顔を上げて一夏がチンピラ目かけて走りだし……

「行つくぞおっ！！」

一夏はチンピラの頭を思いつきり蹴りあげ、チンピラは宙に浮き放物線を描きながら地面へと堕ちた。これぞ三位一体の極み！

オマケ2・「ペンは銃よりも強し…や！」

「ん？あれは……………」

真夏（注：15歳や？）が神室町を夜歩きしているとまだ小学生と思われる子供達が輪ゴム銃で遊んでいた。

「へっへー！次はコイツを飛ばすぞ！」

「な、なあ、それは流石に危ないんじゃない……………」

ガキ大将と思われる子供が輪ゴム銃の上にペンを置いて飛ばそうと
していた。

「大丈夫だって！」

「や、やっぱり危ないって！」

そう言ってもう一人の子供が止めさせようと手を出して二人は言い
争う、

「大丈夫だって言ってるだろ！？離せよ！」

「駄目だって！」

二人が輪ゴム銃を取り合っていると偶然ガキ大将の人差し指にトリ
ガーが掛り……

バシュ！ズボツ！

「フガッ！？」

「うおっ！？」

見事にガキ大将の鼻の穴にペンが刺さり、子供は驚いて手を離すとバランスの崩れたガキ大将はそのままのけ反る様にブリッジ状態になった後……

ゴンッ！

「がはあ！！」

「う、うわあ！！た、大変だ！！」

ガキ大将は頭を冷たいコンクリの地面に強打し、ピクピク痙攣しながら意識を落とした。

「ふむ……」

真夏は考える……

- 1「危ない遊びはご法度やなあ…人の事言えへんけど……」
- 2「見事なブリッジやなあ…タツちゃんの技思い出したで…」
- 3「ちょ！鼻の穴にペンって（笑）」

「……………！、閃いた！」

真夏は何処からともなく板と粘土を取り出してこねあげた。

「天啓が……………来た！！」

真夏の考えた天啓……………それは手に二つのペンを指の隙間に挟む様にして持った後、相手の鼻の穴へと入る様にアッパーを炸裂させる技……………名付けて、ペンの極み！

「これはいっただえ……………鼻血は絶対吹かすはな」

二十二話や！「ウチかて…苦手なモンはある！前半」（後書き）

真夏「虫いやぁ……」

一夏「お、落ち着いてまなちゃん」

龍也「アイツでも苦手なもんがあるんだな……」

沙紀「だからってそれで虐めちゃダメだよ？龍也君」

龍也「バツ！？虐めるわけねえだろ！！」

作者「皆さんには苦手な物ってあります？ちなみに、自分は頭使ってます」↑駄目人間

二十三話や！「ウチかて…苦手なモンはある！後篇」（前書き）

真夏「作者の調子が戻った気が！！」

作者「まだ戻ってませんって……」

龍司「バカは風引かん筈なんやけどなあ……」

作者「バカじゃないもん！！」

真島「じゃあアホか？」

龍也「マヌケか？」

沙紀「おたんこなす？」

作者「皆ヒドス……」

「ど、どうしたんだ？」

「はあ……はあ……はあ……駿ちゃん、さっき言いかけた事に付いて
ちよいお話……」

真夏が言いかけた時ツチグモが体を丸め始める、秋山と真島はこの先の展開を予想し顔を苦ませる。

「秋山！作戦変更や！」

「了解！！」

「ちよ！人の話を――――！」

そしてクチグモは体を丸めたまま動き出し、真島達に向かって転がり始めた。

「アカン！ 転がり始めよったで！？」

「逃げましょう！」

「ひいひいひいひいひい！？また来たあ！！！」

真夏は恐怖で秋山に抱きつき、真島はショットガンを構える。

「走れえ！秋山あ！」

「はい！」

そして真夏は半場強制で秋山とタッチダウンした。
その後真島が横からショットガンを乱射し、ツチグモは体勢を崩してひっくり変える。

「ギシャ!？」

「よし今や!！」

「はい!」

「きゅうつうつうつ……」

真島と秋山は銃を構え、ひっくり返ったツチグモに攻撃し真夏はやつと下ろされ、目を回していた。

「ちい!固いで!」

「俺達の銃じゃ歯が立たない!？」

「ギシャアアアアアアア!!!!!」

ツチグモは怒ったのか体を大きく揺さぶり体を起こした。

「アカン、元に戻りよった!」

「このままじゃジリ戦つすよ!！」

「ギシャアアアアアアア!!!!!!!」

真島と秋山は覚悟を決め、二人でツチグモと対峙しようとしたが…

……

「……ふふふふ……」

「！」

「ま、まなちゃん？」

「ギシャ？」

突然聞こえた笑い声に二人と一匹は声を発した人物へと視線を向ける。そこにはリングに出てくる様な呪の女が立っていた。顔はボサボサになった髪で見えず周りの空気が凍った気がした。

「……おどれらあ」

「お、おおおお……」サアと顔を青くする。

「あ、あは、あははは……」やり過ぎたと思い、顔を汗でダラダラと流す。

「ギ、ギシャア……」ガクガクブルブル

「ウチを散々ボール扱いしよつてえ……覚悟は出来てるんやろつなあ……？」

「そ、それは……」

「だねえ……」

真島の打った手榴弾はまっすぐツチグモの……

「グモッ!？」

口に入り……

「ングッ」ゴクリ

飲み込んだ、そして……

ドゴンッ!!

「よっしゃあ!！」

「ぐほっ!？」マトリックスをやって頭をぶつけた。

「ほえ？」

三人の息のあったコンビネーションでツチグモは撃波された。

「よくやったで真夏ちゃん!」

「え?あ、ええ?ウチは今まで何を……」

「………今ので我に返ったか……」

秋山は元の真夏に戻った様で心底安心した様でそこにどっかりと大の字になって呼吸を整えて寝転がった。

（てかあの化物よりまなちゃんが怖いってどうよ……）

その時、後ろから複数の足音が聞こえた。

「「「「「あ”あ”……………」」」」」

「はあ…はあ…あ、あれれ？」

「はあ…はあ…なんやまだいるんかいな」

「うゝ！なんやしらんけどせつかくあの化物もやつつけたのこりやないでえ……………」

真夏はウンザリそうにして腰から銃を構える、だが真夏はそれを取りこぼしてしまい銃を落とした。

「あ、あれ？なんで？」

それどころか立っているのもままならずそのまま経たりこんでしまった。

「まなちゃん！」

「ど、どうしたんや！？」

「わ、わからへん…急に力が入らへんのや」

実は真夏は連日に続く戦いで体が限界に達していた、五歳児が普通此処まで戦える筈が無いだが真夏は戦ってきた。此処まで戦えたのはひと思いに友達や自分が愛した神室町を守りたいと言う信念だけで体にムチ打って戦ってきたからだ。

「た、戦わなあ…神室町を…皆を…」

「まなちゃん！もういい、後は俺達が……（クソ！考えてみればまなちゃんはろくに休んじやいない！？なんで気づかなかったんだ俺は！！）」

「真夏ちゃん……（こないな子供にまで…わしらは何をやってたんじゃ、クソ……）」

自分たちの軽率な行動で真夏を追いこんでた事に苦虫を噛む思いの二人だった。

「真島さん、まなちゃんをここから脱出させないと！」

「言われんでもわぁーとるわ……せやけど」

真夏達の前に群がるゾンビの数が異常でとてもじゃないが二人だけで、ましてや真夏を抱えて切りぬけるのは不可能だった。

「……………！、クソ……………」

真島は噛まれた腕からしたたり落ちる血と痛みに耐える、だがゾンビはお構いなく真夏達を襲う。

「あ”あ”あ”あ”あ”!!」

「クソッ!？」

「まなちゃん!」

「駿ちゃん!？」

真島はショットガンを目の前のゾンビに構え、秋山は真夏と守る様に抱きしめる。その時だった……

ドゴオンッ!!

「」」」」!？」」」」

突然目の前に横から降って来たゾンビにゾンビ達はドミノ倒しの様に倒れ、ゾンビ達は一斉に静止する。
何事かと思いその飛んで来た方向に目を向けると二人の人物が立っていた。

「な、なんやと?」

「」
「……………あ」

真島が驚き、真夏が声を上げる。その先にいたのは……………

「真島さん、あの人達……………」

「そや……関西の龍、真夏ちゃんの親父の――――」

「郷田龍司や……」

「と千冬ちゃん？」

「私はいですか!？」

オマケ「ゴミはゴミ箱に捨てるのがマナーやで？」

「おらぁー!」

真夏（注：ウチは十五歳♪）は行き成り問答無用で男に殴り掛けられた。

「ちょ!？ひゃあ!？」

真夏は間一髪避けて難を逃れる。

「行き成り何するんや!？」

「黙れ!この悪女め!」

「あ、悪女おゝ?」

「隠しても無駄だ!俺の女を病院送りにしやがって!」

「な、何の事や……」

「昨日、俺の女をボッコボコにしたじゃねえか!」

「……………ああ!そう言えば金出せってカツアゲしてきた女がおった様な……………」

「そうだ!」

「完璧あつちが悪いやん…」

「やかましい！とにかく倒させてもらうぞ狸女！」

「カッチーンッ！誰が狸や！！この世紀末モヒカンハーブ！！」

「んだところあ！！」

東城会七代目代行 VS チンピラ
郷田真夏

「アンタ覚悟しいや！」

「おおおおお！！！！」

男は殴りかかり真夏はそれを避ける。

「くそっ！」

「悪いんやけど即効でカタあ付けさせてもらうで？」

真夏はそこらへんに落ちていたビール瓶を拾い構える。

「それで殴ろうつか!？」

「そんなヒドイ事はせえへんって」

「嘘つけ!」

男は再度殴りかかろうとするが真夏は男の伸ばした腕を掴みもう片方の手に持っていたビール瓶を……

「おりゃ!」

「ふごっ!？」

相手の口に突っ込んだ後右腕を下に下ろして……

「空やけどウチのおごりや？」

バキヤアアンツ!!

思いつきり振り上げた真夏の拳は男の顎をとらえビール瓶と共碎いた。

「ぎゃあああああああつ!!!!!!」

男は顎と口を押さえながら倒れ、血塗れのままその場でのたうち回る。

そして真夏は砕けたビール瓶の口の部分をゴミ箱の中に捨てた。

「女の仇見つける前にその女の罪を見つけるんやな？」

真夏はそう言い残しさって行く……これぞ空き瓶を使って相手の顎と口を粉碎する『空き瓶の極み』！！

「ゴミはちゃあんと捨てなアカンで〜」

二十三話や！「ウチかて…苦手なモンはある！後篇」（後書き）

一夏「真夏ちゃん……」

大吾「無理をさせ過ぎちゃったね……」

冴島「むしろ大人何をしとったんじゃ！？」

作者「そうですね」……↑元凶

此処んとこ真夏ちゃん为天啓がエグイ方向に……読者の皆様の考えた天啓…もつと見てみたいですなえ…（チラリ

二十四話や！」「セーラー服と……ガトリング？」「（前書き）

真夏「次はデンドロビウムが出そうな予感」

一夏「そんなの出したら直ぐに終わってるよ……」

作者「真夏ちゃんのISも考えないと……」

二十四話や！「セーラー服と……ガトリング！？」

「おとん……ちー姉ちゃん……」

真夏は秋山に抱かれながら小さく吐く、その声はどこか安心感を得た様な声だった。

そして標的を龍司へと変えたゾンビ達が龍司に襲いかかる。

「ふんっ！……」

そして龍司はあろうことか右手を出してゾンビの噛みつき攻撃を受けた。

「！？、お、おい！！」

「大丈夫や、駿ちゃん……」

「え？」

真夏の言った言葉に首をかしげた、そして龍司は不敵に笑みをこぼして噛みついたゾンビを他のゾンビへぶつけて振りほどき、

「うおりゃあっ！……！！」

そして噛みついたゾンビと共にコートの袖が破れその噛まれた腕が露わになる。

「……鋼の……義手？」
オートメイル

「唯の手やない……あれは……」

キュイーンと龍司の右腕の義手が唸り始め、そして龍司が手握ると同時に腕が変形し始めた。

「鋼鉄の竜砲……」

そして龍司の腕が変形し終わった。

「黒金丸や……」

大型のガトリング砲が姿を現した。

「なんだあ!？」

「あれがおとんの腕や（あれ？教えてへんかったっけ？）」

その変形が終わると次に動き出したのが千冬だった、ゾンビ達も動きだし千冬にも襲いかかろうとする。

「千冬の嬢ちゃん!!」

「千冬ちゃん!!」

危険と判断し真島と秋山が叫んだが……

「ふんっ!!」

千冬は背中に掛けてあったデカイ袋を振りましてゾンビ共をなぎ倒した後袋を掴みビリビリと破って中の物を取り出す、

「私は射撃が苦手だな？これで我慢してくれ」

そう言つて千冬が取り出した物は……

「……マジかいな」

「うそーん……」

「下手な銃も数撃ちや当たるつちゆう事が、でもそれは規格外やで……ちー姉ちゃん……」

龍司とは違うが、千冬が持っていたのは金色に輝くガトリング砲……カグツチだった……

「久しぶりや……」

「ゾンビでは役不足だが……」

「暴れさせてもらつて！」

「暴れさせてもらつぞ！」

多銃身の砲火がこの場に響いた……

所変わって此处神室町隔離エリア内劇場前通り、そこに一夏はいた。

「うゝん…まなちゃんの事だから隔離エリアでゾンビ狩りしてると思っただけど……」

真夏を訪ねて神室町……一夏は真夏を探し続けていた、一緒にいた冴島は六代目の護衛をする。残っている。

「ここにはいないか……うゝんどうしよう」

一夏は頭をひねり真夏の行きそうな場所を考える。

「スターダスト？いやこんな時に行くわけ……行くよな、まなちゃんなら……ボーリング？いやまだ解放してないし……ドン・キ・ホーテか？うゝん、どこだろう……」

一夏が考えていると近くから悲鳴が聞こえた。

「！、悲鳴？……女性の声……まさか！？」

一夏は悲鳴が聞こえた方へと走る、

（無事でいてくれ、まなちゃん!!）

一夏は掛け出し、悲鳴の聞こえたポツポツ店近くのでデカマツチヨに迫られている少女を見つける。

「まなちゃん!!」

一夏は急いで肩に掛けていたライフルを構え、弾丸を放つそして弾はデカマツチヨの背中に当たる。

「グオオオオオオオッ!!!!!!」

「ヒ……」

「クソ! やっぱかてえ!」

デカマツチヨは少女から一夏へと標的を変えて迫ってくる、だが一夏は焦らずにライフルの標準を合わせる。

（まなちゃんの言ってた通りに……引き金は引くんじゃ無く絞る様に狙う……!）

ズガンッ!と一夏が放った弾丸が放たれ吸い込まれる様にデカマツチヨの急所である顔に当たり……

「グオオオオオオオオオ……」

ズドンッ言っ地響きと共に倒れ伏した。

「……………プハア！…はあ…はあ…」

一夏はライフルを構えている間、息を止めていたのか荒い息でライフルを下ろす。

「……………ふう…撃つ感覚は何時まで慣れない物だ……………」

そう言つて一夏はライフルを肩に掛け直し、少女に近付くそして一夏はある事に気づく。

「あれ？」

一夏はどんどん近づいてゆくとその人物は真夏と思っていた者が違う者であつたと言つ事に気が付いた。

「誰？」

「あ……………え、えつと……………」

その少女は青い髪をした同年代と思われる短髪でミニツインテイルの女の子だつた。

「……………まなちゃんじゃなかった？」

「え、えつと……………まなちゃん……………て？」

はぁと息を吐いて肩を落とす一夏、少女を助けたのはいいが探していた人とは違つ事に落胆する一夏であつた。

「……落胆しててもしかたねえか…」

「あ、あの……」

「とりあえず、この子を隔離エリアの外に連れていかないと」

「え？あ、あの私……」

「怪我してねえか？歩けるか？」

「あ……う、うん…大丈夫…」

「そうか、なら行こう」

そう言つて一夏は少女に手を差し出す、少女はおずおずと一夏から差しのべられた手を握り立たせて貰った。

「ふう…まあこっちに来てよかったよ、俺がこなかったらどうなっていた事が」

一夏は笑い、少女は一夏の笑顔を見て顔を赤らめる。

「あ……え、えつと…あの…あ、ありが……」

「おっとそろそろ行かねえと、銃声でゾンビが集まってくる」

「！？、ぞ、ゾンビ……！」

少女はさっきの事を思い出したのか一夏にしがみ付き震える。

「あゝえつと…大丈夫だ心配するな」

「……………」フルフル

「……………怖かったよな」

「……………え…」

一夏は少女の頭をポンと撫でる。

「よく生き残ってくれたよ、ホント…助けられなかったら、まなちやんに顔を合わせられなかったよ」

「あ……………うん…」

一夏はあやす様に少女の頭を撫で続ける、撫で続けられた少女はじよじよに顔を赤らめて行く。

「さて！もう大丈夫か？」

「え？……………」

「もう怖く無いか？」

「あ……………」

何時の間にか少女は自分の恐怖心が消えた事に気づき驚く、

「大丈夫そうだな……………それじゃあ脱出しよう何。安心しろ……………俺が安全な場所まで一直線に連れてってやるから」

「……………うん」

そう言つて一夏は少女の手を握り隔離エリアの外まで少女をエスコートしたのであった……

視点・「郷田真夏」

ウチは目の前の戦場、もとい惨状を駿ちゃんに抱かれながら見守っていた。

「なんて人だ……まったく」

「あの二人に勝てる人つて絶対、いや一人おるな……」

認めたくないんやけどな……

「キツヒビビビ、なんや凄腕やないか真夏ちゃんの親父は」

「てか義手って聞いてたけど……」

「ん？あのガトリングの事言うてへんかった？」

「義手ってのは聞いてたけど、ああなるなんて聞いてないよ」

アカン、言い忘れておったか？ともう片付いた様やな……

「終わったな（…お前は、何しようとしとるんや…テツ……）」

「ええ、ほとんどは片付きましたね……」

そう言っておとんとちー姉ちゃんは武器を下ろす、これじゃ規格外
やのうて鬼畜外や。

「……真島さんやな？東城会の」

「そや」

「……テツは…二階堂はワシが止めるつもり」

「なんや仲間割れかい」

「ワシは近江連合を破門にされた見や、極道やあらへん」

「一人でやんのか？」

「そのつもりや」

「龍司さん！私も……」

「千冬嬢ちゃんを巻き込む訳にはアカンのや」

「で、でも……」

「なんやおとん一人でやるつもりかいな……」

「それと……真夏」

「うん？なんやおとん」

おとんが近づいてきてウチは駿ちゃんから下りて立つとおとんが目の前まで来て……

「……………フンッ！」

ドゴンッ！

「ぶぎゃー！！??」

「あ」

「おー痛そうやな……」

（あれは痛い……）

いきなりウチの頭頂部にドゴンという鈍い打撃を受け、おもわずし

やがみ込んでしまったんや。

「~~~~~!?!」

目の前にバチバチと火花が散ったような錯覚、頭頂部を触るとポツコリとタンコブができてきて……。

頭がジンジンしだしてだんだん激痛が増してくる。
目からポロポロと涙が流れる。

「い、いひゃい………」

「このドアホ!!!」

なんでウチが拳骨がまされるん!?!?

「やっと出れた………」

「はあ……はあ……」

「大丈夫か？」

「う、うん……平気……」

一夏は無事少女を隔離エリアから脱出させた、少女は少し疲れたのか肩で息をしている。

「此処までくればもう大丈夫だろう……」

一夏達がいるのは喫茶店アルプス前である、一夏は前まで無事だったエリアが隔離エリアになっている事に驚いたが、なんとか少女を脱出させる事に成功した。

「それじゃ俺はこれで」

「あ！……」

「ん？」

少女は突然一夏の裾を掴んだ。

「あ……え、えつとお……」

「？」

「あ、あの！……そのお……」

「……ん？ケータイが……！」

一夏は表情を変えて焦りだす、

「わりい！友達が見つかったから俺いかねきゃ！」

「え……」

「じゃあな！」

「あ、あの……！」

「な、なんだ!？」

少女は顔を真っ赤にして何かに伝えようとする。

「な、名前……名前……教えて……」

「……一夏だ、織斑一夏だ。じゃな！」

「あ……」

一夏は急いで走り隔離エリアのある方へと走って言った。

少女は一夏の名前を何度も言っただけで忘れぬ様に胸に刻みつける。

「織……斑……君……織斑……君……一夏……君」

自分で一夏の名前を呼んで顔を赤くする少女、そして少女はある重大な事に気づく。

（……私の名前……教えてなかった……）

少女は残念そうに肩を落とし、すでに見えなくなっている一夏にポツリと吐く。

「……私の名前は……簪……更識、簪……」

簪は自分の名を言って既に隔離エリアにいるであろう一夏^{ヒーロー}を見続けた……

オマケ・「天国と地獄の大技」

「うおりゃあああああああ!!」

真夏（ウチは15…もう面倒や）はまたそこらへんのチンピラに喧嘩をふっかけられた。

「はあっ！」

真夏はそれをかわした後大きく飛び太ももで相手の頭を挟む、

「ふんどっ!!」

「うおっ!!」

そして相手のチンピラは立ったまま真夏の太ももで上を向く感じで顔を固定される。

「何発耐えられるか為したる!!」

そして真夏の連続パンチが炸裂する。

「おりやりやりやりやりやりやりやりやりやりやりやり!!!!!!」

「あばばばばばばばあっばばばばばばばあばばばばばばば!!!!!!」

真夏の連続パンチは顔を固定されており必然的にチンピラの顔を正確に殴り続ける。

「りゃあ!!……最後に言い残す事はある?」

「……ふ、太もも最高……」

「死に晒せや」

ドゴンツと最後に強烈なパンチで体ごと沈ませた。

「まったくレディの扱いがなつとらんで……まったく！」

真夏はブンブン怒りながらその場を去る、これぞ太ももで相手の頭を固定してヘッドリンチする天啓『太ももの極み』！！ただし女子限定。

「あゝ股がヒリヒリするわぁ……」

二十四話や！」「セーラー服と……ガトリング？」「（後書き）

真夏「いっちゃん誰やあの可愛い子ちゃんは!？」

一夏「い、いや名前聞く前に別れちゃって……」

真夏「それに惜しみなくニコポ、ナデポ出しおってからに……ムキ
イ……!」

一夏「まなちゃん!？」

作者「さて出ました原作に女の子……どうかかわっていくだろうか
……ご期待に添えられるよう頑張ります!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7589v/>

IS いとこが如く

2011年12月3日02時53分発行